

島原市文化財調査報告書 第16集

もりたけじょう

# 森岳城跡石垣調査報告書

2016

島原市教育委員会







## 例 言

- 1 本書は、島原市教育委員会が平成24年度から平成26年度にかけて実施した、森岳城跡の石垣現況調査の成果を収めたものである。
- 2 本調査の調査地は島原市城内一丁目・二丁目・三丁目・先魁町・新馬場町・桜門町・江戸丁に所在する。
- 3 本調査は、島原市教育委員会社会教育課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。  
教育長 宮原 照彦  
課長 松本恒一  
班長 徳永和成  
主任 宇土靖之  
主査 林田 崇  
肥前島原松平文庫 管理員・学芸員 吉田 信也
- 4 石垣写真撮影、計測、現況調査、絵図撮影は、株式会社とっぺんに委託して行った。
- 5 本書は、宇土、吉田、田中（株式会社とっぺん）が分担執筆し、各執筆分担は、目次に記した。編集は宇土と田中が行った。
- 6 第1章第3節島原城の縄張については、佐賀大学教授 宮武正登教授による島原城の長崎県史跡指定時の所見から引用させていただいた。また、付編 島原半島の地質と石材産地については、長崎県立島原高等学校 寺井邦久先生の玉稿を賜った。
- 7 調査で得られた資料のすべてを島原市教育委員会で保管している。

## 凡 例

- 1 森岳城跡は、埋蔵文化財として周知されているが、本書では近世城郭の名称としては「島原城」を用いる。
- 2 表示した方位は、すべて平面直角座標系（第I系）による座標北（G.N.）である。
- 3 原則として、測定値はm単位を使用し、図版の縮尺は状況に応じて適宜その縮尺を設定して掲載した。

なお、調査および本書の刊行にあたっては、以下の方々から御協力、御指導を頂いた。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

近江俊秀（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官）、島原城振興協会、長崎県立島原高等学校、長崎県立島原商業高等学校、島原市立島原第一中学校、島原市立島原第一小学校、島原裁判所、長崎歴史文化博物館、九州大学付属図書館付設記録資料館、熊本県立図書館、佐賀県立図書館、臼杵市教育委員会、西尾市岩瀬文庫、北垣聰一郎、岡林隆敏（長崎大学名誉教授）、宮武正登（佐賀大学教授）、松尾卓次（島原市文化財保護審議会会長）、片山弘賢（瑞雲山本光寺住職）、市川浩文（佐賀県立名護屋城博物館）、林 昭男（彦根市教育委員会）、下高大輔（彦根市教育委員会）、長井大輔（雲仙岳災害記念館学芸員）、寺井邦久（長崎県立島原高等学校）、林田智恵（島原市観光おもてなし課）、田中由里子

# 目次

第1章 島原城の概要・・・・・・・・・・・・・1	第9節 絵図・・・・・・・・・・・・・65
第1節 位置と環境・・・・・・・・・・・・・1	☆修補絵図および関連資料・・・・・・・・・・65
第2節 島原城の歴史・・・・・・・・・・・・・3	☆補遺・・・・・・・・・・・・・101
(1) 中世・・・・・・・・・・・・・3	☆その他・・・・・・・・・・・・・106
(2) 築城まで・・・・・・・・・・・・・3	
(3) 築城後・・・・・・・・・・・・・4	第3章 危険石垣とその保存修理・・・・・・・・149
(3) 廃城後・・・・・・・・・・・・・5	第1節 危険石垣の分布・・・・・・・・・・149
	第2節 近年の石垣保存修理・・・・・・・・157
第3節 島原城の縄張・・・・・・・・・・・・・10	(1) 経緯・・・・・・・・・・・・・157
(1) 立地・・・・・・・・・・・・・10	(2) 施工体制・・・・・・・・・・・・・157
(2) 本丸・・・・・・・・・・・・・10	(3) 施工概要・・・・・・・・・・・・・158
(3) 天守・・・・・・・・・・・・・10	(4) 工事作業概要・・・・・・・・・・159
(4) 二ノ丸・・・・・・・・・・・・・11	第3節 今後の石垣保存修理計画・・・・・・・・165
(5) 三ノ丸（藩主屋敷）・・・・・・・・11	
(6) 外曲輪と各虎口・・・・・・・・11	
第4節 近年の文化財調査・・・・・・・・13	石垣調査票・・・・・・・・・・・・・167
(1) 埋蔵文化財・・・・・・・・・・13	
(2) 建造物・・・・・・・・・・・・・19	
第2章 石垣調査の概要・・・・・・・・・・・・・21	付編 島原半島の地質と石材産地・・・・・・・・437
第1節 調査の目的・・・・・・・・・・・・・21	
第2節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・21	
第3節 城内の石垣の現況・・・・・・・・29	
(1) 本丸・・・・・・・・・・・・・29	
(2) 二ノ丸・・・・・・・・・・・・・33	
(3) 堀外周・・・・・・・・・・・・・34	
(4) 三ノ丸・・・・・・・・・・・・・35	
(5) 外郭線石垣・・・・・・・・・・35	
第4節 石垣の分類と分布・・・・・・・・39	
第5節 石垣の刻印と矢穴について・・・46	
(1) 刻印について・・・・・・・・46	
(2) 矢穴について・・・・・・・・47	
第6節 水路調査について・・・・・・・・48	
第7節 屋敷石垣・・・・・・・・・・・・・53	
第8節 石造物・・・・・・・・・・・・・59	

# 挿図目次

第1図	島原城位置図	1	第41図	本丸天守閣 北から	29
第2図	島原城周辺図	2	第42図	本丸北側 東から	29
第3図	近年の文化財調査位置図	13	第43図	本丸東側帯曲輪 北から	30
第4図	調査地近景 (東から)	14	第44図	本丸南側帯曲輪 東から	30
第5図	調査地近景 (南東から)	14	第45図	本丸櫓形虎口 西から	30
第6図	石列及び礎石 (東から)	14	第46図	本丸櫓形虎口 南から	30
第7図	石列検出状況・奥は再現天守閣 (南から)	14	第47図	石垣1420の現状	31
第8図	石列 (西から)	14	第48図	櫓形虎口 巨石計測図	32
第9図	石垣解体状況 (西から)	15	第49図	昭和初期に増設された道	33
第10図	石列状遺構 (西から)	15	第50図	右が石垣1401 左が石垣2408	33
第11図	雨水流出状況 (南から)	15	第51図	二ノ丸内部 北から	34
第12図	栗石層目詰り状況 (北から)	15	第52図	二ノ丸内部東側 北から	34
第13図	遺構検出状況 1 (東から)	16	第53図	二ノ丸東側堀内部	34
第14図	遺構検出状況 2 (東から)	16	第54図	本丸西側堀内部	34
第15図	調査地 (東から)	16	第55図	三ノ丸石垣4004	35
第16図	石組溝 (西から)	16	第56図	三ノ丸石垣隅角部40024003	35
第17図	井戸 (西から)	16	第57図	外郭線石垣隅角部80078008	36
第18図	礎石 (西から)	16	第58図	外郭線石垣5002	36
第19図	硬化層 (南から)	17	第59図	外郭線石垣5018~5020 (櫓台)	36
第20図	土層状況 (南から)	17	第60図	右が石垣7007、左は城内	36
第21図	土層下部拡大 (南から)	17	第61図	悉皆調査、聞き取り調査地点図	38
第22図	土層状況 (南西から)	17	第62図	石垣の分類 1	40
第23図	調査地 (東から)	17	第63図	石垣の分類 2	42
第24図	石垣 (北東から)	17	第64図	石垣の積み替えと修復記録との比較	44
第25図	石組塹坑と暗渠天井石 (東から)	18	第65図	島原城刻印配置図	46
第26図	暗渠内部 (南から)	18	第66図	南天島石切丁場	47
第27図	調査坑完掘状況 (南から)	18	第67図	南天島石切丁場の矢穴石	47
第28図	同湧水 (南から)	18	第68図	石垣1239の前面に残る矢穴石	47
第29図	敷地内の段差 (南から)	18	第69図	海岸に残る矢穴石	47
第30図	島原城御馬見所	19	第70図	宇土山石切丁場矢穴石 1	47
第31図	鶴殿家住宅旧主屋	19	第71図	宇土山石切丁場矢穴石 2	47
第32図	鉄砲町景観	19	第72図	水路調査図	49
第33図	山本家外観	20	第73図	森岳城図 八幡神社 (島原)	50
第34図	清掃の様子	21	第74図	〔興慶園図〕 本光寺1886	50
第35図	地籍図 (明治29年)	21	第75図	島原城城郭図 本光寺771	50
第36図	地籍図 (昭和30年代)	21	第76図	興慶園 (泉水屋敷) 推定位置図	50
第37図	地籍図合成図	22	第77図	調査地点⑧屋敷敷地内へ続く水路	51
第38図	年度別台帳作成状況図	22	第78図	調査地点⑧屋敷内庭園池	51
第39図	三ノ丸・外郭線石垣配置図	23	第79図	調査地点⑧小早川邸に残る矢穴石	51
第40図	森岳城石垣配置図	24	第80図	調査地点⑧屋敷地内を流れる水路	51

## 挿図目次

第81図	調査地点④常盤屋敷内の庭園池	51	第95図	打ち込み剥ぎ布積み	58
第82図	調査地点④常盤屋敷からの排水口（計石）	51	第96図	打ち込み剥ぎ乱積み	58
第83図	調査地点⑥田町門横の水路跡	51	第97図	切り込み矧ぎ布積み	58
第84図	調査地点⑤の排水口	51	第98図	亀甲積み	58
第85図	調査地点②に残る橋	52	第99図	石垣+イタビカビラ	58
第86図	調査地点②蛇行する水路	52	第100図	石垣+生垣	58
第87図	調査地点②井戸跡と洗い場	52	第101図	石垣I-9-E-2_SW1_12_1	58
第88図	調査地点⑩水路	52	第102図	軒裏垂木を有する石祠	59
第89図	調査地点⑫古丁水源	52	第103図	石造物分布図	60
第90図	調査地点⑮の排水口	52	第104図	石祠I-9-F-3_1	61
第91図	島原市大グリット図	53	第105図	石祠I-8-G-9_2	61
第91図	島原市中グリット図	53	第106図	石祠I-9-E-1_3	61
第92図	島原藩土屋敷図	54	第107図	切支丹「IHS」石碑	61
第93図	屋敷石垣分布図	55	第108図	危険石垣分布図	149
第94図	野面積み乱積み	58	第109図	石垣断面データ	150
			第110図	平成25年度石垣修復箇所	158

## 表目次

第1表	島原城関連年表	7	第3表	石造物一覧表	62
第2表	屋敷石垣一覧表	52	第4表	石垣計測値一覧表	153

## 写真図版

写真図版1	447
1. 南高来郡役場・東堀端 大正末期（島原市）	
2. 昭和初期の時鐘楼『島原の今と昔』島原市政施行50周年	
3. 昭和初期（本丸架橋前）の島原城全景（植木家所蔵写真）	
4. 三ノ丸東側石垣 昭和6年頃『島原高校100年のあゆみ』	
5. 三ノ丸東側石垣 昭和14年『島原高校100年のあゆみ』	
6. 二ノ丸東側昭和8年頃（第一小学校資料館）	
7. 「（島原名勝）島原城ヨリ中学。女学。小学ノ各校を望ム」絵葉書（肥前島原松平文庫）	
写真図版2	448
8. 米軍航空写真 島原城拡大 昭和22年（国土地理院）	
9. 米軍航空写真 本丸・二ノ丸拡大 昭和22年（国土地理院）	
写真図版3	449
10. 「島原城趾」『島原半嶋史上巻』昭和29年	
11. 島原城本丸南東（肥前嶋原松平文庫）	

- 12. 「森岳城址」 『島原半嶋史上巻』 昭和29年
- 13. 航空写真 昭和28年 「表紙・裏表紙」 『市勢概要』 昭和33年
- 14. 本丸・二ノ丸航空写真 昭和37年頃(肥前嶋原松平文庫)

写真図版 4 . . . . . 450

- 15. 二ノ丸北東 昭和32年水害時(島原図書館)
- 16. 昭和32年水害時 堀北西か「森岳城の堀」 (肥前嶋原松平文庫)
- 17. 昭和32年水害時 堀南東「城跡の堀」 (肥前嶋原松平文庫)
- 18. 昭和32年水害時 堀南東「堀の排水溝陥没」 (肥前嶋原松平文庫)
- 19. 南堀端道路法務局前 昭和32年水害時 (島原市)
- 20. 南堀端道路法務局前(肥前嶋原松平文庫)
- 21. 堀の家 本丸と二ノ丸の間 木田正巳氏史料(肥前嶋原松平文庫)
- 22. 堀の家 本丸二ノ丸の間 昭和32年水害時 木田正巳氏史料(肥前嶋原松平文庫)

写真図版 5 . . . . . 451

- 23. 本丸より市役所方向 『市勢要覧』 昭和32年
- 24. 島原城全景 『市政要覧』 昭和36年
- 25. 天守台 『史跡巡り』 昭和33年
- 26. 「天守閣工事起工式」 昭和38年3月 (島原市)
- 27. 天守建設\_昭和39年(肥前嶋原松平文庫)
- 28. 「表紙」 『市勢要覧』 昭和40年
- 29. No.1409石垣矢狭間建設\_昭和40年頃(肥前嶋原松平文庫)
- 30. 社会福祉従事者研修所(現森岳公民館)建設予定地 『広報しまばら』 昭和44年

写真図版 6 . . . . . 452

- 31. 三ノ丸南側石垣 現第1小学校グラウンド (第一小学校資料館)
- 32. 三ノ丸南側石垣 現第一小学校グラウンド (第一小学校資料館)
- 33. 二ノ丸・三ノ丸 昭和47年頃 (島原市)
- 34. 二ノ丸・三ノ丸 昭和47年 (島原市)
- 35. 「島原城図書館の通り」 (島原図書館)
- 36. 東堀端通り 昭和33年(島原市)
- 37. 外塁線東側櫓台跡 昭和55年頃(島原市)
- 38. 三ノ丸 昭和56年 (第一小学校)

# 絵図資料

## 第2章9節掲載一覧

### ☆修補絵図および関連資料

- 1-1 〔島原城之図〕（1672・寛文12）本光寺788
- 1-2 〔幕府老中連署奉書〕本光寺175
- 1-3 旧島原城内外図絵 松平文庫 絵図6
- 2-1 戊九月廿日夜嶋原城外曲輪櫓々所焼失之図（戊〔1682・天和2〕）本光寺30-1
- 2-2 戊九月廿日夜嶋原城外曲輪櫓々所焼失之図（戊〔1682・天和2〕）本光寺30-2-1
- 2-3 戊九月廿日夜嶋原城下火事之所江戸へ遣候下書（戊〔1682・天和2〕）本光寺30-2-2
- 3-1 肥前国嶋原城先菟門脇石垣破損図（1683・天和3） 本光寺23
- 3-2 〔幕府老中連署奉書〕本光寺33
- 4-1 肥前国嶋原城絵図（1684・貞享元）本光寺24
- 4-2 〔幕府老中連署奉書〕本光寺155
- 5-1 肥前国嶋原城石垣破損所図（1689・元禄2） 本光寺1
- 5-2 〔幕府老中連署奉書〕本光寺161-1
- 6-1 肥前国嶋原城石垣破損所図（1695・元禄8）本光寺25
- 6-2 〔幕府老中連署奉書〕本光寺34
- 7-1 島原城外曲輪石垣崩候絵図（1700元禄13・正月）本光寺21-1
- 7-2 〔島原城外曲輪石垣崩修覆願ノ添図〕（1700・1・元禄13・正）本光寺22
- 7-3 〔幕府老中連署奉書〕本光寺246
- 7-4 口上之覚 本光寺21-2
- 8-1 〔島原城石垣崩修覆願図〕（1700・6・元禄13・6） 本光寺26
- 8-2 〔幕府老中連署奉書〕本光寺241
- 9-1 嶋原城堀石垣崩所之絵図（1706・宝永3） 本光寺27-1
- 9-2 口上之覚 本光寺27-2
- 10-1 肥前国嶋原城絵図（1719・享保4）本光寺29
- 10-2 本丸之内石垣崩所伺絵図之覚書 本光寺28-2
- 11-1 肥前国島原城絵図（1746・延享3） 本光寺17
- 11-2 〔絵図封筒〕本光寺840
- 11-3 〔幕府老中連署奉書〕本光寺268
- 11-4 〔覚書封筒〕本光寺28（10-2、11-5が入る）
- 11-5 嶋原二丸北之方外堀端石垣壱箇所 崩所如元築直願相済候覚書 本光寺28-2
- 12 肥前国嶋原城絵図（1790 寛政2）長崎歴史文化博物館3-740
- 13 島原城絵図（1797・寛政9）西尾市岩瀬文庫 子一153
- 14-1 肥前国嶋原城絵図（1810・文化7）本光寺1918
- 14-2 〔島原城絵図〕（〔1810・文化7〕） 本光寺1868
- 15・肥前国嶋原城当八月八日風雨之節破損所之覚 本光寺115（1829・文政12）
  - ・肥前国嶋原城絵図 松平文庫72-83
- 16 肥前国嶋原城絵図（1840・天保12） 九大文化史 元山174-214

☆補遺

- 1 老中連署奉書（1675・延宝3）本光寺32
- 2-1 老中連署奉書（1728・享保13）本光寺242
- 2-2 扣（〔1728・享保13〕）本光寺161-2
- 3 〔絵図奉書等包紙〕本光寺1036
- 4 御鉄炮櫓大御修覆諸入用勘定帳扣（1864・元治元） 松平文庫 市費購入811-1

☆その他

- 1 幕府隠密復命書（筑前筑後肥前肥後探索書）（部分） 長崎歴史文化博物館13-296
- 2 三ノ丸絵図 松平文庫72-89
- 3-1 興慶園御住居替新建御家差図 本光寺1885
- 3-2 〔興慶園図〕 本光寺1886
- 4 御在城割場御人数建場絵図 本光寺3
- 5 〔島原城内諸役配置図断簡〕 本光寺1683
- 6 島原城之図 臼杵市教委 ①-86
- 7 嶋原之城図（〔日本古城絵図〕西海道之部（1）322） 国立国会図書館
- 8 肥前国嶋原城絵図（〔日本古城絵図〕西海道之部（1）321） 国立国会図書館
- 9-1 島原城城郭図 本光寺771
- 9-2 島原城郭内図 松平文庫 絵図7
- 10・島原城下図（鉄炮町） 本光寺771  
・〔城下図断簡〕 本光寺M1897
- 11-1 惣直シタル図（島原城図） 臼杵市教委②-15
- 11-2 惣直シタル図（島原城図） 臼杵市教委②-151
- 12 肥前嶋原之城 臼杵市教委②-116
- 13 〔島原城図〕 臼杵市教委371
- 14 〔肥前嶋原之城図〕 臼杵市教委99
- 15 肥前国高来郡嶋原城図 佐賀県立図書館 郷0921
- 16 肥前国嶋原城内外の絵図 熊本県立図書館 17-352
- 17 島原城下図 九大文化史 松木354
- 18 島原惣町大變前図 九大文化史 長沼1776
- 19 島原惣町之図 九大文化史 元山243
- 20 島原城内外古図 松平文庫 絵図5
- 21-1 森岳城図 八幡神社（島原）
- 21-2 森岳城図 松平文庫 絵図8
- 21-3 森岳城図 松平文庫 絵図9
- 21-4 嶋原大變後図 松平文庫72-81
- 21-5 嶋原大變前後図 松平文庫 絵図1  
・前図  
・後図
- 22 〔島原城周辺図〕 臼杵市教委 ①-32
- 23 〔嶋原城・普賢岳周辺図〕 臼杵市教委 ②-96



- 2 4 嶋原合戦絵図 臼杵市教委 ②-303
- 2 5 量地拾間一分之図-杉谷村 本光寺 792-4
- 2 6 ・ 島原藩領図 (断簡) 本光寺118
  - ・ 〔島原領分図断簡〕 本光寺M1896
  - ・ 島原全図 松平文庫72-79
- 2 7 〔島原領要害略図〕 臼杵市教委97
- 2 8 〔島原半島周辺図〕 臼杵市教委 ②-27
- 2 9 〔島原半島図〕 臼杵市教委105
- 3 0 島原半島図 臼杵市教委 ②-91
- 3 1 大村／島原／平戸／五島旧城郭調帳 長崎歴史文化博物館 13-2-2

## 第1章 島原城の概要

### 第1節 位置と環境

島原城が所在する島原半島は、長崎県南東部の有明海と橘湾に胃袋状に突き出した半島で、東西24km、南北32km、面積463km<sup>2</sup>で、海岸線の総延長は約130kmである。中央部は雲仙岳を中心とした国立公園であり、海岸線一帯は、島原半島県立自然公園となっている。

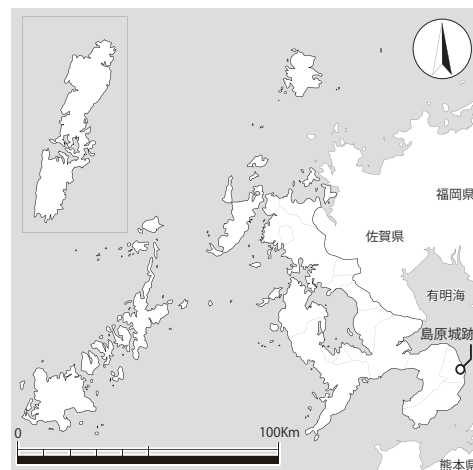
島原半島は、地質・地形的に北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別でき、半島の中央に位置する雲仙岳は主峰の普賢岳（1,359m）をはじめ国見岳（1,341m）、妙見岳（1,334m）野岳（1,147m）、九千部岳（1,062m）などからなる更新世の複合火山で、角閃石安山岩を主要成岩としている。半島の4分の3を占める雲仙火山地域の溶岩円頂丘を中央として、北部・東部・南東部に火山性扇状地が発達し、裾野は、有明海に延びる。南部の南島原火山地域は、第三紀層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地であり、起伏に富む地形をなしている。島原半島の中央部には北縁を千々石断層、南縁を金浜―布津断層とする幅約9kmの雲仙地溝と呼ばれる陥没地帯が東西に走っている。半島東海岸沿いの北縁は地表に明瞭な断層が認められないが、ボーリング調査の結果から、基底層が島原城付近から南方向への傾斜が始まり、広馬場付近で急激に落ち込む状況が確認されている。

島原市は、半島の北東部に位置し、北に雲仙市、南に南島原市と接する。有明海を隔てて東には、熊本県が位置する。島原城は普賢岳の東側に形成された火山砕屑物からなる扇状地の東端に築城されている。城の北側は、以前は沖田原と言われる水田地帯であり、沖田畷合戦で龍造寺軍が南進し主戦場となった場所と考えられる。近年は郊外型の大型店舗が進出している。東側は、築城と共に南東部に商家街を築いたほか、北部同様田園が広がっていたが、明治以降、鉄道や国道の開通により都市化が進んでいる。西側は、南寄りに下級武士の屋敷（鉄砲丁）が広がり、現在も住宅地となっているが、当時の町割りや通路中央の水路が残されている。南側は、中世の「浜の城」の城下町が島原城築城以前から存在していたと考えられ、現在でも島原市の商業の中心地である。大手門の東の河口には、北から南へと長い砂嘴が延び、入江の内側には塩田や倉、藩の船手が設けられていた。この入江は、天保八（1837）年から翌年にかけて「三好屋」の屋号を持つ豪商中山要右衛門が干拓を進め（現：新田町）、現在の地形となっている。砂嘴の南端には矢穴の残る石材が確認出来る。

普賢岳は有史以降の噴火で、溶岩を3回流出している。江戸時代には寛文三（1663）年の古焼溶岩と寛政四（1792）年の新焼溶岩の流出が記録に残されている。寛政四年四月朔日には、「島原大変」と呼ばれる眉山の大崩落が発生、崩落した土砂が有明海に流れ込み発生した大津波が、島原半島と対岸の肥後、天草の沿岸を襲い島原半島で約1万人、肥後、天草で約5千人が犠牲となった。

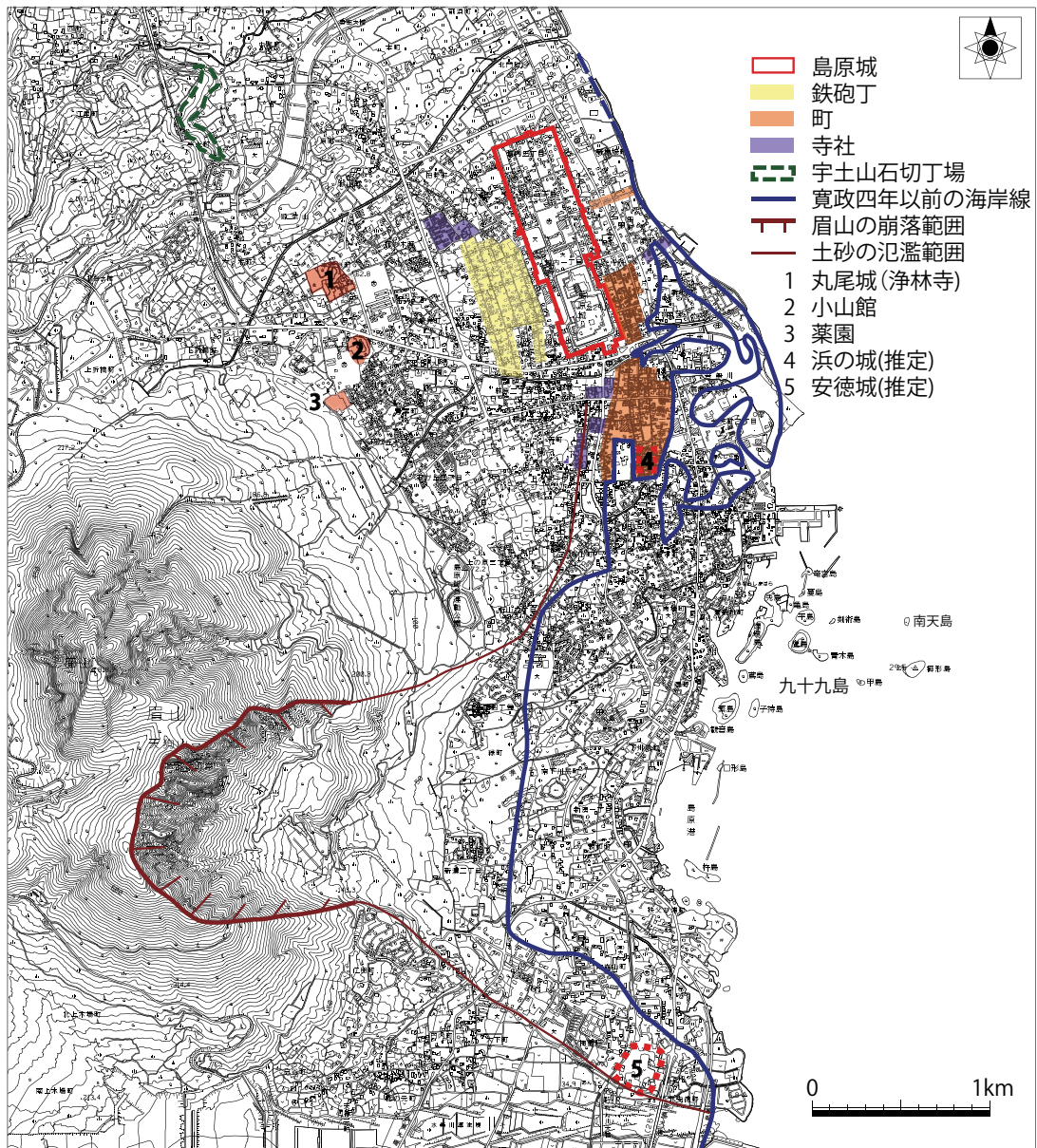
この眉山の山体崩壊と津波の影響で、浜の城から南側は、現島原第二中学校付近にあった海岸線が現在の海岸線まで大きく前進している。眉山東側の海岸線は最大約1km東へ広がっている。また、平成3年の噴火では、火砕流（火砕サージ）を伴う噴火活動で多くの被害をもたらした。火砕流や大規模な土石流の発生と、防災事業による砂防ダムや導流堤の建設が進められ杉谷地区中尾川と安中地区水無川流域の景観は、近年大きく変わっている。

島原半島は上記のように、火山活動により形成された地形であるため、築城に必要な石材は領内から



第1図 島原城位置図 S=1/20000

比較的容易に入手出来たと考えられる。島原城付近の丁場としては、城の北西に位置するおよそ50万年前の溶岩流である宇土山の東斜面に矢跡がある石材が残されている。また、島原大変による山体崩壊でできた大小の島々からなる「九十九島」では、幕末の『御石垣修復控』によれば「沖之島」での石取や、「南天島」での石見分のが行われている記録が残されている。沖ノ島は現在消失しているが、南天島では矢跡の残る石材が確認できる。いずれの場所も今後、詳細な調査が必要である。



鉄砲丁と町・寺の配置は『島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』を参考とした。  
海岸線と眉山崩落範囲及び土砂氾濫範囲は『島原大変』を参考とした

第2図 島原城周辺図 S=1 / 35000

【参考文献】

入江 潤 1972 『島原の歴史 藩政編』 島原市  
 長崎県総務部消防防災課編 1998 『雲仙・普賢岳噴火災害誌』 長崎県  
 (財)砂防フロンティア整備推進機構編 2003 『島原大変』 雲仙復興事務所  
 長崎県総務部危機管理・消防防災課編 2005 「雲仙活断層群に関する調査」 『平成16年度地震  
 関係基礎調査交付金 成果報告書』 長崎県  
 宮本雅明編 2009 『島原鉄砲町—島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』 島原市  
 教育委員会



## 第2節 島原城の歴史

## (1) 中世

鎌倉期以降、有馬氏は島原半島南部を拠点とし、天文八（1539）年に家督を継いだ有馬晴純の頃には肥前東部にまで勢力を拡大し、小城郡牛津川以西を領地とした。その後、義貞、義純の頃には龍造寺隆信に圧迫され、晴信が当主となった元龜二（1571）年以降は、島原半島内も龍造寺隆信に攻められている。晴信は天正八（1580）年に洗礼を受けてドン・プロタジオの洗礼名を持ち、以後は熱心なキリシタンとなり、キリスト教を保護。領内には教会やコレジオ、セミナリオが建設されるなどキリスト教文化が繁栄する。天正十（1582）年には大友宗麟や叔父の大村純忠と共に天正遣欧少年使節を派遣している。

中世の島原は、絵図では古城と記される「浜ノ城」を居城とする在地領主島原氏の本貫地と見なされている。フロイスの『日本史』には、島原は良港を擁する町として紹介され、有馬氏家臣の「もっとも身分の高い殿のうちの二人」として、島原純茂と西郷純堯をあげている。

天正十二（1584）年の佐賀の龍造寺隆信侵攻を発端とする沖田畷合戦では、島原純茂の跡を継いだ島原純豊は龍造寺方として「浜の城」に籠る。有馬・島津方は「浜の城」に抑えの兵を置くとともに、「森岳」とその麓に陣を置いている。この「森岳」が近世島原城の前身であると考えられる。

この合戦で龍造寺氏の侵攻を退けた有馬晴信は、その後、天正十五（1587）年の豊臣秀吉の「九州征伐」の際に所領を安堵され、「文禄・慶長の役（1592～1598）」にも従軍して渡海している。

## (2) 築城まで

有馬晴信は、徳川政権でも日野江城（南島原市北有馬町：国史跡）を藩庁とする日野江藩として島原半島一帯を治めるが、慶長十七（1612）年に有馬晴信は「岡本大八事件」で甲斐国に流罪。嫡男・直純は、家督と所領安堵が認められたが、慶長十九（1614）年に日向延岡に転封となり、鎌倉期以降の有馬氏の支配が終焉する。その後、日野江藩は佐賀藩鍋島氏・平戸藩松浦氏・大村藩大村氏の委任統治領となり、島原は、鍋島氏の統治下に入る。『肥前国有馬古老物語』には「浜の城は、囲のため堀をほり土手を築きなされ候により、肥前堀と申すなり」とあり、森岳城築城まで「浜の城」が機能していたことが看取できる。

その後、元和二（1616）年、大坂の役の功により松倉重政が大和国五条二見藩から島原に4万石で入封する。

松倉重政は、当初、日野江城に入り藩政を行うが、日野江城は旧来の山城が元となる基本設計が古い城であり、近世における領地支配の為の城としては不便だったようだ。また、原城（南島原市南有馬町：国史跡）は、「文禄・慶長の役」のおり肥前名護屋城や倭城に用いられた豊臣系城郭の最新築城技術を学んだ有馬晴信が、自らの城である原城の本丸にこの技術を採用して改修し、三方が海に面した堅城ではあったが城下町となる空間が狭いなど、城下町建設の点で不都合だったようだ。また、旧領主有馬氏支配の中心地から離れたいとのかえもあったと思われる。

さらに、慶長二十（1615）年に幕府から一国一城令が出されたため、いずれかの城は廃城しなければならず、軍事面での防御と政治面での統治、城下町の発展まで含めた松倉重政が思い描く城郭の縄張りには、両城とも不都合だったと考えられる。

このため、重政はかつて有馬氏が「沖田畷合戦」で敵軍に勝利した縁起の良い土地でもある「森岳」に城の新築城を幕府に願い出てこれを許され、元和四（1618）年から島原城の築城を開始し、寛永元（1624）年まで約7年の歳月をかけて完成した。（註1）

島原城築城により、以後島原が島原半島の政治、経済、文化の中心となる。

### (3) 築城後

徳川幕府は慶長十七(1612)年に禁教令を出しキリスト教を禁じていたが、松倉重政は、当初キリシタンに寛大な政策をとっていた。寛永二(1625)年に将軍徳川家光にキリシタン対策の甘さを指摘され弾圧を強化し、二代勝家も重政以上のキリシタンの弾圧と農民に対する重税を課した。それらが一因となり寛永十四(1637)年島原の乱が勃発する。このとき、蜂起した農民により島原の城下町が焼き払われ、島原城の大手門や桜門が攻撃を受けるが、藩兵はこれを撃退。農民は、原城に籠もることとなる。乱が鎮圧された後、藩主松倉勝家は責任を受け斬首刑となった。

寛永十五(1638)年に譜代の高力忠房が遠江国浜松藩から島原に入封。年貢の免除や移民政策を行い、乱で荒廃した寺社を復興し、キリシタンの取り締まりも厳しく行った。二代隆長は圧政や家臣の粛清などの理由で寛文八(1668)年に改易される。高力氏改易後、中津藩小笠原氏と平戸藩松浦氏が城受け取りを任じられ、臼杵藩稲葉氏が在番を務めている。この際の絵図が大分県臼杵市に残されており、現時点で確認できる最古の島原城関連絵図群となっている。

寛文九(1669)年、譜代の松平忠房が丹波国福知山藩から7万石で入封する。

忠房は、寛文十二(1672)年先魁門を平入りから食違虎口への改修や、本丸と外塁線石垣の孕みの修復と、高力氏統治の頃から「田」であった外曲輪北東部を屋敷地としている。この屋敷地(田屋敷)は、元禄七(1664)年九月から同十四(1671)年一月まで「興慶園」の名称で存続し(『島原藩日記 巻5』)、一月以降は「泉水亭(泉水屋敷)」に改められた(『深溝世紀』)。その後、元文四(1739)年九月四日に解体され、建具・樹木など中小姓以上家持の者に下賜された(慶応大学所蔵『忠刻公御代 被 仰出事』)。また、田町門は、松平期の絵図で外枋形として描かれているものが見られるが、ここの改修記録は確認できていない。

延宝八(1680)年四月二十二日に、三ノ丸北側の家臣団屋敷地の一角に清水御屋敷の茶屋ができ(猛島神社所蔵『万覚書』延宝八年四月)、元文4(1739)年8月13日、清水御屋敷(の茶屋)を常磐御茶屋と称すべき旨の書付が仰せつけられている(慶応大学所蔵『忠刻公御代 被 仰出事』)。

松平氏統治期の修補絵図や老中連署奉書は、肥前島原松平文庫や瑞雲山本光寺などに多数現存している。

寛延五(1749)年、下野国宇都宮藩から戸田忠盈が入封、島原藩主松平忠祇が所領入れ替え。

戸田氏の事跡を記す文献は少なく、城に関する事跡は不明である。明和四(1767)年に15年の期限を限って藩札の発行を行っていること松平家の記録によって知られる。また、三会村の大塚山から大砲の試射を行った際の石碑(「試砲の碑」)が残されている。現在、大塚神社が鎮座する場所の南に移設されている。石碑には、

「宝暦元年辛未七月廿九日 三百目玉著二十六町

同二年壬申八月三日 壹貫目玉著三十六町

同六年丙子 八月廿一日 五百目著玉三十町

戸田因幡守内 近藤惣兵衛□□ 近藤□兵衛□□」

と記されている。

安永三(1777)年、島原藩主戸田忠寛と宇都宮藩主松平忠恕が所領入れ替え。

藩主松平忠恕の治世中、寛政四(1792)年一月に普賢岳が噴火し、同年四月朔日に「島原大変」と呼ばれる眉山の大崩落が起こる。眉山の崩落と津波で島原の城下町は壊滅的な被害を受け、島原城も外塁線南東側に津波が押し寄せ、本丸、二ノ丸、外曲輪の石垣崩落や櫓の破損、瓦の落下などの被害を受けている。この時の被害の書上げが島原半島史下巻に掲載されて

いるので、城郭に関する被害の状況について紹介する。

七月廿九日

御名

一、八月十二日、御用番松平伊豆守殿へ留守居持参差出ス

先達而御届申上候私在所肥前国島原当正月十八日普賢山泥土吹出二月上旬右山続同様吹出其後火氣ニ相成次第ニ焼下り動鳴強四月朔日酉刻過城近キ前山割崩山水押出城下海より高波打上右地震山水高波杯ニ而破損所流失流死杯之覚

- 一、本丸角 平櫓瓦落 壹ヶ所
- 一、同堀 瓦落但長百貳間五間
- 一、二ノ丸角 二階櫓瓦落 壹ヶ所
- 一、同石火矢櫓瓦落 壹ヶ所
- 一、同二階門屋根腰瓦落 壹ヶ所
- 一、同堀潰 但長壹間 壹ヶ所
- 一、同堀瓦落所々但長貳拾間半
- 一、同堀石垣崩但高四間横幅五間半 壹ヶ所
- 一、本丸二ノ丸堀前石垣崩 壹ヶ所
  - 内 壹ヶ所高四間横巾八間半 壹ヶ所高四間横巾九間半
- 一、二之門脇堀潰 貳ヶ所 内 壹ヶ所長八間 壹ヶ所長三間
- 一、米蔵破損 貳棟
- 一、時鐘楼所石垣崩 但高貳間半横巾四間 壹ヶ所
- 一、外曲輪平櫓破損 九ヶ所
- 一、同堀潰 四ヶ所
  - 内 壹ヶ所 壹間半 壹ヶ所 四間 壹ヶ所 三間 壹ヶ所 四間半
- 一、同堀瓦落所々 但長三百九間
- 一、内側土手留石垣崩 但高壹間巾貳間 壹ヶ所
- 一、城内侍屋敷堀潰 六拾八ヶ所
- 一、城外小役人家垣石垣崩 貳拾貳ヶ所（以下略）

石垣の崩落や堀の潰れがあるが、櫓の倒壊はなかったようである。城下では、町屋潰が5軒とあるが、津波により潰れの状況が確認できなかった可能性もある。

この翌年、寛政五(1793)年には、藩校「稽古館」が先魁に設置され、文政三年(1820)には稽古館から医学部門を独立させた「済衆館」が常磐茶屋の敷地に設置された。

『石垣御修復控』（肥前島原松平文庫所蔵）では、弘化五(1848)年の二ノ丸の「御馬櫓」石垣と「岡部泰庵」前石垣の修復で、大手口に「水道堀切」を通して堀の水を抜き石垣の修復を行っている。石垣の修復後、水道堀切は埋められるが、その際に恒久的な排水暗渠を築いている事が発掘調査で確認されている。また、「これ以前の水道」が東側にあるとされているが、昭和50年代の側溝工事で同様の排水暗渠が確認されている。

この後、明治四(1871)年に島原藩は廃藩となり、明治六(1873)年の「存城廢城令」により、松倉重政の築城から4氏19代にわたり島原藩の藩庁として約250年間存続した島原城は廢城となった。

### (3) 廢城後

明治六(1873)年の廢城後、城内の敷地と建物はすべて民間に払い下げられ、明治九(1876)年頃までにほとんどの建物が解体されたようである。

昭和初期の古写真から、外曲輪の三ノ丸以北はほとんどが田畑となっていることが確認できる、また、三ノ丸以南は、官公庁や学校として利用され、郡役所や旧制中学校が建てられた。

現在でも三ノ丸には長崎県立島原高等学校、島原市立第一小学校、外曲輪西側には島原市立第一中学校、長崎県立島原商業高等学校、南側には島原図書館のほか国や県の関係機関が立地する。

二ノ丸は近隣の学校のグラウンドとして利用された後、昭和45年に社会福祉従事者研修センター（現：森岳公民館）、昭和49年に島原文化会館が建設されている。二ノ丸と割場を繋ぐ土橋は昭和37年以降に西側に拡幅されている。

本丸は、昭和初期まで主に農地として使用され、昭和6年に南西端と西堀端通りを繋ぐ土橋が架橋された。昭和25年天守再建の話が盛り上がり、昭和32年に島原城跡公園10ヶ年計画が建設省の許可を受ける。昭和34年度に土塀が造られ、昭和35年2月に西の層櫓が建設された。昭和38年3月23日に天守の起工式が行われ、昭和39年4月に完成した。昭和47年11月18日に巽櫓が完成。昭和55年5月に丑寅櫓が完成した。天守と三基の櫓はコンクリートで再現されている。また、二ノ丸西側にある時鐘楼が昭和55年11月4日に再建されている。

本丸と二ノ丸を廻る堀も部分的に埋め立て及び整地が行われ、明治から民家が建てられていた。

島原城は廃城後、上記のような開発が行われているが、本丸、二ノ丸の外周石垣とそれを廻る堀等近世の遺構が残されていることや歴史的な経緯があることから、平成23年8月に島原市から長崎県教育委員会へ長崎県の史跡指定の推薦を行い、「江戸時代に幕府が新規の築城を原則禁止していた中で、島原城跡は全国でも数少ない新設の城郭であった。その内部構造は極めて特徴があり、大手口から本丸に至るまでの複雑な城道や30基を越える外曲輪の櫓群など、防御を意識した堅固な遺構が残っている。また本丸の入り口などには、桃山時代からの伝統的な様式の巨石石垣が認められる一方、各曲輪の高石垣には江戸時代前期の先進的技法を見ることができ、築城技術の転換期の様子が良く残っている。県内の藩庁として機能した5城（島原市島原城・対馬市金石城・平戸市平戸城・五島市石田城・大村市玖島城）の中では、敷地面積や櫓・門数、建築・石垣の規模の点で最大の城郭である。」として、平成28年2月18日に長崎県の史跡に指定された。

本丸跡、二ノ丸跡、大手口跡の一部、外曲輪の屋敷跡(小早川邸)が指定範囲となっている。



第1章 島原城の概要

第1表 島原城関連年表

城主	西暦	和暦	島原城関連事項	備考		
	1584	天正12	沖田畷合戦で森岳とその麓に有馬・島津の陣を置いた	藤原有馬世譜		
	1614	慶長19	有馬直純 日向延岡に転封 佐賀藩鍋島氏、平戸藩松浦氏、大村藩大村氏による城番	寛政重修諸家譜 肥前国有馬古老物語		
松倉	重政	1616	元和2	大和国二見藩から松倉重政 入封	肥前国有馬古老物語	
		1618	元和4	島原城築城に着工	肥前国有馬古老物語	
		1620	元和6	筑後国柳川藩改易による国中割符代官として岡田将監善同(美濃国奉行)、竹中采女正義(豊後国府内城主)、松倉豊後守重政(肥前国島原城主)が仕置奉行となる	大和町史 通史編上巻 大木町誌	
				柳川藩で松倉が支配した代官所管内の年貢徴収は過酷な上、未納の百姓には 蓑を着せ、それに火をつけて、「蓑踊り」をさせた	大和町史 通史編上巻 (下妻郡中島村庄屋市郎兵衛「申上覚」)	
		1624	寛永元	島原城完成	肥前国有馬古老物語	
		1625	寛永2	大坂城(本丸:西内堀岸、北堀水敵(外側)) 普請	金沢城資料叢書16	
		1629	寛永5	大坂城(大手土橋、西大手土橋南面、二ノ丸南外岸(水敵)) 普請	金沢城資料叢書16	
		1631	寛永7	11月16日 重政没、勝家が継ぐ	藩翰譜	
		1636	寛永13	江戸城(外堀石垣) 普請	北原1999	
		勝家	1637	寛永14	10月26日 島原城が一揆勢に攻められる 島原の乱(~1938)	佐野弥左衛門覚書
1638	寛永15		2月28日 原城落城 4月13日 松倉重次改易、森長継に預けられる 4月13日 遠江国浜松藩から高力忠房 入封	佐野弥左衛門覚書 寛政重修諸家譜 寛政重修諸家譜		
高力	忠房 隆長	1655	明暦元	12月11日 忠房没 隆長が継ぐ	藩翰譜	
		1663	寛文3	11月13日 雲仙普賢岳噴火(古焼溶岩流出)	渡辺玄察日記(拾集物語)	
松平	忠房	1668	寛文8	2月27日 隆長 陸奥に配流 4月27日 中津藩小笠原氏と平戸藩松浦氏による城受け取り 5月21日 白杵藩稲葉氏による城番 12月 飢肥藩伊東氏による城番	藩翰譜 長屋2009 長屋2009 寛政重修諸家譜	
			1669	寛文9	6月8日 丹波国福知山藩から松平忠房 入封	寛政重修諸家譜
			1671	寛文11	6月 月城の外に溝渠を鑿ち、汚水を受くるの處と為す。(俗に所謂大澗(おおどぶ)是れなり)。東西四十間、南北二百二十間。	深溝世紀
			1672	寛文12	島原城之図 先魁門等改修	絵図1-1
		1673	延宝元	5月18日 大風雨あり。明日、公、家士の間巷を巡行し、其の圯の壞るるを閲る。	深溝世紀	
				7月2日 大書院の造営成り。(今茲正月、福知山の匠工、大兵衛を召し之を造らしむ) 落す。公出でて家士の甲冑を大書院に閲す。	深溝世紀	
		1674	延宝2	2月1日 桜町の大火(三ノ丸一部残し焼失)	島原の歴史 藩政編	
				8月17日 封内に大風あり。城壁人屋を破り、大木を抜く。 諫早・田町二門の瑠籥を以ってその闔關を監せしむ	深溝世紀 深溝世紀	
		1675	延宝3	老中連署奉書 三ノ丸東方石垣崩	捕遺1	
				10月 是より先、豊後の治工藤原正次(植木甚右衛門、国東郡中島の人)に命じて報時鐘(高さ四尺三寸)を鑄しむるに此の月成る。更樓を置き晝夜之を撞きて時辰を報ず	深溝世紀	
1677	延宝5	6月17日 夜(亥時)外厨火を失す。時に南風猛烈にして火は月城に延びて殿閣盡く焼亡し、余す所は唯々便殿・臥屋・裁縫房のみ。	深溝世紀			
		7月13日 公、月城に移る。便殿の猶お存するを以てなり。	深溝世紀			
		10月4日 佐賀侯、月城の造営さるるを以て陶瓦(三万枚)を贈る。	深溝世紀			
		12月21日 是より先月城の諸殿成り、此の日落す。	深溝世紀			
1678	延宝7	8月5日 烈風甚雨し、明日の夜、海溢れ城櫓を壊り、人家を倒し(二千六百余家)大木を抜き(二千余章)、田禾を耗す(五千石)。	深溝世紀			
1679	延宝7	7月21日 島原大風あり。城櫓外廓破壊するもの過半、倒るる人屋千二百戸、耗る田禾七千七百石なり。	深溝世紀			
1682	天和2	9月20日 土橋麻右衛門の家に火起り諸士及び市人の数戸を延焼す	深溝世紀			
		戊九月廿日夜嶋原城外曲輪櫓ヶ所焼失図 外曲輪東側櫓焼失	絵図2-1			
1683	天和3	肥前国嶋原城先蒐脇石垣破損図 先魁門脇石垣崩と孕	絵図3-1			
1684	貞享元	肥前国嶋原城絵図 外曲輪東側先魁門一と東不明門間の石垣崩	絵図4-1			
1689	元禄2	肥前国島原城石垣破損所図 本丸坤方(南西)石垣崩。三ノ丸良方(北東)田町口門脇石垣孕	絵図5-1			
1692	元禄5	6月3日 城前門外の板橋の修造成る。酒井太郎左衛門をして初めて度らしむ。儀畢り酒饌を賜い、工匠監吏に及ぶ。初め月城に火あるや(延宝五年)已に殿閣屏障を嘗み、其の後、溝渠を浚えて以て橋を建つ。是に至って西邊に柵を植て其の形状を壯大にす。	深溝世紀			
1693	元禄6	6月25日 大風あり。城櫓及び士民の屋を破る。	深溝世紀			
1695	元禄8	肥前国島原城石垣破損所図 本丸西方石垣崩	絵図6-1			
1697	元禄10	6月4日 此の夜、営繕局火を失し、郡務局に延焼し、板倉房勝の家臣の連房(凡そ四十戸)に及ぶ。	深溝世紀			



第1章 島原城の概要

城主	西暦	和暦	島原城関連事項	備考	
忠雄	1700	元禄13	肥前国嶋原城石垣崩候絵図 外曲輪東側石垣崩 肥前国嶋原城石垣崩修覆願ノ添図 外曲輪東側石垣崩	絵図7-1 絵図7-2	
	1700	元禄13	島原城石垣崩修覆願図 外曲輪東側石垣崩	絵図8-1	
	1705	宝永2	4月20日 大風あり。森川四郎左衛門別房倒る。	深溝世紀	
	1706	宝永3	嶋原城堀石垣崩所之絵図 二丸東方外堀端石垣崩	絵図9-1	
	1707	宝永4	3月16日 櫻門の修造成る。公、松平次章に麻衣裳を賜い、初めて之を度らしむ。	深溝世紀	
	1708	宝永5	5月23日 大雨し洪水あり、城郭民舎を壊る。	深溝世紀	
	1710	宝永7	8月5日 是より先、月城の殿閣を修造す。匠を大坂より召し、其の足らざる者は治下の工を以て之に充つ。	深溝世紀	
			11月12日 月城前門外の板橋修繕成り、公、初めて度り遂に渋川勝章の家に臨む。 11月18日 大書院の造営畢る。	深溝世紀 深溝世紀	
	1719	享保4	肥前国嶋原城絵図 本丸北方内曲輪堀下石垣	絵図10-1	
	1728	享保13	老中連署奉書 外曲輪東方田町門外石垣。南方櫓并堀下石垣。同所北方櫓并堀下石垣。同統櫓脇堀下石垣。同櫓并堀下石垣。	捕遺2	
忠刻	1746	延享3	肥前国島原城絵図 二丸北方外堀端石垣崩。	絵図11-1	
忠祇	1749	寛延2	島原藩松平(忠祇)氏と宇都宮藩戸田(忠盈)氏と所領入れ替え	島原の歴史 藩政編	
戸田忠寛	1774	安永3	島原藩戸田(忠寛)氏と宇都宮藩松平(忠恕)氏と所領入れ替え	島原の歴史 藩政編	
忠恕	1777	安永6	7月25日 大風あり(卯半時に起り、酉前時に終わる)、城の櫓(三層楼一棟、櫓六棟)、外郭(二十二町)、士民の家(四千四百三十九家)、寺社(六十二字、廬金七千餘を破壊す)を倒し、人畜死傷し(男女死する者二十人、傷つく者三十人、牛馬の斃るもの六匹)、田稼耗損す(三万餘石)。	深溝世紀	
			7月22日 老中命を伝えて曰く、「島原城の風災の被る所、其の修繕を許す」と。	深溝世紀	
	1790	寛政2	肥前国嶋原城絵図 外曲輪東之方櫓脇石垣崩	絵図12	
	1792	寛政4	1月18日 雲仙普賢岳噴火(新焼溶岩流出)	深溝世紀	
	1792	寛政4	3月3日 報時の鐘楼は石を疊みて基礎と為し、高さ数丈なり、朔日の振を以て破壊す。	深溝世紀	
			4月朔日 眉山崩落(島原大変)	深溝世紀	
	1793	寛政5	藩校「稽古館」設立	島原の歴史 藩政編	
	1797	寛政9	嶋原城絵図 本丸南内側石垣崩	絵図13	
	忠憑	1803	享和3	7月27日 是より先牙城西面の石垣崩る。家士及び子弟自ら畚鍬を執りて修築せんことを請う。公、城使をして老中に因つて可否を俟う。乃ち浮帖して曰く、「城郭の宮繕に家土工役に就くは固より不可無し。速に其の功を成せ」と。是に於て老臣以下皆野服を着て石を運び土を築く。封内の庶民も亦悉く出でて之を助け、数月にして功竣る。	深溝世紀
				8月16日 公、牙城の石垣建築の功竣るを褒めて家士を享す。 11月5日 酒料の楮幣十五貫文目を村の村民に賜う。牙城石垣建築を褒むるなり。	深溝世紀 深溝世紀
1810		文化7	肥前国嶋原城絵図 外曲輪東方石垣崩、孕	絵図14-1	
忠侯	1820	文政3	7月1日 島原より報ず、「前月大雨して洪水あり、城郭・田廬を漂壊して人馬死傷す。南條の村落殊に甚し」と。 稽古館から「済衆館」(外曲輪常磐茶屋に配置)が独立	深溝世紀 島原の歴史 藩政編	
			3月24日 島原に大風あり、外廓の石垣を破り、廬舎に及ぶ。	深溝世紀	
	1828	文政11	8月 又報ず、「本月十日、二十四日島原・二豊に大風あり、城郭人家を破倒して大いに田稼を損ず」と。	深溝世紀	
	1829	文政12	肥前国嶋原当八月八日風雨之節破損所之覚 外曲輪東方石垣崩	絵図15	
	1837	天保8	3月27日 近村の民請いて月城外溝を浚う。是より先其の橋を改架するを以てなり。	深溝世紀	
忠誠	1840	天保11	4月5日 夜半、普請方火を失し、材木を藏むる屋四字焼亡す。	深溝世紀	
	1841	天保12	肥前国嶋原城絵図 本丸西方堀石垣横折廻孕。同堀端石垣孕。二丸西方堀石垣横折廻孕。同堀端石垣孕。同門外西方堀端石垣崩。外曲輪西不明門外石垣横折廻孕。	絵図16	
			済衆館で人体解剖	島原の歴史 藩政編	
	1846	弘化3	賀来佐之ら薬園の建設に着手(現国指定史跡「旧島原藩薬園跡」)	島原の歴史 藩政編	
	1848	嘉永元	二ノ丸御厩櫓泰庵前石垣修復 大手口から「水道堀切」で堀水を排水	石垣御修復控	
忠精	1849	嘉永2	島原藩が島原海岸の測量図を完成	島原の歴史 藩政編	
1853	嘉永6	薬園完成	島原の歴史 藩政編		
1854	嘉永7	島原藩海岸部三ヶ所に砲台を築く	島原の歴史 藩政編		

第1章 島原城の概要

城主	西暦	和暦	島原城関連事項	備考
忠和	1863	文久3	4月22日 家士戮力して外庭を開き、閱兵場を作る。(三ノ丸北半)	深溝世紀
	1864	元治元	御鉄砲櫓大御修覆諸入用勘定帳 鉄砲櫓修復	補遺4
	1867	明治元	明治維新	
近代	1869	明治2	12月12日 知事公、甲第に移る。初め月城公の居たり。日々正寝に臨みて政を聴く。知藩事の命を蒙るに至り、月城に以て政庁と為し、自ら謂う、政庁は私居と焉を同じくすべからずと。乃ち後庭を削りて館舎を営み、其の屏牆を殊にす。此の日移住し、之を甲第と号づく。	深溝世紀
	1970	明治3	8月23日 島原県から明治政府に島原城廃棄の上申書	島原の歴史 自治制編
	1871	明治4	7月5日 大手門解体	島原の歴史 自治制編
			11月 御殿、諸雑具の入札	島原の歴史 自治制編
			12月 外塀、櫓の入札	島原の歴史 自治制編
			島原の藩を廃し県とする	島原の歴史 自治制編
			島原の県を廃し長崎県とする	島原の歴史 自治制編
	1872	明治5	3月 陸軍省が兵事に関わるものは同省の管轄であるとし、城の調査と入札について指示	島原の歴史 自治制編
	1873	明治6	4月8日 島原城は大蔵省の管轄となり、最前入札すべての取り消しを命じられた	島原の歴史 自治制編
	1874	明治7	4月23日 島原城の建物を払い下げる布告	島原の歴史 自治制編
1875	明治8	去〔明治八年〕四月十五日ヨリ日数十日間(晴雨トモ) 御本丸天守ニテ博覧会相始リ 催主矢川得三	島原開見閑録	
現代	1960	昭和35	2月 本丸 西の櫓再現	島原の歴史 自治制編
	1964	昭和39	4月 本丸 天守閣再現	島原の歴史 自治制編
	1970	昭和45	4月 二ノ丸に社会福祉従事者研修センター(現:森岳公民館)建設	島原の歴史 自治制編
	1972	昭和47	11月 本丸 巽櫓再現	島原の歴史 自治制編
	1973	昭和48	時鐘楼取り壊し(鐘は昭和19年に金属資源として供出)	島原の歴史 自治制編
	1974	昭和49	9月 二ノ丸に島原文化会館建設(落成式)	島原の歴史 自治制編
	1980	昭和55	5月 本丸 丑寅櫓再現	
			11月 時鐘楼再現	
1986	昭和61	3月 島原図書館建設		

(※深溝世紀における曲輪の呼称 牙城=本丸 羅城=二ノ丸 月城=三ノ丸)

【参考文献】

- 渡部政弼(松風)著 溝上慶治解説『深溝世紀』仮名交じり文 島原市教育委員会  
 林銑吉編 1954 『島原半嶋史 下巻』長崎県南高来郡教育会  
 入江湊 1972 『島原の歴史 藩政編』島原市  
 入江湊 1976 『島原の歴史 自治制編』島原市  
 大木町誌編さん委員会 1993 『大木町誌』大木町  
 長崎県衛生公害研究所 1993 「雲仙・普賢岳の噴火と災害」『長崎県衛生公害研究所報』第35号  
 外山幹夫 1997 『肥前有馬一族』新人物往来社  
 北原糸子 1999 『江戸城外堀物語』ちくま新書  
 土橋啓介 2001 「島原城外郭遺構について」『西海考古』第3号  
 大和町史編纂実務委員会 2001 『大和町史 通史編上巻』大和町  
 土橋啓介 2006 『森岳城跡—島原法務総合庁舎増築に係る埋蔵文化財調査報告—』島原市文化財調査報告書 第11集  
 木村充伸ほか 2008 「深溝松平藩の屋敷地の変遷と屋敷指図—深溝松平藩建築指図の復元的検討に基づく作図・表現技法に関する研究(1)—」『日本建築学会計画系論文集』第73巻 第629号  
 長屋隆幸 2009 「17世紀中期の城受け取りと大名の軍役への意識 —平戸藩による島原城受け取りを事例に—」『城館史科学』第7号 城館史科学会  
 長屋隆幸 2009 「17世紀中期の城受け取りと大名の軍役への意識—平戸藩による島原城受け取りを事例に—」『城館史科学』第7号 城館史科学会  
 石川県金沢城調査研究所 2012 「徳川期大坂城普請丁場割図の分類と特長」『城郭石垣の技術と組織 金沢城資料叢書16』

### 第3節 島原城の縄張

#### (1) 立地

島原城は普賢岳の北東麓に広がる扇状地上の傾斜地にあり、旧海岸線まで300mほどの地点に立地している。東へ降る斜面を横切るように海岸線とほぼ平行する状態で構築されているため、東西の外塁線の高さが著しく異なっており、海側の東面石垣の最高比高は6mを超えるが反対の雲仙側の西面石垣には比高1mを下回る箇所もある。斜面上に南北に横たわる巨大なテラスを築いたような形態のため、山腹から流れ下る伏流水や地表雨水を堰き止める格好となっており、築城には高度な治水技術の使用が前提条件となる選地がなされている。

城の全体形は東西約350m×南北約1200mを測る平面長方形を基調としたプランで、その中央部に三ノ丸を置き、南に本丸・二ノ丸を連ね、北側は上・中級家臣団屋敷群を抱える外曲輪の主要部に仕立てている。中心郭群を南北に連立配置した非常にシンプルな構成で、無駄を徹底して削ぎ落とした平面設計となっている。

#### (2) 本丸

城内の最南に位置し、最高所の北西隅櫓付近で標高29.6を測る。敷地規模は南北長軸約220m、東西長軸190mで、南西隅部が西方に突出して大きな「横矢掛け」を形成している。

南東隅から東面全体にかけての塁線では6箇所の折曲箇所（出隅部）が連続する「屏風折れ」の石垣群を構築し、島原城の特徴的な景観を形成しているが、これは大手口を通過し濠際の狭長な外曲輪を北上して二ノ丸へ向かう城内の主要経路に向けて、全体俯瞰と一斉射撃を可能にする防備上の工夫である。同所の濠（本丸南濠の東端部）の幅が約65mという城内最大の規模を誇るのも、このエリアに対する牽制を最重視している姿勢が端的に表れている。また、城郭中心部の地盤全体の傾斜方向がこの本丸南東隅に向いていることもあって、本丸の土圧や浸透水・濠水の滞留などを想定して石垣塁面の耐久性向上のために隅角部を増やすという土木工法上の意図も考えられる。

北面中央には廊下橋（極楽橋）を經由する唯一の虎口が開口しているが、搦手に該当する虎口を他に持たないため戦時には本丸自体が孤立状態となりかねない。ただし、この種の設計理念は豊後佐伯城（大分県）、和泉岸和田城（大阪府）、美濃大垣城（岐阜県）など他例にも認められ、決して特異な「縄張」ではない。本丸大手に相当するこの虎口は、東袖に二重櫓を持つ進行方向「左折れ」の「内枘形」型式をなすが、ここを通過した先の空間も周囲の塁壁に規制されて連続4回の方向転換を強いる複雑な通路となっており、本丸の北半全域を占める南北110mもの巨大な一つの虎口空間を形成していた。つまり、本丸内はこの虎口及び付随する帯曲輪群から構成される北半部と、天守を中心とする南半エリアとの二重構造になっており、両者間は8～10mの段差を介して区分されていた。

南半城の外周全体には幅8～20mの帯曲輪が取り巻き、その角部に6基の隅櫓と3基の三層櫓を備え、それぞれに段差や配列関係を変えることで「合横矢」を掛ける防備上の工夫を凝らしている。本丸全体では3層櫓が3基（丑寅櫓、西櫓、巽櫓）存在したが、これは数万石クラスの中小大名の居城としては異例とも言うべき格式を示している。所謂「一国一城令」施行後の外様大名による新規築城であるだけに尚更のこと珍しく、島原城及び藩地を重要視していた幕府側の政治姿勢を暗示している。

#### (3) 天守

各種絵図等から外観5層と推定されている天守だが、その具体的規模については信憑性における藩政期史料に乏しく検討の余地が多い。明治期初頭に編纂された『深溝世紀』巻18による

と、高さは天守台高3間を含む17間1尺5寸（6.5尺間換算で約33.8m）で平面の大きさが12間四方（1辺23.6m）とされ、国立国会図書館所蔵『嶋原之城図』にも「十二間半四方」とのほぼ一致した注記がある。一方、明治八年『大村・島原・平戸・五島旧城郭調帳』には10間4尺四方（1辺約20.5m）とあって、この相違は前者が天守台根回りの寸法で、後者がその天端の天守初層の大きさを指すと解釈できる。

ところが、昭和38年まで残存していた天守台（模擬天守建設時に解体）の実物規模を昭和22（1947）年の米軍撮影空中写真や旧地形図などから復元すると、約35m四方あって上記の寸法よりも一回り大きいことが分明である。このことから本来は、天守本体の外周に幅5mの「犬走り」を持つ2段構造の天守台か、もしくは天守台の4隅のいずれかに天守を寄せた小型の「天守曲輪」型式の構造物であったものと推定できる。

### （4）二ノ丸

本丸と三ノ丸との中間にある二ノ丸は、東西約140m・南北約130mを測り本丸最高所よりも8～10mほど低位置にある。本丸へ連絡する廊下橋（「極楽橋」）の渡り口と、三ノ丸へ渡る土橋手前にそれぞれ「内枘形」が設けられ、両者間を曲輪東半の空間で連絡する構造となっている。対するに西半側が二ノ丸の主要部で、東側よりも3m前後高まっていたと推定できる。つまり、曲輪内を通過して本丸へ向かう動きを西側上段から牽制する構えをなしており、加えて東半部の平面形も単純ではなく、北側枘形から連続6回の方向転換を経由しないと廊下橋に到達できない導線設計となっている。要は、二ノ丸全体が本丸防衛を目的とする巨大な「馬出」としての機能を副次的に備えていたことが理解できる。そうした性格は、南西隅における多門櫓の設営と東半部通路を画する大長屋の存在など建築内容にも反映されており、大人数の城兵の同時配置を想定した施設と一体化した内部構造になっている。

### （5）三ノ丸（藩主屋敷）

東西長軸約160m・南北約310mの、平面長方形を基調とした曲輪である。本丸と二ノ丸が濠に囲繞されて一体的空間になっているのに対して、三ノ丸はその北隣にあるものの外曲輪との同化が著しく、周囲の家臣団屋敷地区と同じ街区の一部のような体裁にあった。

それでも、本光寺所蔵『島原城之図』を始めとする古絵図類の描写では、周囲を石垣で囲み南東隅から東辺にかけて濠（幅6間）を併走させることで曲輪としての排他性を維持している。寛政二（1790）年製作『肥前国島原城絵図』等の江戸中期以後の古絵図類から見るに、南面中央にメインの門を置き東面の南寄りにも脇門を設けていた。南西隅には櫓台状の突出部を付随させ、北東隅一帯を「大横矢」に見立てて張り出させている。藩主の「屋敷」と注記した絵図もあり、本丸・二ノ丸の補佐的空間というよりも藩主の常御殿としての自立性が保たれた平面構造と解釈できる。『島原一揆松倉記』には「島原城内二ノ丸之北方に、花島丸とて一曲輪有之」とされる。

### （6）外曲輪と各虎口

主要な連立3郭の外周をめぐる広大な空間を指し、三ノ丸周囲から以北は上・中級家臣団の屋敷地区となっていた。前述したように、海に向かって傾く山裾に立地した城の外郭であるため、南北に長い4列の屋敷ブロックが相互間に3m強の段差を伴って、西から東へ雛壇状に下がりながら並走する内部構造を呈している。必然、西側塁壁の外からの比高は極端に低く、しかも城外へ200mほど離れただけで曲輪内よりも標高が10m前後も高くなる。このため外曲輪の西側面をカバーする必要性が生じ、外塁線に平行する形態で鉄砲町（下級武士の屋敷地区）が設



営されたと見なせる。下級武士の屋敷地区が城の主要部よりも高所を占有して隣接するという、近世城下町としては類例の少ない個性的なプランが成立したのは、地形上の制約による外曲輪の防衛上の短所を克服するための措置であったと考えられる。

また、そうした弱点を築城技法面から補うため、外塁線上には31基にのぼる単層櫓が100m（1間6.5尺換算で50間）間隔を基準にしながら規則的に設営されている。それも櫓台の突出方向を城内側・城外側と交互に繰り返す配列となっていて、迎撃時の死角の解消と、城内への侵攻時を想定した対処策が計算された火砲主体の完成期城郭ならではの「縄張」がなされている。

この外曲輪から城外へ連絡する出入口は、南辺東寄りに大手門、北面中央に諫早（北）門、西辺に桜門と西不明（虎口）門、東辺に田町門、先魁門と東不明（虎口）門と、計7箇所の虎口が開口していた。このうち諫早門と桜門、大手門は攻撃性の強い「外枳形」で、田町門、西不明門、東不明門、先魁門は防禦重視の「内枳形」型式を取っている。しかし、西不明門と先魁門は城全体の中間部の導入口にして、中心部（本丸・二ノ丸）と武家屋敷地区の主体部とを分断する堀岸白地（「割場」）の両端に開口する要所に当たるため、西不明門では北袖塁線を大きく張り出した「袖枳形」型式とし、先魁門では門外に石塁と水路で枳形様の緩衝区画を付設して守備力を増強している。

これらの虎口空間の中でも大手口は、東西75m・南北55mという単独の曲輪並みの規模を誇る枳形空間から構成されており、大手門自体は上層渡櫓型式の二階門をなしていたことが絵図類から推定できる。その正確な規模は不詳だが、扉口の幅員（＝下階桁行）だけでも28m（14間）以上と現況からは想定でき、搦手口に当たる諫早門が3間×14間を計ることから、それよりも壮大な建築物であったと見なせる。枳形南西隅には明治八年の解体時に2.5間×6間の平櫓が残っていたが、南面全体が幅3間強の石塁となっていて、本来は総長50m（25間）に達する多門櫓が置ける設計になっていた。さらに門外には先魁門と同様に柵と長屋からなる区画を設けて前衛空間としている。旧島原港との直結と、大手川南岸に展開していた戦国期の先行集落（浜ノ城の城下集落とも）の再編・同化を目的として防衛の力点を集中させた結果、特大の大手口空間が本丸の背後という特異な位置に成立したと見るべきである。その意味において、大手口自体が城南と港に向けての「出丸」に相当する機能を兼備していたと解釈できる。

#### 【参考文献】

- 白峰旬 2006 『幕府権力と城郭統制』岩田書院  
 宇土智恵 2007 『島原城の復元的研究』私家版  
 本田秀樹編 2002 『森岳城跡－県立島原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』長崎県文化財調査報告書第166集  
 本田秀樹 2003 『森岳城跡Ⅱ－県立島原高等学校浄化槽移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』長崎県文化財調査報告書第173集  
 宮本雅明編 2009 『島原鉄砲町－島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』島原市教育委員会  
 島原市監修・（株）埋蔵文化財サポートシステム編 2015 『森岳城跡Ⅲ－島原城跡公園災害復旧工事報告書』島原市  
 宇土靖之・堤浩一郎 2015 『森岳城跡Ⅳ－島原拘置所宿舍建設に伴う発掘調査報告－』島原市文化財調査報告書第15集





(1) 埋蔵文化財

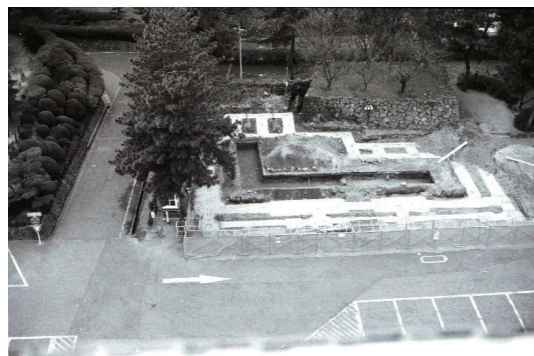
島原城は、外墨線から内側の範囲が「森岳城跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地とされており、開発工事に伴う発掘調査が実施されているが、調査事例が多くないため今後、計画的な調査を実施し全容を解明していく必要がある。全体的な調査結果から現時点では、城の生活面の下層に築城以前の遺物包含層が部分的に存在する事と、本丸の北西部分と三ノ丸、本丸南側の外曲輪については盛土により築かれており、言い伝えによる「森岳」を切り崩すだけでなく、その周囲には盛土も行って城が築かれた事が判明している。

①本丸

イ. 売店建設に伴う範囲確認調査

調査期間：平成3年2月10日～11日

遺構：なし 遺物：瓦



第4図 調査地近景（東から）

ロ. 観光復興記念館建設に伴う発掘調査

調査年度：平成7年度

遺構：石列・礎石 遺物：矢立・瓦



第5図 調査地近景（南東から）



第6図 石列及び礎石（東から）

ハ. 浄化槽建設に伴う範囲確認調査（屋外トイレ浄化槽）調査期間：平成21年5月13日～18日

遺構：石列（天守台石垣か）・整地層・盛土 遺物：瓦・漆喰

再現天守の南西で東西方向に伸びる石列を確認した。石材は30cm～50cm。昭和22年の航空写真等から天守台があったと想定される場所で確認されている。現地表から2m程下位は盛土で造成されている。



第7図 石列検出状況・奥は再現天守閣（南から）



第8図 石列（西から）



ニ. 島原城跡公園災害復旧工事に伴う発掘調査（本丸西側石垣）

工事期間：平成24年12月28日～平成26年3月31日

調査期間：平成25年4月1日～平成26年3月31日

遺構：石垣・石列状遺構（硬化面）・溝状遺構 遺物：中世陶磁器・近世陶磁器・瓦  
No. 1402 石垣背面の中段付近、裏込めから約2 m程内側の盛土内から検出された石列状遺構は、直下に硬く締まった硬化面を検出しており、この硬化面は水の浸透性が少ないことなどから、石列状遺構と合わせて石垣構築時の支持基盤を高め、盛土内の排水機能を有するものと考えられる。降雨直後に石列状遺構の南端から雨水の流出も確認できた。また、石列状遺構前面下部で盛土の流出により栗石層の目詰りが確認された。本来栗石層まで伸びる硬化面が過去の複数回の石垣崩落で流失し、石列状遺構からの流水により盛土が流出したものと考えられる。

石列状遺構の1 m程下層で島原城築城直前の遺物包含層が確認されている。



第9図 石垣解体状況（西から）



第10図 石列状遺構（西から）



第11図 雨水流出状況（南から）



第12図 栗石層目詰り状況（北から）

②二ノ丸

ホ. 屋外トイレ建設に伴う範囲確認調査（二ノ丸土橋付近） 調査期間：平成11年2月3日

遺構：なし 遺物：なし

へ. 地震関係基礎調査交付金 雲仙活断層群に関する調査 調査期間：平成16年度

※寛政の地変による「地割れ」の学術調査

遺構：なし 遺物：陶磁器・瓦

③三ノ丸

ト. 島原高校体育館建設に伴う範囲確認調査 調査期間：平成11年7月5日～30日

遺構：石垣・建物の礎石 遺物：近世陶磁器・瓦・貨幣

チ. 平成11年度島原高校体育館建設に伴う発掘調査

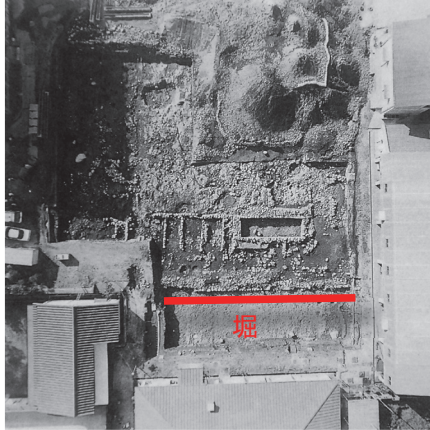
調査期間：平成11年9月20日～12月10日



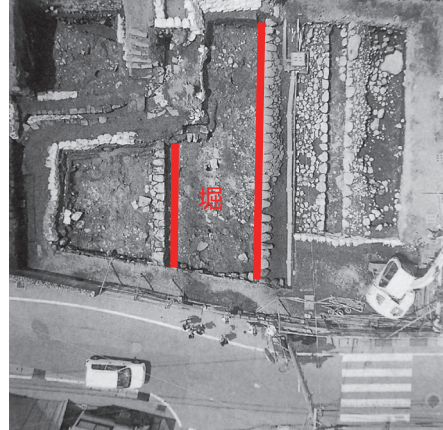
遺構：堀石垣・橋脚（柱材）・石組遺構等

遺物：中世輸入陶磁器・近世陶磁器・土師器・瓦

三ノ丸東側の堀と石組遺構が確認されている。この堀の確認により島原高校と第一小学校の校舎東側にある段差が堀石垣の名残と断定できる。堀底から島原城築城以前の中世の遺物包含層が確認されている。



第13図 遺構検出状況1（東から）



第14図 遺構検出状況2（東から）

リ. 平成12年度島原高校体育館建設に伴う発掘調査

調査期間：平成12年7月3日～9月13日

遺構：溝跡、石組遺構、掘立柱建物跡、集積、土坑、石列 遺物：近世陶磁器・瓦

ヌ. 第一小学校校舎建替に伴う範囲確認調査 調査期間：平成21年8月5日～8月7日

遺構：整地層 遺物：近世陶磁器

ル. 第一小学校校舎建替に伴う発掘調査 調査期間：平成22年9月13日～10月15日

遺構：石組溝・井戸・盛土 遺物：近世陶磁器・輸入陶磁器・瓦・寛政四年火山灰

三ノ丸藩主御殿の調査だが、礎石は長軸90cm程で中心点の広さは1.8mであり、御殿の東端に配置されていた長屋に伴うものと想定される。石組溝の中から検出した火山灰は、化学分析の結果から寛政四年の普賢岳噴火のものと考えられる。



第15図 調査地（東から）



第16図 石組溝（西から）



第17図 井戸（西から）



第18図 礎石（西から）



ヲ. 個人住宅建設に伴う範囲確認調査

調査期間：平成26年11月19日～20日

遺構：硬化面 遺物：鬼瓦片

石列状遺構下部と同様の硬化面が確認された。硬化面は表土から1m～1.4m程下に硬化層と砂礫層が5cmごとに交互に8層構築されている。



第19図 硬化層（南から）

④外曲輪

ワ. 島原法務総合庁舎増築に伴う発掘調査 調査期間：平成17年12月21日～26日

遺構：石列 遺物：陶磁器

現地表から3m下部まで盛土による造成がなされている。



第20図 土層状況（南から）



第21図 土層下部拡大（南から）

カ. 宅地造成に伴う範囲確認調査 調査期間：平成22年5月25日～26日

遺構：なし 遺物：なし

ヨ. 島原警察署先魁公舎浄化槽改修に伴う工事立会

調査期間：平成23年12月2日

遺構：なし 遺物：なし

田町門と先魁門の間に位置し、城内で最も標高が低い郭である。遺物包含層は削平されており、表土直下から地山の砂礫層が確認された。表土下3m程から多量の湧水があった。



第22図 土層状況（南西から）

タ. 島原拘置支所宿舍建設に伴う発掘調査 調査期間：平成26年5月20日～7月11日

遺構：石垣（大手枡形の一部）・石組堅坑・石組暗渠・石組溝 遺物：近世陶磁器・瓦

石垣は大手枡形の北側部分と想定される。石組堅坑と暗渠は、弘化四年～嘉永元年にかけて行われた二ノ丸石垣修復の際に築かれた堀水の排水施設。堀のNo.3008石垣下部にも暗渠が確認された。ここも盛土による造成が行われている。



第23図 調査地（東から）



第24図 石垣（北東から）





第25図 石組竪坑と暗渠天井石（東から）



第26図 暗渠内部（南から）

レ. 島原図書館駐車場建設に伴う範囲確認調査 調査期間：平成26年9月2日～9月9日

遺構：なし 遺物：陶磁器

堀南東石垣下部の暗渠の有無を確認したが、前述の暗渠以外は確認できなかった。また既存建物の解体工事の際に、現地表下5mまでは盛土による造成がなされていることを確認した。

ソ. 個人住宅建設に伴う範囲確認調査

調査期間：平成26年10月23日～24日

遺構：なし 遺物：なし

興慶園（泉水屋敷）の西側にあたる。地山の岩盤層が表土下70～80cmで確認され、この岩盤層の直上を豊富な伏流水が流れている。このような地形のため表土下50cm程から湧水が認められる。



第27図 調査坑完掘状況（南から）



第28図 同湧水（南から）

ツ. 集合住宅建設に伴う範囲確認調査

調査期間：平成26年11月21日～11月22日

遺構：なし

遺物：近世陶磁器（現代の廃棄坑から出土）

現地表から岩盤層まで50cm～70cm掘削したがここでは湧水が見られなかった。敷地西側に1m程の段差を作り出している。外曲輪は傾斜地を削り平坦地を作り出しているため、屋敷地全体を水平にせず、不用意な場所からの湧水の流出を防ぐ措置と考えられる。



第29図 敷地内の段差（南から）

小早川邸にも同様の段差が作り出されている。

## (2) 建造物

島原城周辺の藩政時代の古民家については、平成12年10月から平成13年8月にかけて(財)日本ナショナルトラストにより旧島原街道の上の町から白土町の民家が調査され、猪原金物店主屋が万延二(1861)年、保里川家住宅主屋が江戸末期の建築であることが確認された。平成18年度には島原市に所在する歴史的建造部・土木構造物の調査が行われ、鵜殿家住宅旧主屋が天保十三(1842)年、同土蔵が江戸末期の建築であることが確認されている。また、島原城御馬見所は、明治維新後に三ノ丸から口之津町(南島原市)に移築され昭和41年に本丸に移築されていたが、この調査で規模や構造が確認された。以上5軒の建物は国登録有形文化財となっている。鉄砲丁は平成19・20年度に伝統的建造物群保存対策調査事業として調査が行われ、それまで藩政時代の建築と周知されていた山本邸、篠塚邸、鳥田邸のほか16軒の建造物が藩政時代の建築と確認されている。

外曲輪の小早川邸(元治二年「島原藩土屋敷図」では、島原藩老連判役 佐野勇太郎邸宅)は、日本ナショナルトラストの調査時に外観のみ調査されていたが、平成23年の詳細調査の結果、常磐茶屋から流れる湧水を利用した所謂「水屋敷」と呼ばれる庭園が、近世から近代にかけての池泉庭園として登録記念物となっている。同主屋(明治23年建築)も国登録有形文化財となっている。

### ①本丸

ネ. 島原城御馬見所(移築)

構造形式: 木造平屋建、切妻造、杉皮葺

建築年代: 江戸末期



第30図 島原城御馬見所

### ②外曲輪

ナ. 小早川氏庭園

構造形式: 池泉庭園

建築年代: 近世から近代

### ③町屋 (ただし近世に遡るもの)

ラ. 鵜殿家住宅旧主屋

構造形式: 木造2階建、瓦葺

建築年代: 天保十三(1842)年

建築年代が明確な島原市最古の民家

ム. 鵜殿家住宅土蔵

構造形式: 土蔵造2階建、瓦葺

建築年代: 江戸末期/昭和前期改修

ウ. 猪原金物店主屋

構造形式: 木造2階建、瓦葺

建築年代: 万延二(1861)年及び明治後期

エ. 保里川家住宅主屋

構造形式: 木造2階建、瓦葺

建築年代: 江戸末期



第31図 鵜殿家住宅旧主屋



第32図 鉄砲町景観

④鉄砲丁

ノ. 山本邸

構造形式：木造平屋建、茅葺き  
建築年代：慶應四(1868)年

オ. 篠塚邸

構造形式：木造平屋建、茅葺き  
建築年代：19世紀前期

ク. 鳥田邸

構造形式：木造平屋建、茅葺き  
建築年代：慶應三(1867)年



第33図 山本家外観

【参考文献】

- 長岡造形大学宮澤智士研究室編 2002 『島原 キリシタン弾圧の痕跡を残す町なみ』財団法人日本ナショナルトラスト
- 宮澤智士・長谷部圭紅 2007 『登録文化財建造物候補目録—島原発見のサイエンス— 島原市歴史的建造物・土木建造物の調査』島原市教育委員会
- 宮本雅明編 2009 『島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』島原市教育委員会
- 本田秀樹編 2002 『森岳城跡—県立島原高等学校体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』長崎県文化財調査報告書 第166集
- 本田秀樹編 2003 『森岳城跡ⅡⅡ—県立島原高等学校浄化槽移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』長崎県文化財調査報告書 第173集
- 土橋啓介 2006 『森岳城跡—島原法務総合庁舎増築に係る埋蔵文化財調査報告—』島原市文化財調査報告書 第11集
- 島原市編 2015 『森岳城跡Ⅲ』島原市文化財調査報告書 第14集
- 宇土靖之・堤浩一郎 2015 『森岳城跡Ⅳ』島原市文化財調査報告書 第15集



## 第2章 石垣調査の概要

### 第1節 調査の目的

島原城は、元和四（1618）年に築城が開始され、7年の歳月をかけて寛永元（1624）年に完成したとされるが、400年に及ぶ長い歴史の中で石垣は変状し、ハラミ、面へコミ、石材のワレ・落石等、石垣の破損の状況が数多く確認されていた。このため、台帳作成は石垣の現状記録、石垣の総体的な特徴の把握を第一とする。また、今後の調査研究や石垣保存整備計画等の基礎資料となり得るように努める。三ノ丸石垣や外塁線の石垣に関しては、絵図資料や地籍図等の整理も行いながら、城内の石垣分布や状況把握を目的とする。

### 第2節 調査の方法

調査の対象となる石垣は、本丸、二ノ丸、堀外周、三ノ丸、外塁線に分けられる。

本丸や堀は観光地として整備され、二ノ丸も文化会館や公民館などの公共施設が立ち並ぶ現状で、本丸に一部民有地も存在するが、大部分が市有地で石垣調査は比較的可能な環境である。問題なのは、石材の隙間から草木が繁殖し石垣面の観察が困難になる事であったが、7月から8月にかけて島原市都市整備課が実施する除草作業と、12月に実際される九電グループによる除草作業及び自衛隊による石垣の清掃を兼ねた登坂訓練とによる清掃奉仕作業後に集中的に調査を行う事で解決した。



第34図 清掃の様子

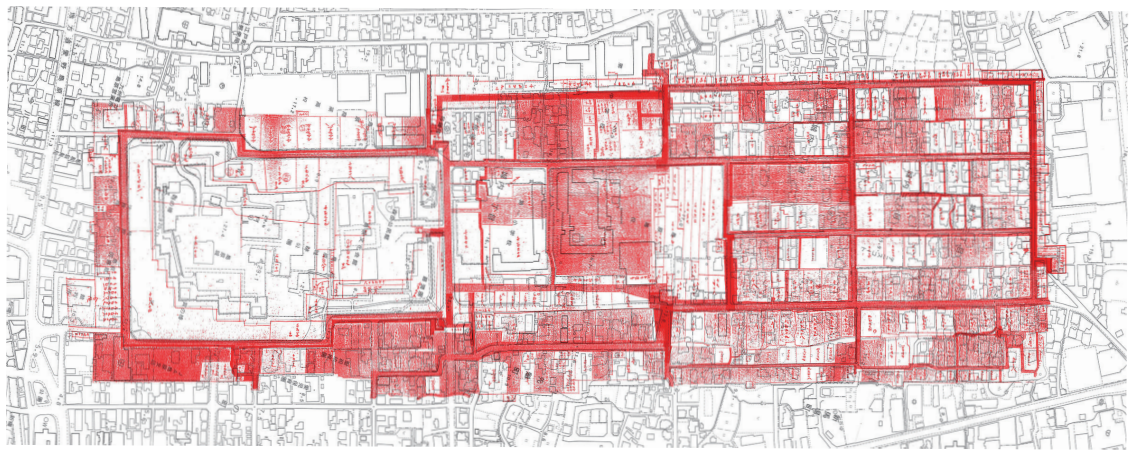
一方、民有地に立地する三ノ丸や外塁線石垣に関しては、その石垣の位置と状態を把握できていなかったため、まず島原市内の地籍図（明治29年、昭和30年代）、絵図資料の整理と現況地形図との合成図から石垣塁線の推定地を示す作業から始めた。外塁線石垣に関しては10年以上前の論稿であるが、土橋啓介氏の研究があり（土橋2001）、外曲輪の大まかな塁線と櫓台突出部の存在を明らかにしている。三ノ丸周辺、外塁線石垣の悉皆調査は大部分が民有地で、一軒一軒お宅を訪問して、庭先や家の裏にある石垣を見せて頂き、石垣の記録や聞き取り調査を行うという地道な作業を行っていった。実際、調査では観察不可能、撮影不可能な立地環境にある石垣も多数存在したため、調査項目を一部簡略化して石垣の分布と状態把握に努めた。



第35図 地籍図（明治29年）



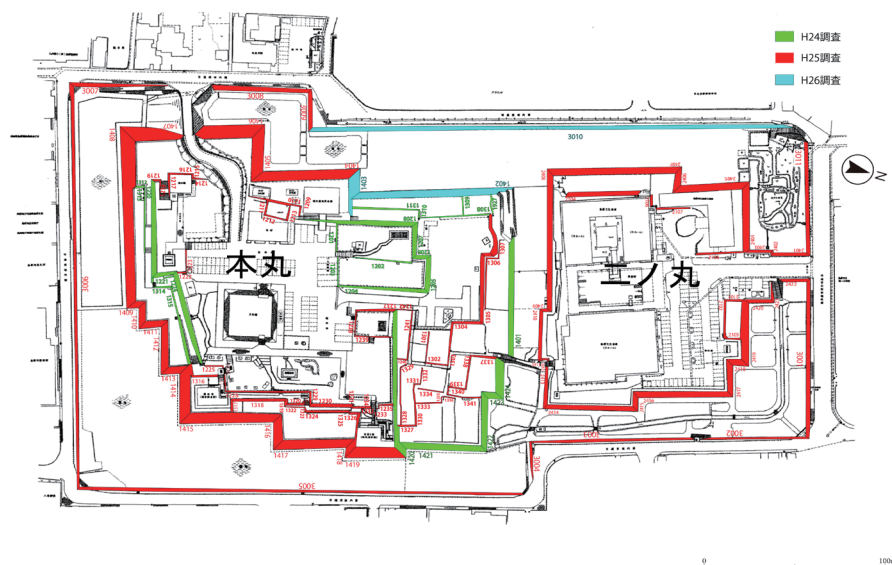
第36図 地籍図（昭和30年代）



第37図 地籍図合成図

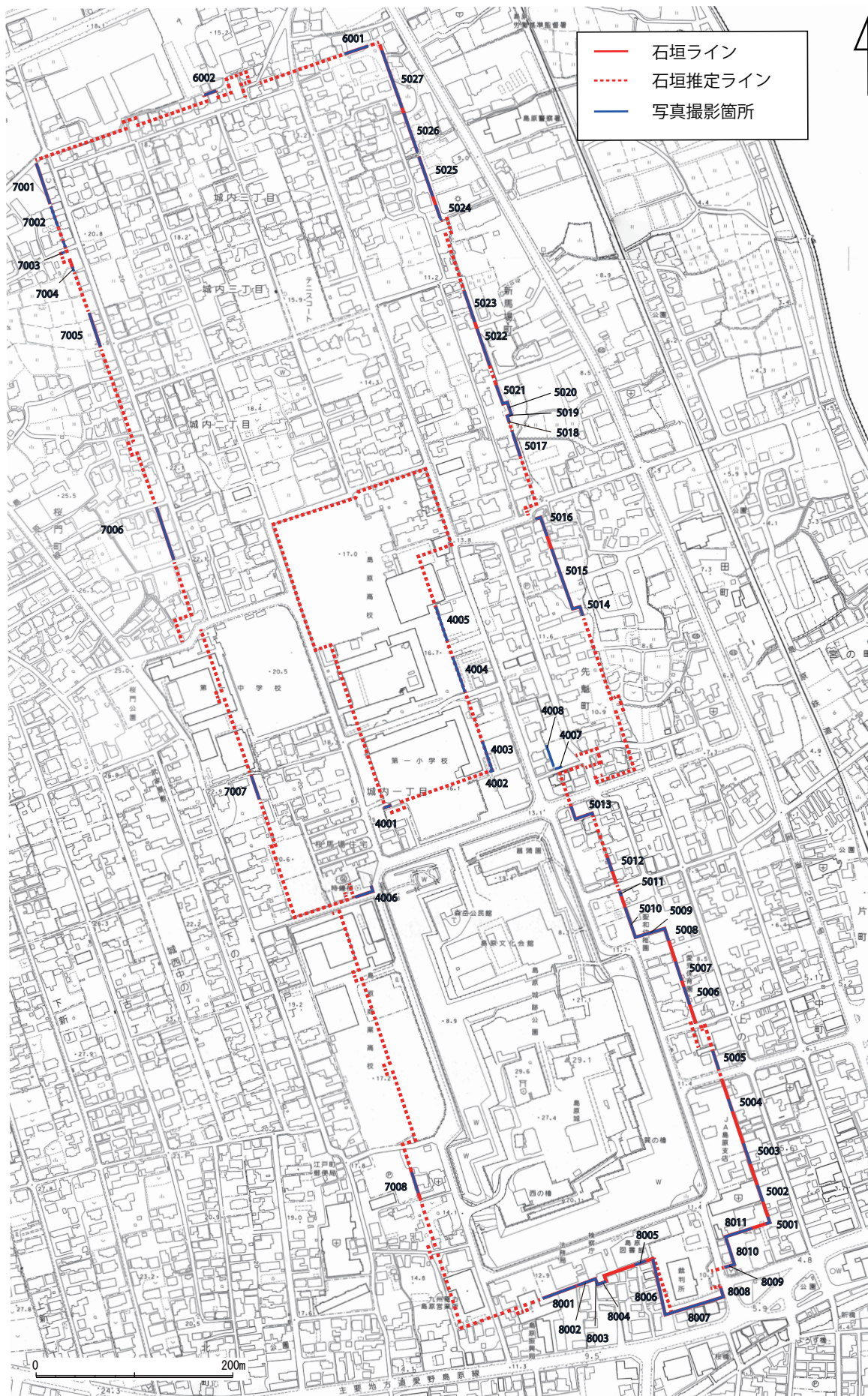
台帳では、石垣を管理するために石垣の折れ～折れまでを一面とした石垣番号を付けた。三ノ丸周辺や外堀線石垣に関しては、石垣前方にスペースがなく、折れ～折れまでの石垣の管理番号付加は難しい立地場所もあったため、写真撮影可能な範囲に限って番号を付けた。本丸は1000番～、二ノ丸は2000番～、堀外周は3000番～、三ノ丸周辺は4000番～、外堀線石垣の東側は5000番～、外堀線北側は6000番～、外堀線西側は7000番～、外堀線南側は8000番～とした。また、本丸天守台や本丸に擦り付けられたスロープ側面の石垣等、明らかに現代の石垣と想定される石垣については台帳作成の調査対象から除外した。調査対象石垣は本丸は1201～1244、1301～1345、1401～1424の110面。二ノ丸は2101～2107、2401～2422の29面。堀外周は3001～3011の11面の計150面を対象に調査を行った。三ノ丸周辺、外堀線石垣の撮影箇所は56カ所である。

台帳作成は平成24年度に本丸から開始し、石垣1201～1208、1220～1224、1308～1311、1312～1315、1401、1420～1424の台帳を作成した。平成25年度には、本丸、二ノ丸、堀外周で1402～1403、3010を除く石垣の調査を行った。また、同時に絵図資料や地籍図のスキヤニング・合成作業も行い、島原城に関する基礎資料の収集に努めた。平成26年度には本丸1402、1403、堀外周3010の石垣の台帳作成を行い、平成25年度にスキヤニング・合成を行った絵図資料や地籍図から、外堀線や城内の範囲を推定し悉皆調査を行った。悉皆調査では三ノ丸周辺や外堀線の石垣の台帳作成、城内の水路調査、石造物調査、屋敷石垣調査、聞き取り調査なども行った。



第38図 年度別台帳作成状況図





第39図 三ノ丸・外郭線石垣配置図





第40図 森岳城石垣配置図

【石垣調査項目一本丸、二の丸、堀外周一】

(1) 石垣写真撮影

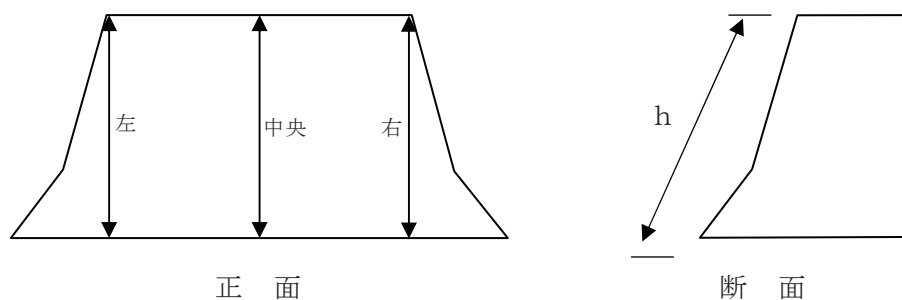
写真撮影は中判カメラ（モノクロフィルム）とデジタルカメラ（1000万画素以上）で行う。デジタルカメラで撮影した画像は、石垣面として一枚に合成し、状態把握が容易にできるようにする。

(2) 全体調査

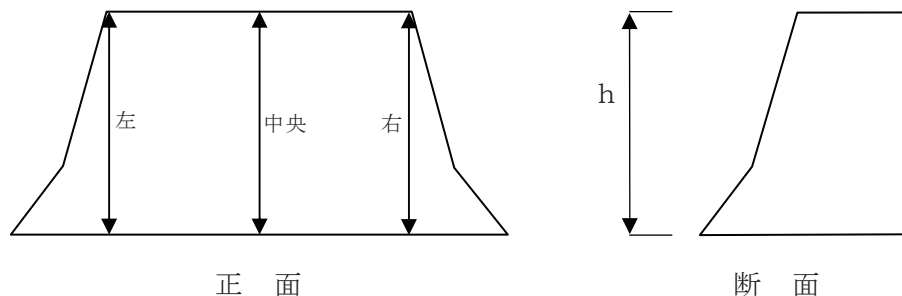
①計測

一つの面を構成する石垣ごとに矩高、垂直高、天端長、基底部長、勾配、立面積をトータルステーションで計測する。

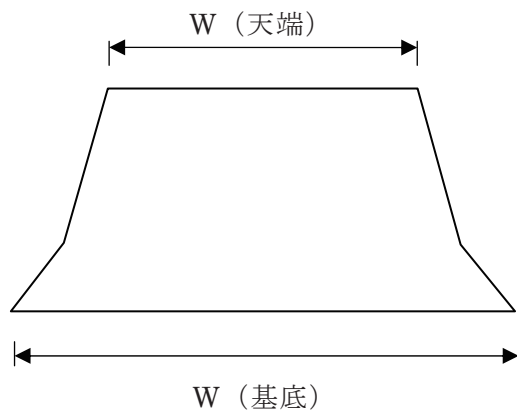
- ・矩高 現地盤からの矩高を計測する。



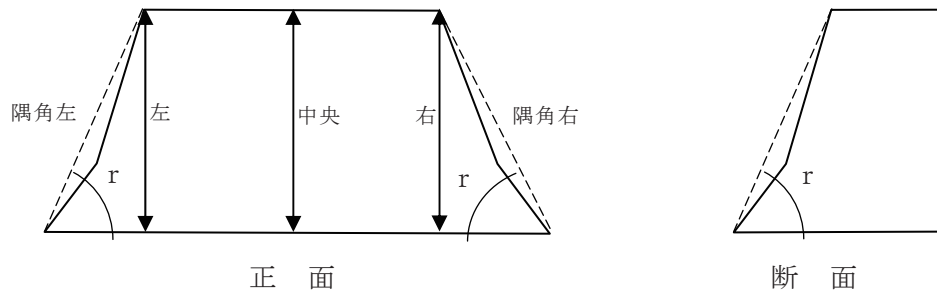
- ・垂直高 現地盤からの垂直高を計測する。



- ・天端長 石垣天端部の長さを計測する。
- ・基底長 石垣基底部の長さを計測する。



- ・勾配 天端部と基底部を直線で結んだ直線勾配を計測する。勾配の計測は、スラントまたは測量機材を用いて測定する。



- ・面積 現地測量結果をもとに立面積 (m<sup>2</sup>) を算出する。

## ②立地状態調査

- ・空中写真での状況 昭和22年にアメリカ軍によって撮影された空中写真に写っているか？有無を判断する。
- ・反り 有無を目視で判断する。
- ・根石部の状況 水没/埋没を入力する。
- ・積み替え回数 何回積み直しを行っているか？目視で判断する。













## (3) 石材調査

- ①石材産地 資料や修理等で石材が特定できる場合に産地を記入する。
- ②石質 資料や修理等で石材が特定できる場合に石質を記入する。
- ③石材の加工 石垣表面の加工の状態を記入する。  
 自然石———原則的に未加工状態の石材  
 粗割石———石垣面をつくるため、矢で自然石を1～2回割った石材  
 割石———立方体、長方体に割った石材  
 切石———石材縁辺部を直線的に整形し、合端が隙間なく積めるように加工した石材。
- ④石材の形状 石面の形状を目視で判断する。
- ⑤石材の大きさ 任意で2～3m四方の範囲を指定し、その範囲の石材の平均値を入力する。
- ⑥石材調整加工について 石垣に石材加工調整痕が確認できれば、入力する。矢穴、ノミ痕、ハツリ、スダレ、刻印、転用石などの調整痕を確認できれば、入力する。

- (4) 劣化度調査 石垣面を観察し石材の状態をチェックする。チェックする項目はヌケ、ワレ、スキマ、突出、へコミ、クズレ、ハラミ、面へコミ、樹木、転

用石、矢穴、刻印である。

石垣に影響する項目と内容を目視で判断する。石材の破損、植生、後世の施設、人工的改変、石材の欠落、排水処理、地盤に該当すれば、入力する。

ヌケ	ワレ	スキマ	突出	へこみ	クズレ	ハラミ	面へこみ	木	転用石	矢穴	刻印
											

(5) 歴史調査 構築時期、絵図資料、発掘調査歴、修理歴などあれば、入力する。

(6) 図面関係 石垣の現況位置図と絵図資料の位置を表示する。

(7) 備考 その他特記事項を入力する。

### 【石垣調査項目一三の丸周辺、外郭線石垣一】

#### (1) 石垣写真撮影

デジタルカメラ（1000万画素以上）で撮影を行う。住宅街のため石垣前方にスペースがない立地状態の場合は、可能な限り石垣全体の規模がわかるような画像と石垣の詳細画像の撮影に努める。

(2) 位置図 写真撮影可能な範囲の石垣ラインをプロットし、石垣番号を付ける。

#### (3) 簡易計測・石垣全体調査

①幅・残存高

幅と残存高を入力する。

②反り

反りの有無を判断する。

③隅角部

隅角部の有無を判断する。

④石材加工調整について

石垣に石材加工調整痕が確認できれば、入力する。矢穴、ハツリ、刻印、ノミ痕、スダレ、転用石を確認できれば、入力する。

#### (4) 影響の内容と種類

石垣に影響を与える要因を目視で判断する。

石材の破損、植生、後世の施設、人工的改変、石材の欠落、排水処理、地盤に該当すれば、入力する。

#### (5) 備考

その他特記事項があれば、入力する。

### 【参考文献】

土橋啓介 2001 「島原城外郭遺構について」『西海考古第3号』西海考古同人会



### 第3節 城内の石垣の現況

島原城の石垣は立地の違いから、本丸、二ノ丸、堀外周、三ノ丸、外墨線に大別できる。本丸や二ノ丸内部の石垣は、公園整備や公共施設などの建設で中心部分が失われているが、本丸と二ノ丸を囲む堀の両側の石垣（本丸外周、二ノ丸外周、堀外周）は比較的良好な保存状態である。三ノ丸推定地である島原市立第一小学校と長崎県立島原高校敷地内では、三ノ丸石垣と推定できる石垣墨線が東側や南側の一部に見られ、南限である南東部隅角部も確認できた。ただ、北側と西側では石垣は壊滅的で水路や地割等の周辺条件からラインを推定するのがやっとであった。外墨線についても、南限である大手門周辺の石垣が最も良好な保存状態で、南側と東側の石垣は江戸期の石垣と思われる石垣が見られる。しかし、北側と西側については、住宅地に埋もれてかろうじて石垣墨線を辿れる状況である。

#### (1) 本丸

この昭和30年代から開始された公園整備で本丸内の風景が改変され、天守台やその他の石垣等多数失われているが、アスファルト舗装された本丸駐車場の地下に当時の石垣が埋没している可能性は十分にある。国土地理院の空中写真（昭和22年）からは、改変前の本丸の様子を伺う事ができる。本丸内部は大きく分けて、現在のアスファルト舗装された本丸中核エリア、南側・東側・西側に展開する帯曲輪エリア、そして北側の櫓形虎口エリアで構成されている。中核エリアの石垣は、ほとんどが撤去されているが、南側と東側の帯曲輪エリアや北側の櫓形虎口エリアは比較的良好な残存状態である。

#### ①本丸内部

##### ・本丸中核エリア

天守台石垣を始め、南西部西櫓や櫓形虎口との連結部分など、損失した石垣が多数確認される。石垣1201～1203、1213、1238、1239、1243、1244などの現在確認できる石垣面は明治期以降に築かれた可能性が高い。

売店の背後にある石垣1211の石材は自然石や粗割石ではなく、割石が用いられる。1213隅角部で見られる江戸切りは、昭和30年代に築かれた天守台石垣の隅角部や1201右隅角部、1203右隅角部などにも見られる。天守台石垣については、北面の上部に「○」の刻印や矢穴が残る石材が多数確認されることから、石材を再加工・再利用したと考えられる。



第41図 本丸天守閣 北から



第42図 本丸北側 東から

##### ・帯曲輪エリア

本丸中核エリアの西、南、東側に8～20mの曲輪群が取り巻いているが、このエリアには現在土塀が多く築かれている。この土塀の直下には10cm程度の小石が積まれた部分があるが、この小石は昭和30年代から開始される土塀復元の際に新たに築かれたもので、土塀自体がヒビ割れを起こしている部分や石垣面との接地面が不安定な箇所も見られる。

隅角部1209-1210は算木積みにならず、最下段を除いて積み替えが行われた可能性があり、

半分埋没した状態の角石が確認できる。

石垣1214～1217は布目積みの石垣で石材は大きい、隅角部が算木にならず、西櫓復元時に積み直しが行われた可能性が高い。同様の隅角部には1217-1218や1219-1220があり、石垣1220隅角部より左5m程度は積み替えである。また、1220中央部の石材には配電盤が取り付けられており、その周辺にハラミが見られる。

石垣1223や1322は石垣の前面に積まれた押さえ石垣と考えられる。1221や1230の石垣面の40cm程度前面に低石垣が築かれている。高さは1223が0.9m、1332は0.6mである。

石垣1228左隅角部付近では、埋没した隅角部が確認でき、石垣1227は新しく増設された石垣と判断できる。また、1228中央部には現代に階段が取り付けられ、中央部石垣の一部が失われている状態である。1229はモルタルの練積みの石垣で目地に排水パイプが見られる。

石垣1315や1318では中央部に横目地が通り、土塀復元工事に際して上面通路は盛土によって地盤上げされたと推測される。江戸期には本丸中核エリアに入る門跡が想定される1225と1226部分であるが、ここも昭和になって築かれたと考えられる。

もう一つの門跡が想定される場所が石垣1232～1234周りで、石垣1230と1235の直線状に結んだラインより東側にはみ出た箇所は新しく積んだ石垣で、石垣1232～1234の内部には虎口の石垣が埋没している可能性もある。



第43図 本丸東側帯曲輪 北から



第44図 本丸南側帯曲輪 東から

#### ・柵形虎口エリア

本丸北側の柵形虎口は、本来の通路である廊下橋から本丸に入るルート上にあり、鏡石や立石などの巨石を配石した石垣面が連続する空間になっている。鏡石や立石は廊下橋から本丸に入ってすぐの石垣1337、1338、1339、1302、1303、1304などで見られ、現況で見える範囲での計測値は、横幅2.7m～3.3m×高さ0.9m～2.7mを測る。また、1302-1303、1337-1338隅角部には2mを超える巨大な立石が配置されるなど、この虎口空間に高度な石積み技術を凝縮し、権威の誇示する空間設計がなされている。聞き取り調査では、本丸中核エリアと連結する隅角部にも2mを超す立石があったとの情報もあり、この柵形虎口エリアから本丸中核エリアま



第45図 本丸柵形虎口 西から



第46図 本丸柵形虎口 南から



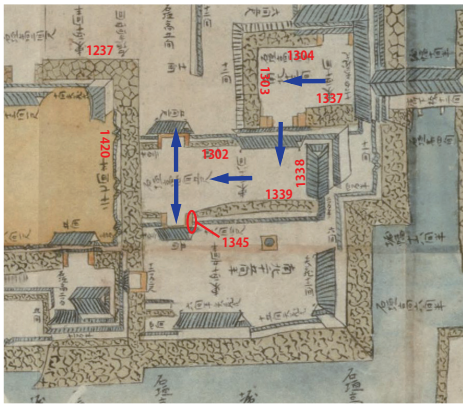
至る所に巨石が配されていた可能性もある。

虎口西側の大きな平坦部は武者溜りとして使用されていたと考えられる。武者溜りにある石垣1306-1307隅角部は崩壊し、築石背面の裏込め石が見えている状態である。1307は割石による積み替えが行われ、平面形状がカーブする石垣になっている。また、1307と1401のクズレの位置が同じような位置にあるため、1307、1401-1402隅角部の石垣は同時期に崩壊したと推測される。

柵形空間内にある低石垣の大部分は畑の石段であるが、草木に埋もれていた石垣1345には矢穴が確認でき、現在は失われている石垣1239、1240から南に伸びる石垣と繋がっていたと考えられる。

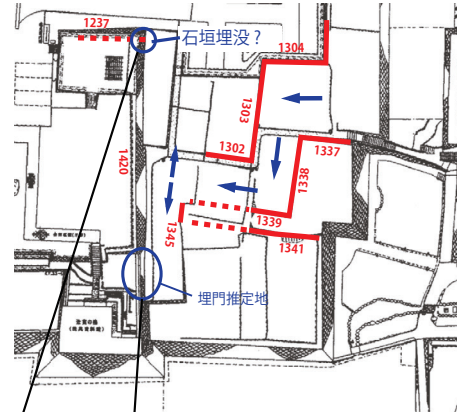
石垣1420の右隅角部付近では、角石と推定される石材が半分埋没しており、石垣1237などは新しく増設された石垣の可能性もある。石垣1420の中央部では、石材が孕んで前面に押し出されている箇所があり、絵図などに示されている門跡（埋門）である可能性が高い。

他、1304-1305隅角部や1205-1206隅角部などは、地表面付近から積み替えが行われた痕跡を確認できるなど、徹底的に石垣修理を行っている箇所もある。



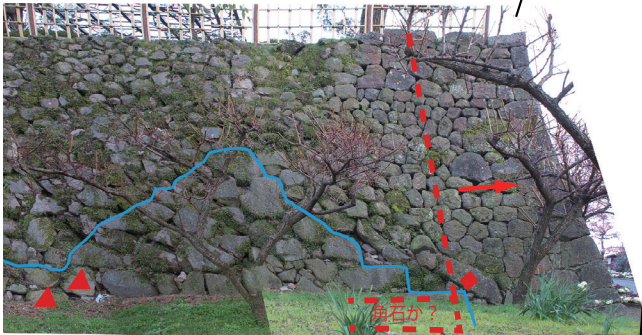
本丸柵形虎口周辺の様子

(絵図資料：[日本古城絵図] 西海道之部 (1) 322 嶋原之城図 国立国会図書館蔵)

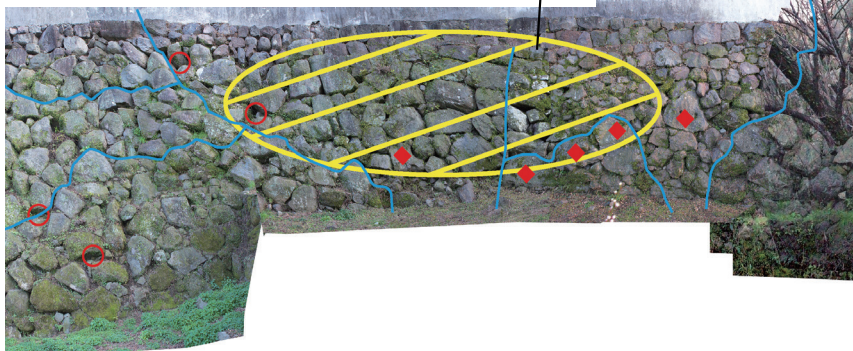


本丸柵形虎口周辺の石垣

1420 右隅角部 (石垣埋没か?)



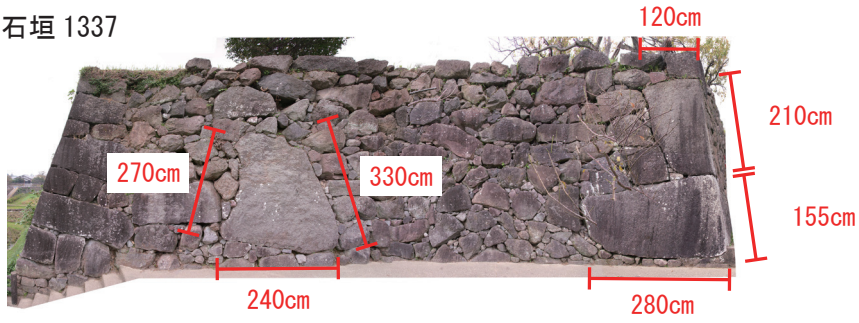
1420 埋門推定地周辺の石垣



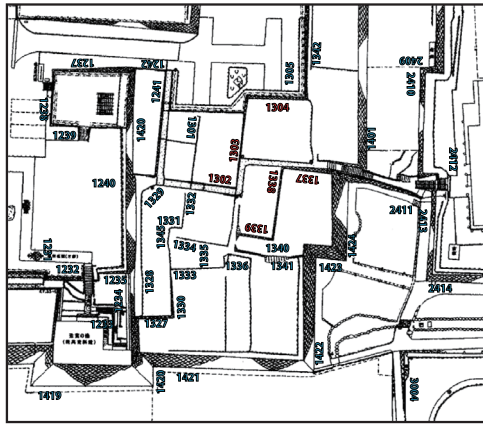
第 47 図 石垣 1420 の現状



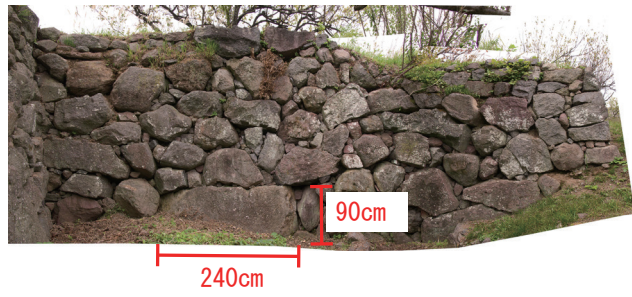
石垣 1337



石垣 1338



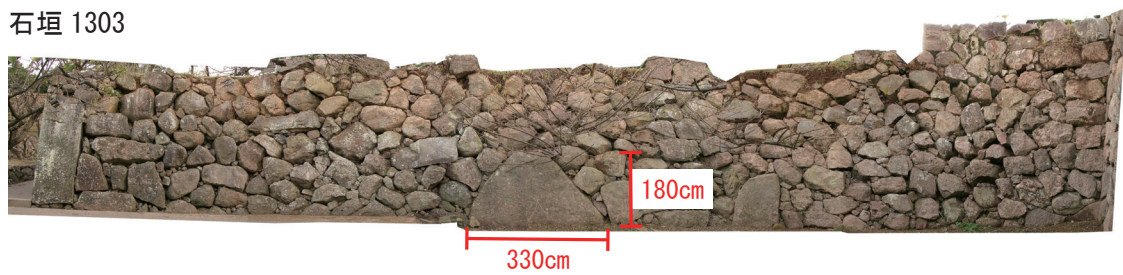
石垣 1339



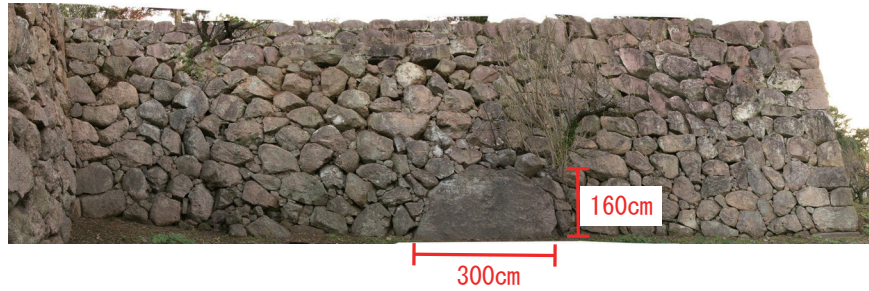
石垣 1302



石垣 1303



石垣 1304



第48図 櫛形虎口 巨石計測図



## ②本丸外周

本丸外周の石垣は1401を除き、いずれも10mを超える高石垣であるが、その大部分の石垣上部は天端石がなく、石材も小さいことなどから積み替えが行われたと考えられる。反りを持つ石垣が多く確認されるが、その勾配角度が築城当初と同じものか今後検討を要する。外周の石垣は上部構造物の加重のせい、築石・角石・角脇石もワレやヌケが目立ち、石垣面に関しては数か月で石垣面が隠れる程、草木が繁殖する状態である。これは、裏込め石背面からの盛土が石面付近まで流出している事が考えられ、裏込め石の希薄さ、背面構造の不安定さを露呈している状況を現している。また、石垣面には伐採済ではあるが、比較的大きな樹木根が見られ、石垣に影響を与えないか経過観察していく必要がある。

隅角部1401-1402では数十メートルにわたって大規模に崩壊しており、平成24年6月に崩落した部分は、布団籠による補強がなされている。石垣1402も平成24年6月に崩落し、崩落した石垣は平成26年3月に積み直しが完成している。工期内には背面部分の文化財発掘調査も並行して行われ貴重な調査成果を挙げている。1403は中央部に隅角部が埋没しており、その東側に新しく石垣を増設して現在の1311を築いている。

1404には左側隅角部周辺に大きなハラミが確認できる。隅角部1403-1404の角石や隅脇石は他の隅角部より損害が酷く、ほとんどの石材にワレが見られる状況である。

現在、本丸に直接入るルートが設置されているため、分断されているように見えるが、元々1406と1407は同一の石垣面である。隅角部1407-1408では水面からの高さ17.09mを測り、九州でも有数の高石垣を誇る。

石垣1410と1411で使用されている石材は他の石垣より小さく、それが時期差によるものか単なる石材加工の問題なのか今後検討を要する。石垣1414では異櫓の櫓台隅角部の上に新たな石垣が積み上げられている痕跡が確認できる。東側の石垣1415~1421の石材加工は他の石垣面より丁寧に行っている印象を受ける。大手門から二ノ丸に向かう城道で最も目につく石垣という事を意識したのであろうか。特に石垣1421の入隅部下部はその傾向が顕著で布目崩し積みの石垣もみられる。



第49図 昭和初期に増設された道



第50図 右が石垣1401 左が石垣2408

## (2) 二ノ丸

本丸同様、明治の初めに多門櫓や櫓門などが解体されている。現在の二ノ丸は、昭和49（1974）年に島原文化会館が建てられ、内部の南側半分の面積を占めている。その北側には駐車場が整備され、西側には森岳公民館が建てられるなど、二ノ丸内部の石垣は西側と北側に一部確認できるのみである。二ノ丸石垣に関しては高さ10mを超える石垣は少なく、6~8m程度の高さの石垣が多い。二ノ丸外周の石垣に関しても、本丸同様ほとんどの石垣で上部の積み替えが行われていると考えられる。その他、反りを持つ石垣が少ない点为本丸外周の石垣と異なる点である。

石垣2104は間詰石のヌケが多くハラミが進行している。また、左側で割石での積み替えが確

認できる。その外側の2407でも大規模な割石の積み替えラインが確認でき、2104と2407石垣の上部には多門櫓があったとされていることから、多間櫓の重量過度による損傷があった可能性がある。また、2407石面には伐採された大きな樹木根によるハラミが見られ、今後経過観察を必要とする。

石垣2107の南側半分の石垣は近現代の積み直し痕跡が見られ、本丸天守台と同様に隅角部には江戸切りが確認できる。森岳公民館建設に伴うものか。

二ノ丸に入る虎口外側通路部分にあたるのは石垣2401と2422周辺であるが、2401は近現代の石垣である。石垣2401と入隅で組み合わせになるはずの2402は入隅で組み合わせにならず、道路の下に入りこむ状態で、石垣2422下部には江戸期と思われる石垣が確認できることから、東の石垣墨線は2422で西の墨線は現在の道路下に埋没している可能性が高い。

石垣2408では中央部下部に排水パイプが設置され、最下段付近からの近現代の積み直しが確認される。積み替え部分は自然石が用いられ、間詰石が極点に少ない。また、左側隅角部には2407積み替えの際に同様に積み替えられた痕跡が確認される。

石垣2413では中央部にハラミが確認でき、間詰石のヌケも多い。中央部に割石による積み替えが認められる。



第51図 二ノ丸内部 北から



第52図 二ノ丸内部東側 北から

### (3) 堀外周

本丸・二ノ丸を囲む堀は、絵図などに見られるように水堀として機能していたと考えられるが、現在、堀南東から堀水が排水されているため、本丸の南側半分程度しか水は張られていない。堀内部には北側に螢の里や菖蒲園、本丸と二ノ丸の間にゲートボール場などが整備されている。石垣3001-3002、3005-3006、3007-3008、3008-3009、3010-3011の入隅部上部には現在歩道が取り付けられ、上部の道路工事の際に積み直しが行われたと考えられる。また、3002と3003、3007と3008等は堀底に降りるための階段が作られているため、途切れたように見えるが、階段の石垣内に埋没し現在も連結していると考えられる。また、3002、3003、3005の石垣上部には道路工事の際に積まれた石材の痕跡が確認される。



第53図 二ノ丸東側堀内部 左が石垣3002、右が2416



第54図 本丸西側堀内部 左から3008、3009、3010



堀外周の石垣に関しては東側と西側で高さが異なり、3007、3008、3009、3010など東側の石垣高さは5～6 m程度で、3002、3003、3004、3005など西側石垣の高さは3～4 m程度となっている。石垣3005の中央部ではハラミが著しく進行し、今にも崩壊する可能性がある。上面の道路には大型バスや車両の通行量も多いため、早急の対策が必要である。3010や3011には基底部付近まで積み直しラインが確認され、割石の布目積みが認められる。

#### (4) 三ノ丸

現在は島原市立第一小学校と長崎県立島原高等学校の敷地になっている。敷地内では、当時の石垣墨線と想定される石垣が東側に確認できるが、その他はほぼ壊滅的であった。三ノ丸自体が築城当初から存在したか確かではないが、〔島原城図〕臼杵市教委371には「高力殿居屋敷」とあり、少なくとも高力氏統治の頃には機能していたと考えられる。

三ノ丸の東側石垣と推定される石垣4004は現在の島原高校駐輪場と校舎敷地の境界を成す石垣であり、石材は比較的小さく、積み直しが行われた可能性もあるが、石垣墨線としては確実に存在する。この石垣4004は北側の4005と繋がり弓道場の西を通り北側に伸び、島原高校体育館の敷地地下から検出されたL字の堀跡に繋がると推定される(註2)。途中、縦目地が確認できる箇所があり、門跡の可能性もあるが道路の下に埋没し詳細は不明である。

駐輪場から南側に伸びる石垣は失われているが、明らかな段差がみられ、第一小学校南側の4002の隅角部まで続く事が確認できる。この4002の石垣は積み替えが行われているが、三ノ丸の南限として石垣墨線を確認でき、この南側が堀になっていたと考えられる。昭和50年代頃の第一小学校には南限の石垣墨線が残存していた。



第55図 三ノ丸石垣4004(島原高校駐輪場)



第56図 三ノ丸石垣隅角部40024003(第一小学校敷地内)

#### (5) 外墨線石垣

南北に細長い島原城は西から東に緩やかに傾斜する扇状地を横切るように構築されているため、城の東西で最大10m程の比高差がある。また、外墨線石垣の残存状況は西側が1 m程の高さに対し、東側は4 m程の石垣が存在している状態である。現在、外墨線石垣は墨線の城内側の住民の所有として管理されており、墨線外側の住宅地に伺ったが、住民の大半の方はその石垣が島原城に関係する石垣という認識はあるようである。

外墨線石垣については土橋啓介氏の研究がある。土橋氏によれば、外墨線石垣には城門7、平櫓が33も設けられ、その櫓台の突出部が何カ所か現存しているとされる。外墨線石垣の調査では、まず地籍図を現在の地形図と合成するところから始めたが、地籍図上にも「ヤグラ」と明記されている箇所もあった。

調査の結果、外墨線の石垣は東側と南側で多く確認できた。5001、5002、8011など外墨線の石垣の南東部が現況では高さ5～6 mと一番高いエリアである。それ以外の部分は現況では2～3 m程度の石垣となり、50 cm未満の高さの石垣も見られる。

櫓台の突出部の痕跡を確認できた箇所は、5019～5021、7003、8003～8004の3カ所である。5019～5021の櫓台は東西5m×南北14m×高さ2.3m程度で、8003～8004の櫓台は南北7m×東

西13m×高さ3.6m程度である。他、石垣7005と7006の間の櫓台跡地には石垣は失われているが「ヤグラ」の地名が残っていた。石垣5014の南側の櫓台は失われているが、聞き取り調査により位置を推定できた。石垣6002の西側の櫓台推定地では、住宅敷地内の土地が2つに分割されていたという聞き取り調査成果から櫓台跡地と比定している。

外塁線の門であった桜門、西虎口門、諫早門、田町門などの跡地では、現在も道路として使用されているが、石垣が失われた今も城内に入る導線は全く変化しておらず、桜門、諫早門、田町門跡では、微妙なカーブが柵形空間の位置を示している。

城内大手門は8006～8010で構成される空間であり、現在は長崎地方裁判所島原支部となっている。他の門跡よりも広大な柵形空間であり、内部の石塁は確認できないが、石垣縁辺部は土塁状の高まりがあり、その痕跡を見ることができる。大手門の南側の石垣8006左側隅角部には切石が用いられ、新たに積まれた石垣がある。これは内部の柵形空間の拡張を意味するものであるが、この石垣の構築時期に関しては今後検討を要する。

大手門周辺の石垣は、比較的良好な保存状態であり、上部に積み直しを確認できる部分もあるが、石垣5001～5006や8001～8004、8007～8011などは江戸期の石垣と考えられる。他、5010や5013に部分的に江戸期の石垣が確認できる。

地籍図でも確認できるが、外塁線石垣は西側と東側で石塁の幅が異なる。正確に言えば、西虎口門の北側から諫早門周辺までの石垣だけが石塁幅約10mである。一方、それ以外の外塁線石垣の幅については、保存状態が良好な石垣5019～5021から幅約4m程度と推測される。多門櫓と連結した続櫓の想定が安易に思い浮かぶが、明治期の『大村・島原・平戸・五島旧城郭調帳』には当該地の櫓台に平櫓・柵があったとされ詳細は不明である。城下町設計の観点から考えれば、防御的な意味合いよりも実用的な構築の可能性もある。絵図資料などに記載されているように城内の北側には西から城内に流れ込む水路があり、現在もその用水路には膨大な水量が流れている。城内の外側は低湿地であった可能性が高く、雨水などで湧水の制御が不可能になった場合の防水堤防的な役割を果たしていたかもしれない。



第 57 図 外郭線石垣隅角部 80078008



第 58 図 外郭線石垣 5002



第 59 図 外郭線石垣 5018～5020 (櫓台)



第 60 図 右が石垣 7007、左は城内



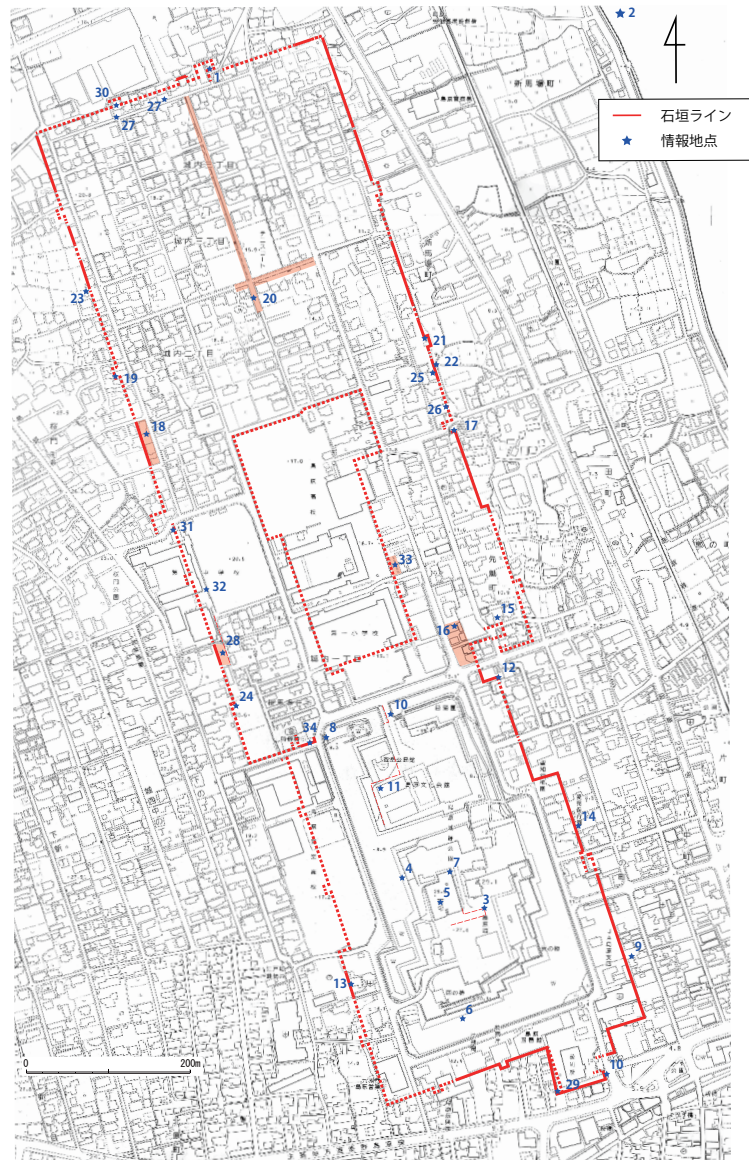
### 城内悉皆調査メモと聞き取り調査内容のまとめ

城内の石垣が失われたのは明治時代以降であり、昭和の初めまでは石垣が比較的残っていた部分が多かったという。城内の石垣調査を行うと同時に実施した住民の方への聞き取り調査で石垣について取得した情報をまとめたものが第10図である。

- 1 北門の石材や門部材等は、雲仙市国見町多比良周辺「正覚寺」という寺に移築された。
- 2 北門より北側の「前浜」という海岸より、島原城に石材を運んだという話がある。
- 3 隅角部には立石が使われていたらしい。北側の柵形空間は今よりも狭かった？
- 4 50年くらい前、子供の頃に石垣を少し登った地点に水路？抜け道？のような石敷きの穴があった。石敷きの水路？抜け道？があったのは、二の丸2407という話もあった。
- 5 稲荷様の祠は、元々現在の天守閣の位置にあったものを移動させた。
- 6 現在歩けるようにコンクリートで固められている。20年くらい前に工事を行った。
- 7 現代に石垣の積み替えを行った。（上から3、4段か？）
- 8 昔、西側の石垣から堀の中に流れる水路があったが、階段工事の際に水路は破壊された。
- 9 外塁線石垣の石材の隙間から水が流れてくるらしい。
- 10 石垣が道路で半分くらい埋まっている。
- 11 こんな感じの石垣墨線があったと思う。
- 12 隅角部の発見（角石と角脇石か？）
- 13 50～80cm程度の石材が使用されているらしい。
- 14 割れていない矢穴石あり。
- 15 割れていない矢穴石あり。失われた先魁門の石材か？
- 16 赤で塗りつぶされた部分は、盛り土してないのに昔から敷地が高かったらしい。この北側敷地は最近西側の道路に合わせて盛土されたらしい。（★16の東側の石垣は、先魁門の虎口空間の一部か？）
- 17 水路跡を確認。暗渠になっている。水路の北側の建物は新しく増築したらしく、田町門との関係は不明。
- 18 幅約10m、高さ約2mの石垣があったが、高さ50～70cmは削平した。
- 19 昔から土地の境界が折れて出っ張っていたらしい。現在南側の地境のみ確認できる。
- 20 常盤茶屋敷地の東側の道幅が昔の道幅である。★の地点は常盤茶屋という地名が残る。実際に小早川邸や常盤茶屋の北側には、東西に石垣や水路が現存しており、赤い部分が道幅だったと考えられる。（現在の道路より2m程広い）
- 21 昔櫓台の南半分売って北側だけ積み直しをしてしまった。地権者の方は櫓台の外側まで土地を所有され、「シロシタ（櫓台石垣外側の土地2mほど）」、「ヤグラ」、家屋敷地の三種類に土地が分かれていた。
- 22 水門あり
- 23 石垣の可能性のある石列の上面を確認。他水門？あり
- 24 東側の住民の方からの話。テニスコート建設の際に石垣が破壊された。24地点では現在のテニスコート敷地に沿うように曲がっていた。子供の頃は登って遊んでいたから、覚えている。幅5～10m、高さ1m～1.5m程度はあった。
- 25 住民の方の話。幅5～7mくらい、高さ1～1.5mの北側から続く石垣があったが、家を建て替える際に壊した。東側の外塁線下の土地も所有していたが、あとから売った。
- 26 住民の方の話。確かに石垣あったが家の建て替えの際に壊した。
- 27 当時の石垣か？
- 28 現在も幅10mの石塁として残存する。外塁線の外側の土地は嵩上げされているが、外塁

線と外墨線の内側敷地との関係はこのような高低差だったと推定される。

- 29 現在、裁判所西側の石垣で、大手門の石垣として機能していた可能性がある。★29付近から切石を用いた石垣が付け足されている。
- 30 土地が二つに分かれていたとの情報から櫓台跡地の可能性高い
- 31 矢穴石あり
- 32 第一中学校校舎敷地と運動場の境が外墨線の内側の石垣墨線であった可能性がある。その痕跡として、推定地の花壇の中に石列が見られる。
- 33 三の丸堀幅か？
- 34 時鐘楼の石垣。江戸期の石垣か？



第 61 図 悉皆調査、聞き取り調査地点図

註

1、『大村・島原・平戸。五島旧城郭調帳』長崎歴史文化博物館蔵

明治の行政資料で、島原城は明治8年～9年にかけて民間に払い下げられたとされる

2『森岳城』『森岳城Ⅱ』長崎県教育委員会刊

調査では、三ノ丸東側の南北に延びる堀跡とそこから東に直交する堀跡と推定される遺構が検出されている。

#### 第4節 石垣の分類と分布

島原城の石垣には1229や2105等の石垣のようにモルタルを用いた練積みが見られるが、大部分は自然石や粗割石を積み上げた野面積みに該当する。近年、石垣1402の一部が崩壊して災害復旧工事が行われたように、島原城の石垣は築城から何回も崩れ、修復工事を繰り返してきたと考えられる。城内には江戸期の石垣ばかりではなく、近現代の積み替えも多数見られることから、それらの石垣も対象とし、石垣の分類は築石部や隅角部の石材加工度と積み方による分類を基準とした。また、石垣の積み直し地点と修補絵図との比較をしたところ、四カ所で一致すると考えられる箇所を確認した。

##### ・A類

粗割石主体の石垣で築城当初に築かれた石垣と考えられる。60～80cm程度の石材が用いられ、丁寧な面加工が確認される。また、石面の形状は長方形の割合が高い感がある。A類は、本丸、二ノ丸外周など石垣下部に確認でき、石垣1408～1421ではより一層丁寧な面加工が確認できる。1421入隅部には布目崩し積みの石垣も確認できる。

##### ・B類

割石を主体とした布目積みの石垣である。20～50cm程度のある程度の規格化された石材が用いられ、石面にはノミによる加工痕が残る石材も確認できる。また、B類には矢口長5.9～7.1cm、矢底長5～5.5cm程度の矢穴痕が確認できる点が特徴で、石垣1227、1318、1320、1324、2104、2407、2408、3003、3006、3011などで見られる。この矢跡については現代でも使われていた可能性があり、江戸中頃～現代の石垣としか限定できていない。

##### ・C類

切石を主体とした石垣である。切石とは石材縁辺部を直線的に整形し、合端が隙間なく積めるように加工した石材の事であり、石面の石材密着度が高い石材の事を指す。石垣1308、1205～1206隅角部、2407～2408隅角部等で確認できる。

##### ・D類

粗割石と自然石主体の石垣で50～80cmの石材が用いられる。自然石でも面を意識し、乱積みや落とし積みも見られる。城内の石垣はこのD類にあたる石垣が最も多いが、本丸外周ではA類の上部に位置する箇所もあり、石材の加工度の相異のみであって、A類と合わせて築城当初の石垣の可能性もある。

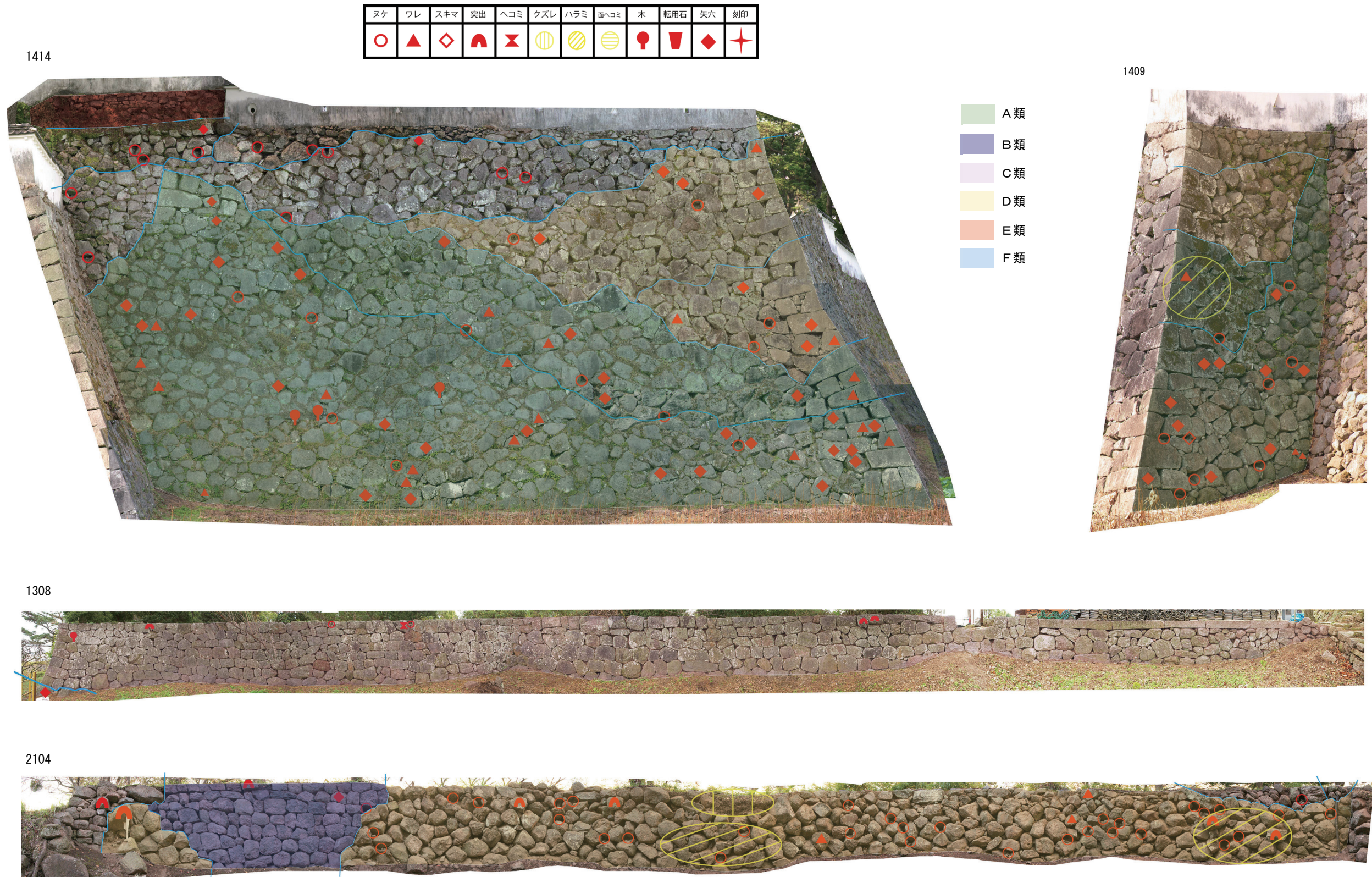
##### ・E類

自然石を主体とする石垣で石材10～20cmの石材が用いられる。昭和30年代から整備された堀の下部や本丸枳形虎口空間に多く見られ、明治期以降の石垣と考えられる。石垣1235、1237、1238、1239、1302、2413の他、外郭線石垣にも多く確認できる。

##### ・F類

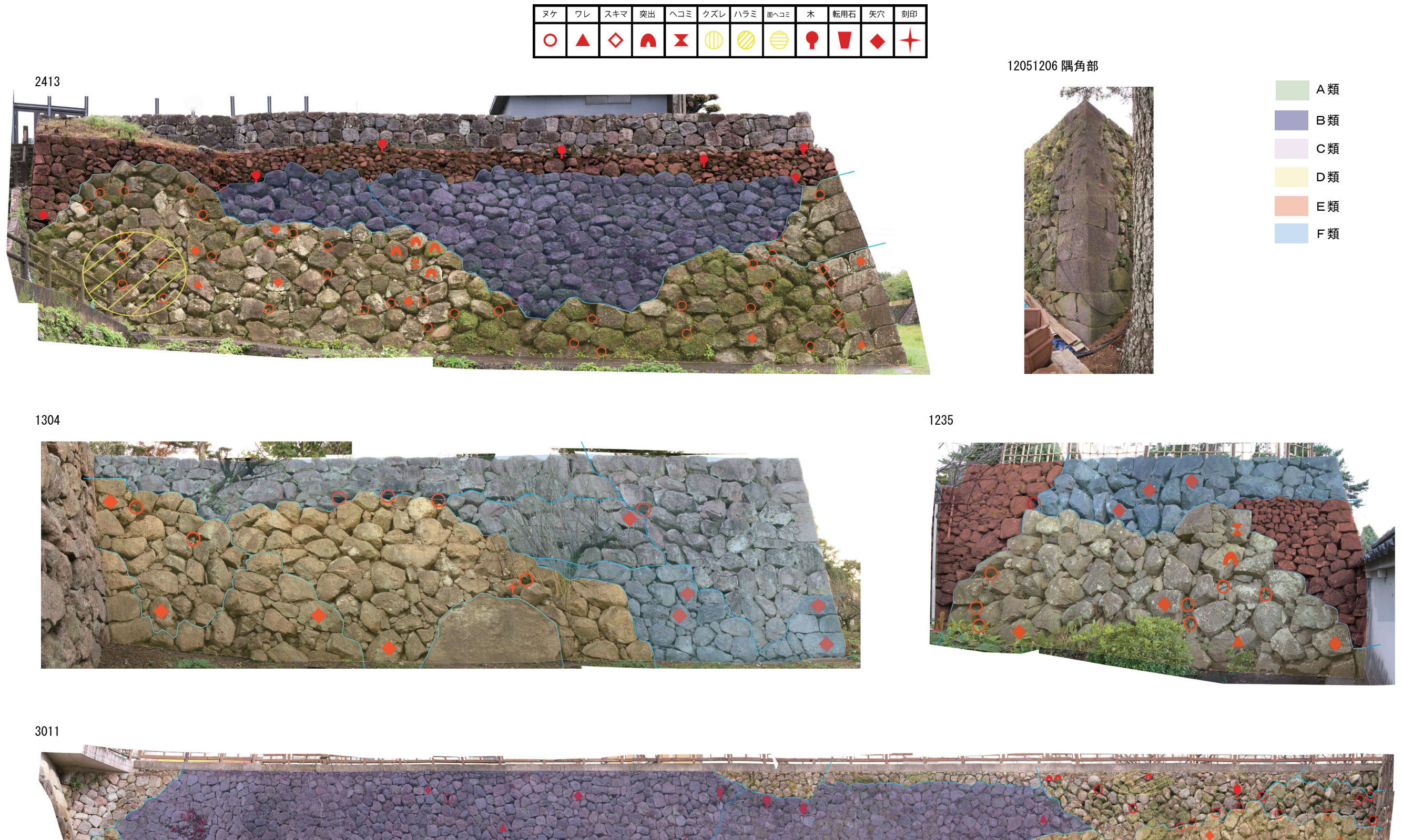
自然石を主体とする石垣で。40～70cmの石材が用いられる。特徴としては、間詰石が極端に少ない点や横目地が通る点、石材を立てて積む点等が挙げられる。明治期以降に積み替えられた可能性が高い。1205、1213、1232、1241、1304、1305、1318、2107、2408、3009、3010等で見られる。





第62図 石垣の分類1

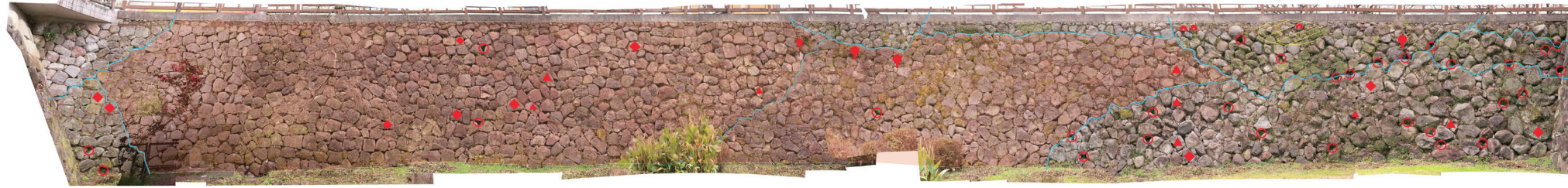




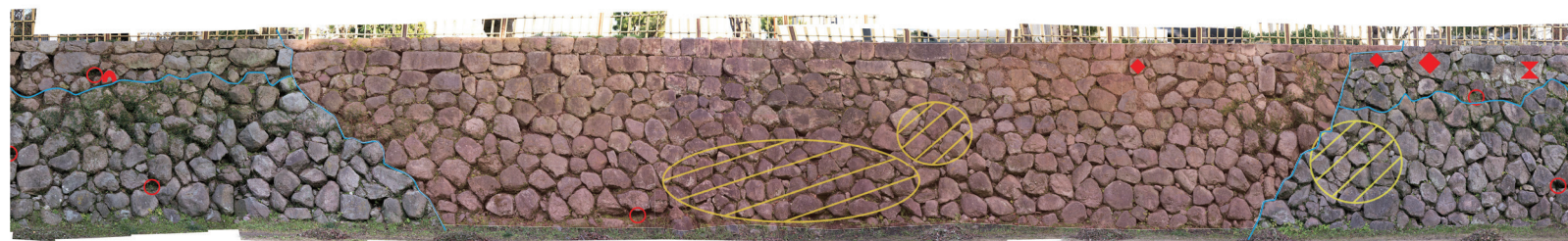
第63図 石垣の分類2



石垣 3011 の延享3年(1746)修復推定箇所



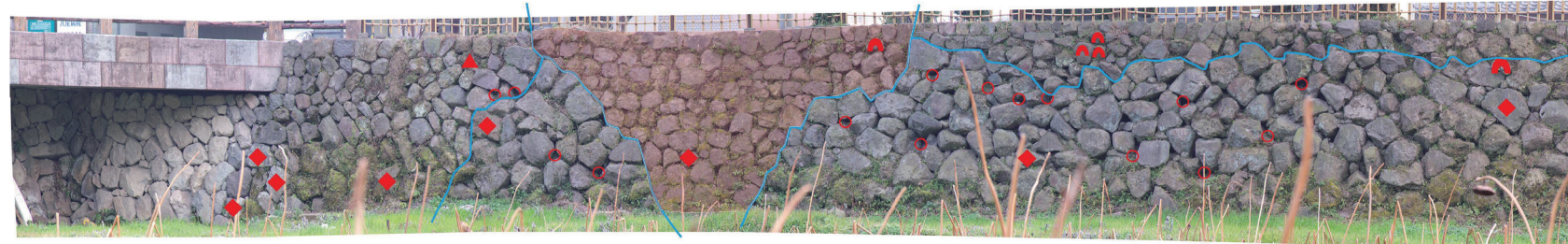
石垣 3003 の宝永3年(1706)修復推定箇所



石垣 3010 の天保12年(1829)修復推定箇所

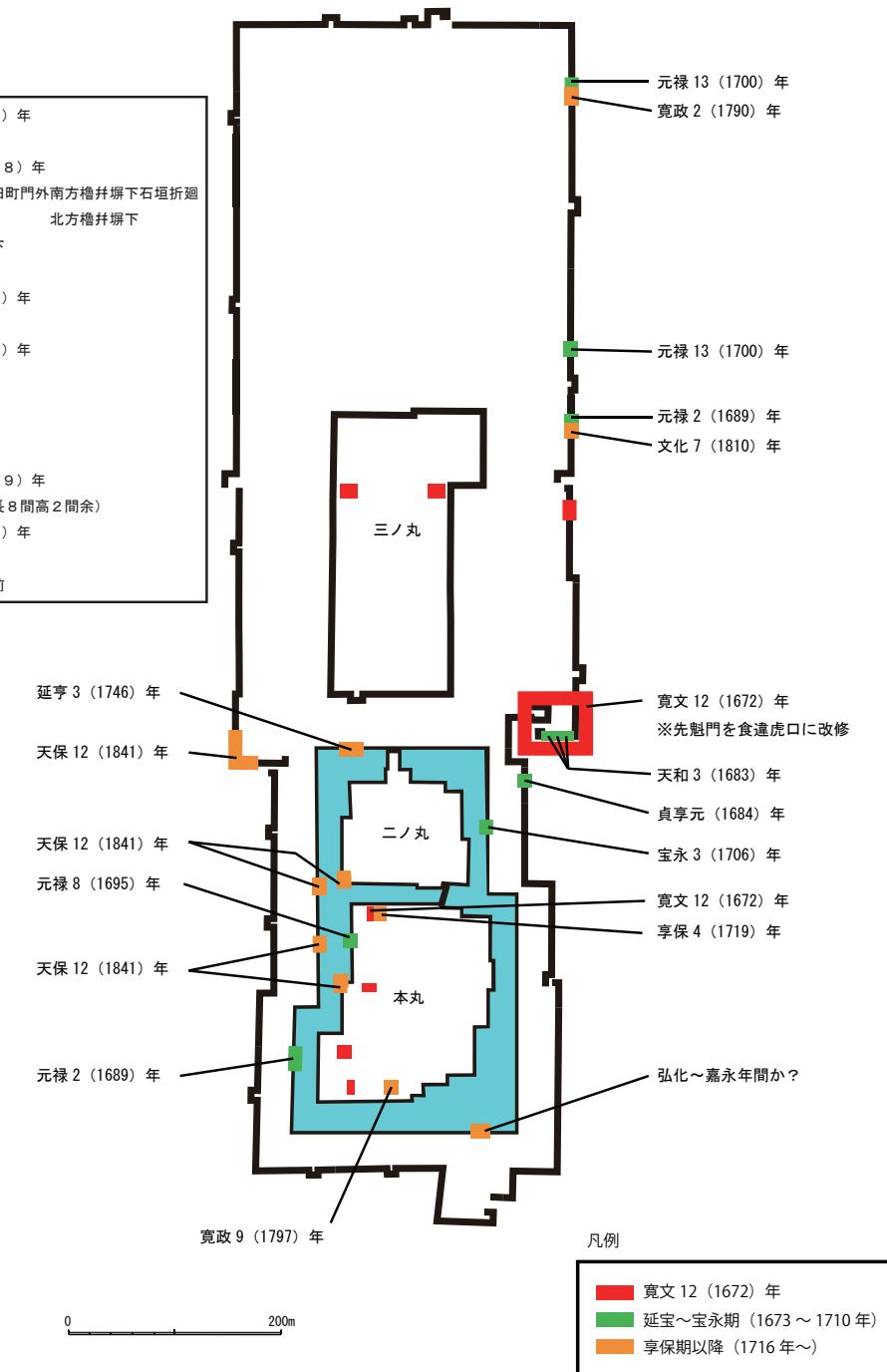


石垣 3006 の弘化4年(1847)～嘉永元年(1848)修復推定箇所



※場所未特定

- ・延宝3(1675)年  
三ノ丸東部
- ・享保13(1728)年  
・外曲輪東方町門外南方櫓并塀下石垣折廻  
・同所 北方櫓并塀下  
・同櫓脇塀下  
・同櫓并塀下
- ・享和元(1801)年  
本丸
- ・文化元(1804)年  
・本丸  
・二ノ丸  
・堀端  
・桜門裏
- ・文政12(1829)年  
外曲輪東部(長8間高2間余)
- ・嘉永元(1684)年  
・御殿櫓下  
・岡部泰庵宅前



第64図 石垣の積み替えと修復記録との比較



第5節 石垣の刻印と矢穴について

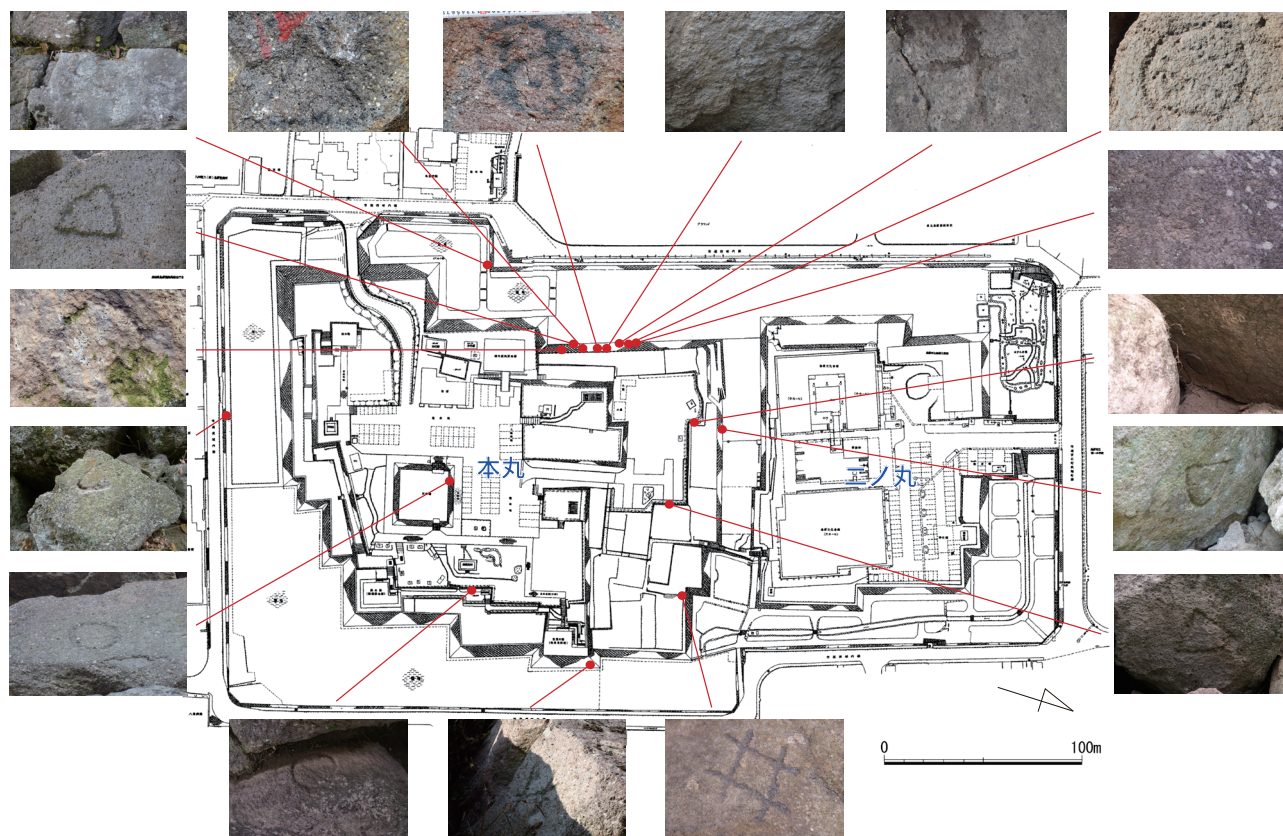
(1) 刻印について

刻印は石材を選定、切り出し、石を積む工程の中で付けられた目印であり、江戸城や駿府城などの公儀普請の城に多く見られる。ただ、慶長年間以降に築かれた近世城郭の石垣ならば比較的確認できるモノでもあり、その意味合いは大名の家紋、担当した家臣や石工集団の符号や名称、呪術的な意味合い、碎石場での占有地域を表すなど諸説ある。徳川大阪城の公儀普請では、島原初代藩主松倉重政も参加しており、松倉氏の刻印は「○に一」とされている。

島原城でも石垣台帳作成に伴う調査や昨年完了した災害復旧工事の際に刻印や墨書が発見されている。現在、刻印15カ所、墨書2カ所が確認され、今後調査を継続すれば更に発見例は増加すると考えられる。

発見された刻印は「○」、「△」、「井」、「×」、「封」、「レ?」、墨書は「○に封」や「△」などである。刻印は必ずしも築石面に印されているものではなく、石材の上面や下面に印されている状況である。天主台の石垣からは「○」の刻印が確認されているが、天主台の石垣は昭和38年に積み替えられているため、江戸期の石材を再利用していると考えられる。これら刻印の意味合いは明確には不明だが、1402から発見された「封」のような刻印・墨書は石を積む際に埋め込まれた呪術的・祭祀的な意味合いを持つのではないかと考えられる。石垣1402には元禄8（1695）年の修復記録が残っており、その際に奉納された可能性もある。

石垣1402から多く刻印が確認されている理由として、修復工事が行われ周囲の清掃伐採が行われたという事、足場を設置して石垣面観察が十分に可能だった事、崩壊した石垣石材をくまなく観察出来た事などが挙げられる。



第65図 島原城刻印配置図



(2) 矢穴について

島原城では大きく分けて、大きな矢穴跡と小さい矢穴跡に分類できる。矢の入り口である石面の長辺を矢口長、矢穴の底の長辺を矢底長とした場合、大きな矢穴跡では矢口長10～16cm、矢底長6.5～8.9cm、小さい矢穴跡では矢口長5.9～7.1cm、矢底長5～5.5cmである。大きな矢穴跡については、比較的どの石垣面でも確認できる。小さな矢穴跡については、石垣1227、1318、1320、1324、2104、2407、2408、3003、3006、3011などで確認でき、積み替えが行われた石垣面や比較的石材の規格化が進んだ割石に見られる傾向がある。また、石垣1239の前面にある幅2m×長さ1m×高さ1m程度の石材にも小さい矢穴列が見られる。

小さい矢穴跡については、島原城から南へ3キロ離れた南天島の石切丁場の残る矢穴跡と類似しており、使用時期の問題も含め、調査を進める必要がある。また、海岸線に矢穴石が散在している例もある。第69図の石材は島原城南東の海岸に伸びる砂嘴の南端で確認された。

島原城から北西に3km程離れた場所には、隣接して「宇土山」、「宇土山」という地名が残っている。聞き取り調査では島原城の石材を「宇土山」から運んだという情報もあり、実際に現地には矢穴跡が残る石材も確認されている。島原城の石切丁場跡の可能性が高いと思われる。



第 66 図 南天島石切丁場



第 67 図 南天島石切丁場の矢穴石



第 68 図 石垣 1239 の前面に残る矢穴石



第 69 図 海岸に残る矢穴石



第 70 図 宇土山石切丁場矢穴石 1



第 71 図 宇土山石切丁場矢穴石 2

## 第6節 水路調査について

整理した絵図資料には、高地から流れる河川や水路が描かれており、発掘調査の結果からも城下町設計に関しては、高度な水利設計も必要不可欠だったはずである。鉄砲町の用水に関しては、藩は水奉行を介して水の管理を行っていたとされ（註1）、古丁水源、中ノ丁水源、熊野神社水源、御用御清水等からの用水路が計画的に整備されていったと考えられる。近年ではボーリングによる取水が普及し、上下水道の整備が完備されつつあるが、往時の水路がどれだけ残っているか、現況の水の流れを調査するために水路調査を行った。同時に現在でも活用されている洗い場、暗渠部分についても可能な限りプロットした。

調査の結果、南側の水路跡は水量が少なく枯渇している状態の水路が多かったが、北側は現在も西の山間部から東の海へ流れる用水路が数多く確認された。本丸、二ノ丸周辺とその西側には水路跡が少なく、すでに暗渠での水路網が充実している事が要因と考えられる。聞き取り調査では、50年前まで二ノ丸外側の堀外周の北西端の箇所には大きな水路があり、西から流れる込む水路跡があったとされるが、道路工事の際に破壊されてしまったという情報がある。現在も石垣3011の西スミには水が石垣目地から流れてきており、その名残だと思われる。また、石垣3001の右スミ地点からも石垣目地から水が流れ出ている箇所があり、堀内への水の供給はこれらの水路を用いて行われていたと推定される。堀水の排水には城内の南側石垣3006の東スミから行われていたと考えられ、平成26年度に行われた拘置支所宿舎新営工事に伴う発掘調査では堀水排水のための関連施設が確認されている。

水路調査は東側から西側へ進めたが、水路を辿っていくと宅地に入り込む水路があり、生活用水や屋敷庭園池用水としても利用されていた事が伺える。『島原藩御触類集』にも、文化十一（1828）年に「屋敷への取水による漏水について見つけ次第届け出る事、屋敷内へ水を引き込む場合には届け出て許可を得る事」などの記載が見られ、屋敷内への取水は江戸期から確認されている（註1）。今回の水路調査で屋敷内への取水と推定できる箇所は、④、⑧、⑩、⑰、⑱である。明治期以降の道路取り付けに伴い、家の敷地を嵩上げしている屋敷地が多いため、慎重に判断する必要があるが、いずれも屋敷敷地内に庭池を持ち、江戸期から活用されていたと考えられる。調査地点④は、「常盤御殿屋敷」という地名が残っており、絵図に記載されている庭池、東に排水する排水口と南側に続く水路跡もほぼ現況と留めている。

城外への排水のための水路は、調査地点①、⑤、⑥で確認できた。いずれも東側の外墨線石垣のライン上に立地している。調査地点①に関しては外墨線の石垣がなぜ途切れているのか不明であるが、水路底と石垣天端は2 m以上の高低差があり、絵図に描かれている水路位置と同じようである。調査地点⑤では、調査地点④の東側排水口と同じような排水口を確認した。調査地点⑤に関しては、宅地の造成の際に50 cm～1 m程表面を削平したらしく、石垣はもう少し高かったようである。絵図に記載されている城外に出て田町門から東に向かった道とぶつかる水路である。調査地点⑥では、水路暗渠を確認した。周辺は田町門推定地であるが、田町門内部空間の脇に水路が配置されたと推測される。暗渠の上石は城内の数カ所で確認できる。

鉄砲町の水路に関しては、現在、下ノ丁の通路の真ん中に用水路が設けられているが、中ノ丁、古丁、下新丁、上ノ丁にも同じような通路の真ん中に用水路が配置されていた。気になるのは調査地点⑱の存在である。水路の痕跡は確認できないが、塩ビパイプからは多量な水が流れており、間違いなく鉄砲町からの水の流れが辿りついていると考えられる。今後、北原町の所在の可能性も探しながら調査を進めていく必要がある。

城内の北東部に「田屋敷」と呼ばれ、絵図資料には「泉水屋敷」と明記されている敷地がある。この敷地は、島原藩主松平忠房の「興慶園」と呼ばれる別宅であり、元禄七（1694）年から元文四（1739）年頃まで使われていたと考えられている。興慶園には、邸宅、泉水を配した庭園、神主堂、馬場、「臨界亭」と称される茶屋、「游目館」と称される宴会場などがあつた

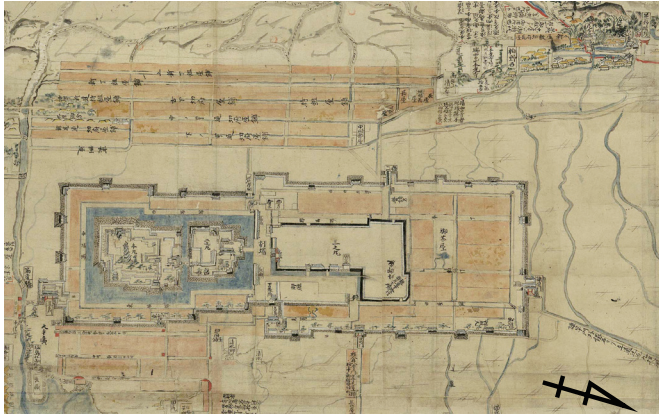


とされる。当該地は、興慶園閉鎖後⇒侍屋敷⇒現住宅地となっており、当時の面影を見ることは出来ない。ただ、調査地点②の水路は、用水路や屋敷敷地の軸とは明らかに異なり、微妙に蛇行する平面形状である。また、現地で確認できる小さな石橋は昔から存在したらしく、これらの遺構が興慶園の庭園遺構の一部だった可能性もありうる。



第72図 水路調査図

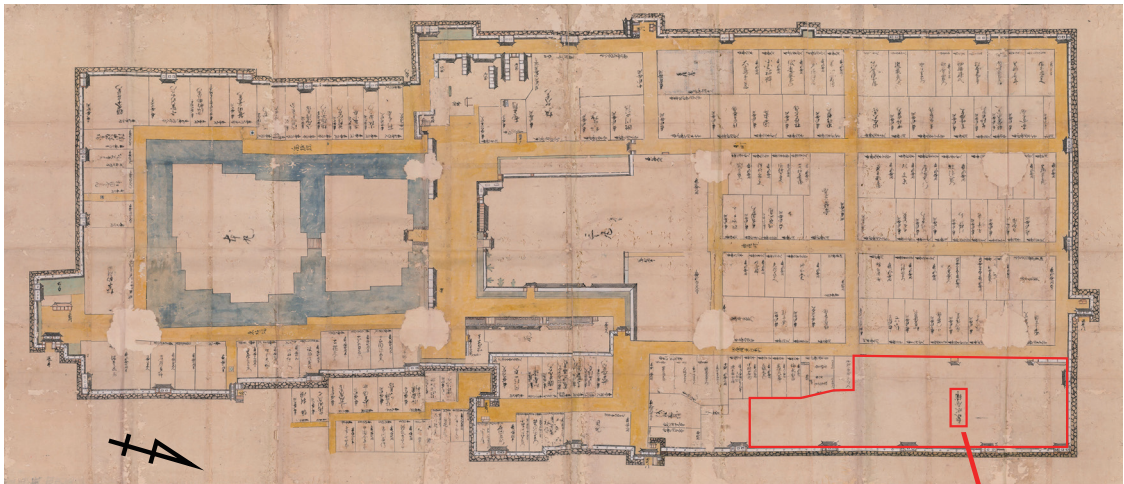




第73図 森岳城図 八幡神社（島原）



第74図 〔興慶園図〕 本光寺 1886



第75図 島原城城郭図 本光寺 771



第76図 興慶園（泉水屋敷）推定位置図

島原城城郭図の敷地範囲は、現在の地割でも残っており、興慶園図に描かれている櫓、水路などから上図の推定位置が想定される。調査地点②では、橋石と思われる石材や蛇行する水路など、街並みの水路跡とは性格が異なる遺構が確認されている。





第77図 調査地点⑧屋敷敷地内へ続く水路



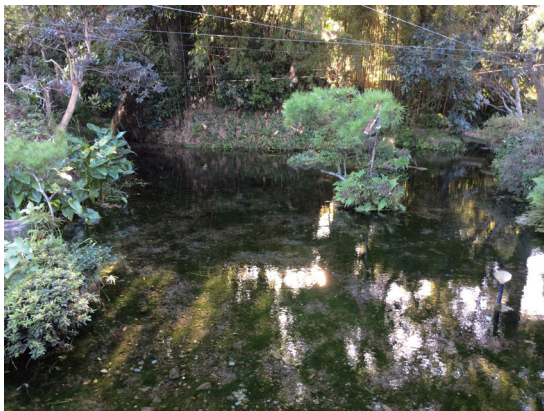
第78図 調査地点⑧屋敷内庭園池



第79図 調査地点⑩小早川邸に残る矢穴石



第80図 調査地点⑩屋敷敷地内を流れる水路



第81図 調査地点④常盤屋敷内の庭園池



第82図 調査地点④常盤屋敷からの排水口（計石）



第83図 調査地点⑥田町門横の水路跡



第84図 調査地点⑤の排水口





第 85 図 調査地点②に残る橋



第 86 図 調査地点②蛇行する水路



第 87 図 調査地点②井戸跡と洗い場



第 88 図 調査地点①水路



第 89 図 調査地点⑫古丁水源



第 90 図 調査地点⑮の排水口

【註】

(1) 宮本雅明 2009 『島原鉄砲町』 島原市教育委員会：p 22

【参考文献】

木村充・伊藤龍一・後藤久太郎・斉藤英俊・吉田純一・松井みき子・山口俊浩 2008「深溝松平藩の屋敷地変遷と屋敷指図―深溝松平藩建築指図の復元的検討に基づく作図」『日本建築学会計画系論文集 第73巻』

波多野純 1989 『都市施設としての上水を通して見た近世城下町の研究』日本工業大学工学部研究報告 別巻第90-02号

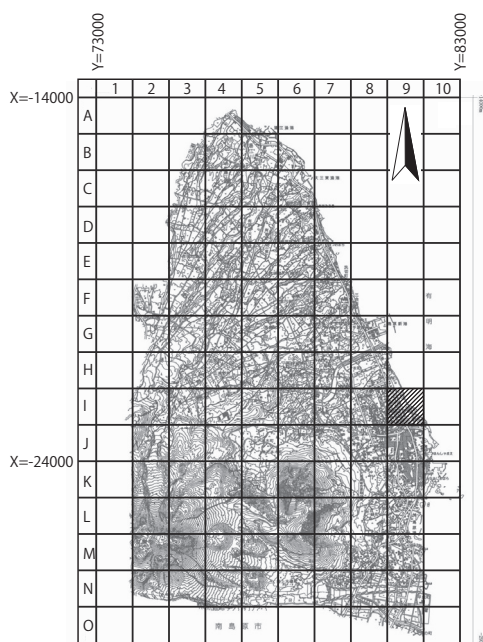


第7節 屋敷石垣

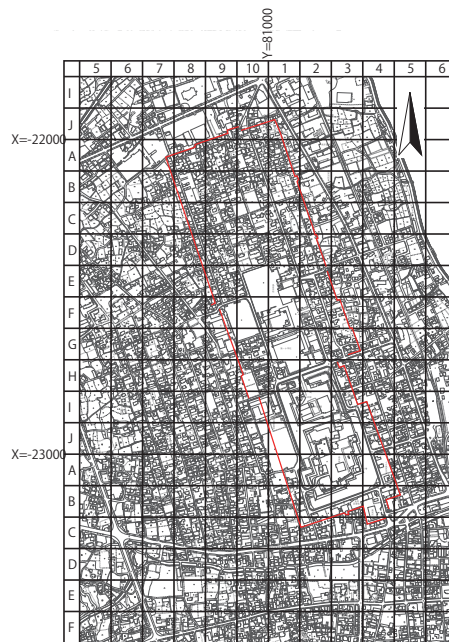
外罫線内の悉皆調査では、城内にどのような石垣が存在するか、住宅地となった現在の敷地は当該期の屋敷敷地を踏襲しているのか、屋敷石垣の分布状態の把握とデータベース化を行った。コンクリートや裏地がモルタルで作られている石垣については今回対象外とした。

【屋敷石垣データベース項目】

屋敷石垣名 起点を平面直角座標  $X = -14000$ 、 $Y = 73000$  として、島原市全域を大（1000m四方）・中（100m四方）に分割したグリッドを用いた。グリッドの名称は「行名称—列名称」で表記し南北行が始点から北から南へアルファベット1文字で表示し、東西列が始点より西から東へ算用数字で表示した。屋敷石垣名は、このグリッド範囲の中で北から番号を付ける。



第91図 島原市大グリッド図



第91図 島原市中グリッド図

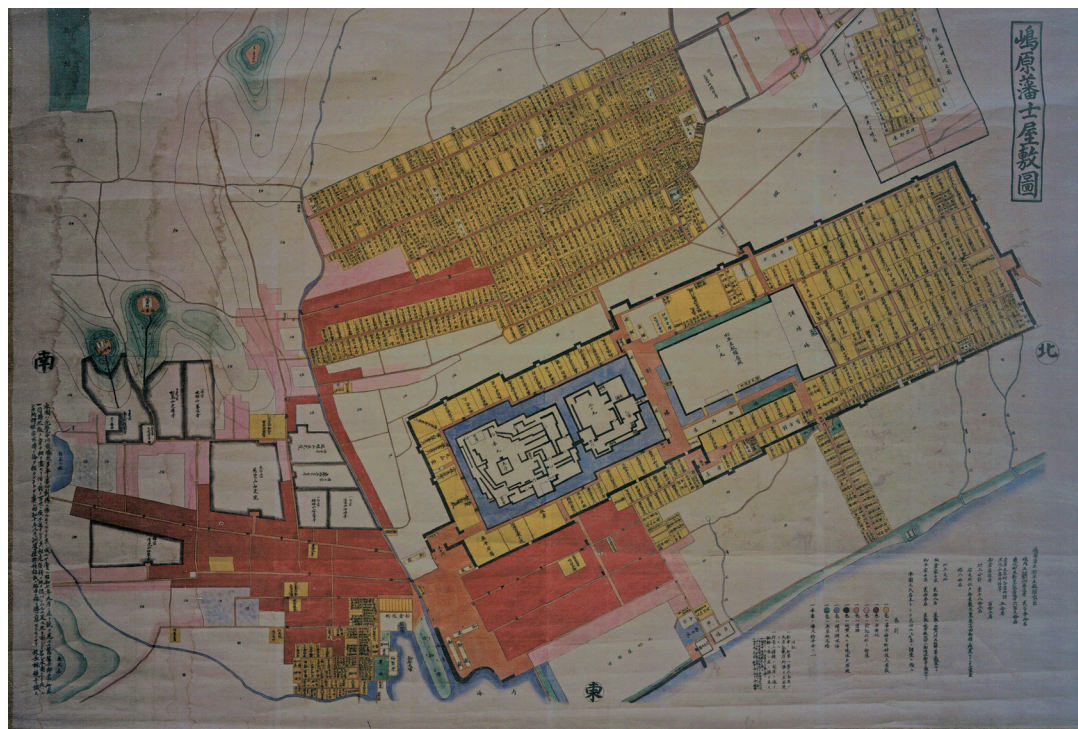
所在地	住所を入力する。
石垣面向き	石垣面の向きを東西南北で入力する。
石垣の積み方	屋敷石垣の積み方に関しては、鉄砲町の石垣ですでに分類されており（註1）、その分類項目に従って入力する。
分類項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野面積み乱積み</li> <li>・打ち込み剥ぎ乱積み</li> <li>・打ち込み剥ぎ布積み</li> <li>・切り込み矧ぎ布積み</li> <li>・亀甲積み</li> <li>・石垣+イタビカズラ</li> <li>・石垣+生垣</li> </ul>
規模（幅、高さ）	石垣の規模を計測する。
備考	特記事項があれば、入力する。
位置図	石垣の位置を地図上で表示する。



調査では、60地点の石垣確認に留まった。石垣の分布状況は、全体的に西側が少なく、東側に多く確認できた。民有地の調査になるため、予め石垣清掃を行って調査を実施したわけではなく、イタビカズラが生えて石垣の表面観察が十分に出来なかった箇所も存在する。

城内に分布する石垣は、高さ1～1.5m程度のもが多く、一番高い石垣でも2.1m程度であった。確認された石垣は、野面積み乱積み14カ所、打ち込み剥ぎ乱積み5カ所、打ち込み剥ぎ布積み9カ所、切り込み矧ぎ布積み11カ所、亀甲積み19カ所、石垣+イタビカズラ12カ所、石垣+生垣4カ所であった。

屋敷石垣に関しては、明確に時期を判断できるような材料は確認できず、今後の課題であるが、同じ石垣面でも決して同時期に築かれたと限定する必要はなく、東面が野面積みで南面が亀甲積みの石垣や下から2段分が亀甲積みで3段目から野面積みになっている石垣なども確認された。城下の中央部に立地する石垣I-9-E-2\_SW1では、まさしくその典型で、野面積み、打ち込み剥ぎ布積み、亀甲積み、石垣+生垣など、多様な石垣を見ることができ、時期差があると推定される。鉄砲町の石垣調査でも大正、昭和の石垣の積み直しが指摘されており、これら島原市内の石垣全体と比較しながら、地権者のヒヤリングや昭和50年代に行われた島原市の石垣助成制度の資料等を洗い出す必要がある。



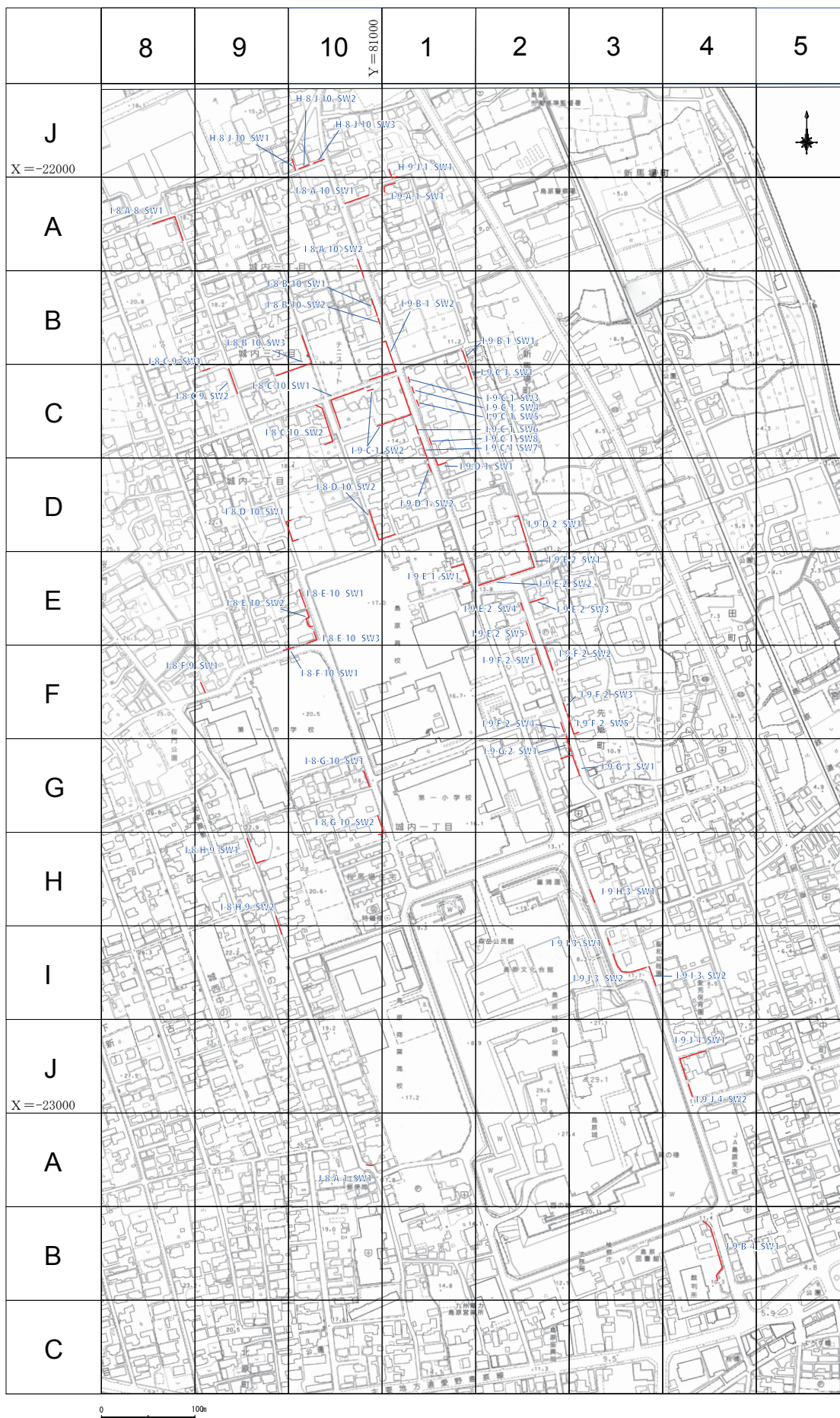
第92図 島原藩士屋敷敷図 松平文庫蔵

【註】

- (1) 宮本雅明編 2009 『島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』島原市教育委員会：p 62～66



第2章 石垣調査の概要



第 93 図 屋敷石垣分布図



第2表 屋敷石垣一覧表

屋敷石垣番号	所在地	向き	積み方	幅 m	高さ m	備考
H-8-J-10_SW1	長崎県島原市城内 3 丁目 1026	西面	切り込み矧ぎ布積み	10	1.6	南北に伸びる石垣 虎口の石垣ラインの痕跡か？
H-8-J-10_SW2	長崎県島原市城内 3 丁目 1025-4	南面	打ち込み剥ぎ布積み	10	1.5	
H-8-J-10_SW3	長崎県島原市城内 3 丁目 1025-1	南面	石垣+イタビカピラ	11	1.4~1.7	
H-9-J-1_SW1	長崎県島原市新馬場 町 938	西面	野面石乱積み	10	0.6	南面東側に石垣の上面確認できる
		南面	野面石乱積み	3	0.5	
I-8-A-8_SW1	長崎県島原市城内 3 丁目 1056	北面	低石積み+生垣	25	0.1~0.4	東面一部コンクリート使用
		東面	低石積み+生垣	29	0.4	
I-8-A-10_SW1	長崎県島原市新馬場 町 938	南面	低石積み+生垣	31	0.1~0.3	
I-8-A-10_SW2	長崎県島原市城内 3 丁目 1018-4	東面	亀甲積み	21	0.1~0.3	下部に石垣見られる。上部はコン クリート壁あり
I-8-B-10_SW1	長崎県島原市城内 3 丁目 1016	東面	不明	18	0.1~0.3	下部に一段石垣見られる。上部コ ンクリート壁あり
I-8-B-10_SW2	長崎県島原市城内 3 丁目 1015-2	東面	野面石乱積み	1	1.5	目地にコンクリートあり
I-8-B-10_SW3	長崎県島原市城内 3 丁目 1047-1	東面	打ち込み剥ぎ布積み	15	1.5	
		南面	石垣+イタビカピラ	44 ?	1.5	
I-8-C-9_SW1	長崎県島原市城内 3 丁目 1073	南面	野面石乱積み	5	1	
I-8-C-9_SW2	長崎県島原市城内 3 丁目 1075-10	東面	打ち込み剥ぎ布積み	30	1.6	目地にコンクリートあり ドリル痕あり
I-8-C-10_SW1	長崎県島原市城内 2 丁目 1035	西面	石垣+イタビカピラ	31	1.5	
		北面	石垣+イタビカピラ	39	1.7	
I-8-C-10_SW2	長崎県島原市城内 2 丁目 1044	東面	打ち込み剥ぎ乱積み	39	0.5~1.7	常盤屋敷跡地 東面石垣に水門あり 北東隅角部ない？鬼門除け？
		南面	石垣+イタビカピラ	19	1.1~1.7	
I-8-D-10_SW1	長崎県島原市城内 2 丁目 1086-6	西面	不明	19	0.4	
I-8-D-10_SW2	長崎県島原市城内 2 丁目 1039	西面	野面石乱積み	38	1.6	
		南面	不明	13	1.6	
I-8-E-10_SW1	長崎県島原市城内 2 丁目 1088	東面	野面石乱積み	23	1.5	北側部分はドリル痕跡多数あり
I-8-E-10_SW2	長崎県島原市城内 2 丁目 1090	東面	亀甲積み	18	1.9	
I-8-E-10_SW3	長崎県島原市城内 2 丁目 1090	東面	切り込み矧ぎ布積み	8.5	0.4~0.5	目地にコンクリート
		南面	切り込み矧ぎ布積み	24	0.2~0.5	
I-8-F-9_SW1	長崎県島原市桜門町 1738-4	東面	不明	27		石垣？の上面を確認。壊された痕 跡か？
I-8-F-10_SW1	長崎県島原市城内 2 丁目 1090	南面	野面石乱積み	7.5	0.5	
I-8-G-10_SW1	長崎県島原市城内 1 丁目 1111-6	東面	切り込み矧ぎ布積み	19	0.7	中央部下段に転用石あり？
I-8-G-10_SW2	長崎県島原市城内 1 丁目 1114	南面	亀甲積み	4	1.7	南面に一部野積み見られる
		東面	打ち込み剥ぎ布積み	21	1.7	
I-8-H-9_SW1	長崎県島原市江戸丁 1752	南面	亀甲積み	5.2	1.7	
		西面	亀甲積み	28.5	1.7	
I-8-H-9_SW2	長崎県島原市江戸丁 1777	西面	切り込み矧ぎ布積み	8.2	1.5	車庫の両脇に石垣あり
		西面	石垣+イタビカピラ	6	1.5	
I-9-A-1_SW1	長崎県島原市新馬場 町 980	北面	野面石乱積み	16	1.5	曲線を描く？
I-9-B-1_SW1	長崎県島原市新馬場 町 966-1	東面	打ち込み剥ぎ布積み	13	1.2	石垣に排水パイプあり
I-9-B-1_SW2	長崎県島原市城内 3 丁目 1014	南面	野面石乱積み	29	1.6	南面東側一部亀甲積み
		東面	亀甲積み	34	1.7	
I-9-C-1_SW1	長崎県島原市新馬場 町 946-1	西面	切り込み矧ぎ布積み	16	1.6	
I-9-C-1_SW2	長崎県島原市城内 2 丁目 1013	東面	亀甲積み	45	1.7~2.1	小早川邸石垣
		南面	野面石乱積み	40	2.1	

第2章 石垣調査の概要

屋敷石垣番号	所在地	向き	積み方	幅 m	高さ m	備考
I-9-C-1_SW3	長崎県島原市城内 2丁目 995	西面	石垣+イタピカピラ	8	1.6	
I-9-C-1_SW4	長崎県島原市城内 2丁目 996	西面	打ち込み剥ぎ乱積み	8	1.4	
I-9-C-1_SW5	長崎県島原市城内 2丁目 997	西面	低石積み+生垣	9.5	0.1 ~ 0.4	
I-9-C-1_SW6	長崎県島原市城内 2丁目 1012	東面	切り込み矧ぎ布積み	7	1.4 ~ 1.8	一部北側亀甲積み
I-9-C-1_SW7	長崎県島原市城内 2丁目 1011	東面	亀甲積み	26	1.8	北側扁平な石材用いた石垣あり
I-9-C-1_SW8	長崎県島原市城内 2丁目 998	西面	打ち込み剥ぎ乱積み	4	1.5	
I-9-D-1_SW1	長崎県島原市城内 2丁目 999	西面	切り込み矧ぎ布積み	3	1.5	背後に稲荷様あり
		南面	野面石乱積み	12	0.3 ~ 1.2	
I-9-D-1_SW2	長崎県島原市城内 2丁目 1010	東面	野面石乱積み	8	0.5	上部コンクリート壁あり
I-9-D-2_SW1	長崎県島原市新馬場町 958-2	東面	切り込み矧ぎ布積み	32	0.8	
I-9-E-1_SW1	長崎県島原市城内 2丁目 1005	東面	石垣+イタピカピラ	22	2	北面西側野面積みあり
		北面	石垣+イタピカピラ	16	1.9	
I-9-E-2_SW1	長崎県島原市新馬場町 958	南面	亀甲積み	33.5	1.4 ~ 1.7	南面には西側野面積み、東側に打ち込み剥ぎ布積み、門横には低石垣+生垣あり。東面には北側野面積みあり
		東面	打ち込み剥ぎ布積み	29	1.6 ~ 1.9	
I-9-E-2_SW2	長崎県島原市城内 2丁目 1005	南面	打ち込み剥ぎ乱積み	15	0.5	上部破壊
I-9-E-2_SW3	長崎県島原市先魁町 1145-7	南面?	亀甲積み	14以上	1.5	外面判定不能
I-9-E-2_SW4	長崎県島原市先魁町 1144-1	東面	打ち込み剥ぎ布積み	2	1.7	
I-9-E-2_SW5	長崎県島原市先魁町 1143	東面	亀甲積み	16	1.6	目地にコンクリあり
I-9-F-2_SW1	長崎県島原市先魁町 1142	東面	亀甲積み	26	1.5	目地にコンクリあり
I-9-F-2_SW2	長崎県島原市先魁町 1149	西面	亀甲積み	32	1.8	
I-9-F-2_SW3	長崎県島原市先魁町 1151-2	西面	石垣+イタピカピラ	12.5	1.5	
I-9-F-2_SW4	長崎県島原市先魁町 1139	東面	石垣+イタピカピラ	8	2.1	
I-9-F-2_SW5	長崎県島原市先魁町 1159	西面	亀甲積み	20	1.6	北側に野面積みあり
I-9-G-2_SW1	長崎県島原市先魁町 1164-1	東面	切り込み矧ぎ布積み	22	0.2 ~ 0.5	
I-9-G-3_SW1	長崎県島原市先魁町 1163-50	東面	打ち込み剥ぎ布積み	19	0.3	一段目のみ?
I-9-H-3_SW1	長崎県島原市城内 1丁目 1172-3	西面	野面石乱積み	7	1.6	目地にコンクリートあり
I-9-I-3_SW1	長崎県島原市城内 1丁目 1173-2	西面	打ち込み剥ぎ乱積み	4.9	1.3	上部野面積みあり
I-9-I-3_SW2	長崎県島原市城内 1丁目 1173-2	南面	亀甲積み	27.5	1.7	佐久間邸石垣
		西面	亀甲積み	23.5	1.4 ~ 1.7	
I-9-I-3_SW3	長崎県島原市城内 1丁目 1185-1	西面	切り込み矧ぎ布積み	20	1.4	
I-9-J-4_SW1	長崎県島原市城内 1丁目 1188	西面	亀甲積み	29.5	1.6	北面の東側は一部打ち込み剥ぎ布積み
		北面	亀甲積み	31	1.6 ~ 2.5	
I-9-J-4_SW2	長崎県島原市城内 1丁目 1188	西面	石垣+イタピカピラ	14.5	1.8	南面はコンクリート製
J-8-A-1_SW1	長崎県島原市江戸丁 1827-1	南面	野面石乱積み	11	1.5	矢幅 7 cm 程度の矢穴確認 石垣は積み直ししか
J-9-B-4_SW1	長崎県島原市城内 1丁目 1194	東面	亀甲積み	62.5	2.1	裁判所東側石垣 背面に矢幅 14 cm 程度の矢穴あり
		東面	打ち込み剥ぎ布積み	16.5	1.4	





第94図 野面積み乱積み



第95図 打ち込み剥ぎ布積み



第96図 打ち込み剥ぎ乱積み



第97図 切り込み矧ぎ布積み



第98図 亀甲積み



第99図 石垣+イタビカピラ



第100図 石垣+生垣



第101図 石垣 I-9-E-2\_SW1\_12\_1



## 第8節 石造物

城内のいたる地点には「石祠」、「猿田彦」等の石造物が祀られている。「石祠」は屋敷神として敷地の北東端に祀られるケースが多く、城内の武家屋敷敷地内の痕跡が残っている可能性があり、「猿田彦」は街路の状態を辿れる可能性があったため、城内の石造物分布状態の把握とデータベース化を行った。鉄砲町の調査では、石祠16基、猿田彦22基確認されている（註1）。

## 【石造物データベース項目】

石造物番号	屋敷石垣データベースと同様（P52参照）
2012年雇用事業調査	2012年に実施された分布調査の石造物番号。
所在地	住所を入力する（立地周辺の住所）。
形態	石塔／石祠／灯籠／石像／その他に分類する。
材質	石材の種類を目視で判断する。
寸法	幅／奥行／高さを入力する。
向き	石造物の向きを東西南北で入力する。
信仰	道祖神／神道／仏教／その他で入力する。
銘	石造物にある銘を入力する。
備考	特記事項があれば入力する。
石祠詳細項目	
扉形式	片開き／両開き／嵌め殺し／なし／その他で入力する。
屋根形式	入母屋造／流造／寄棟造／切妻造／宝形造／その他で入力する。
装飾	千鳥破風／唐破風／軒裏垂木／千木／懸魚／堅魚木／鬼面の有無を判断する。
台石・基壇	台石・基壇の有無を判断する。
備考	特記事項があれば入力する。

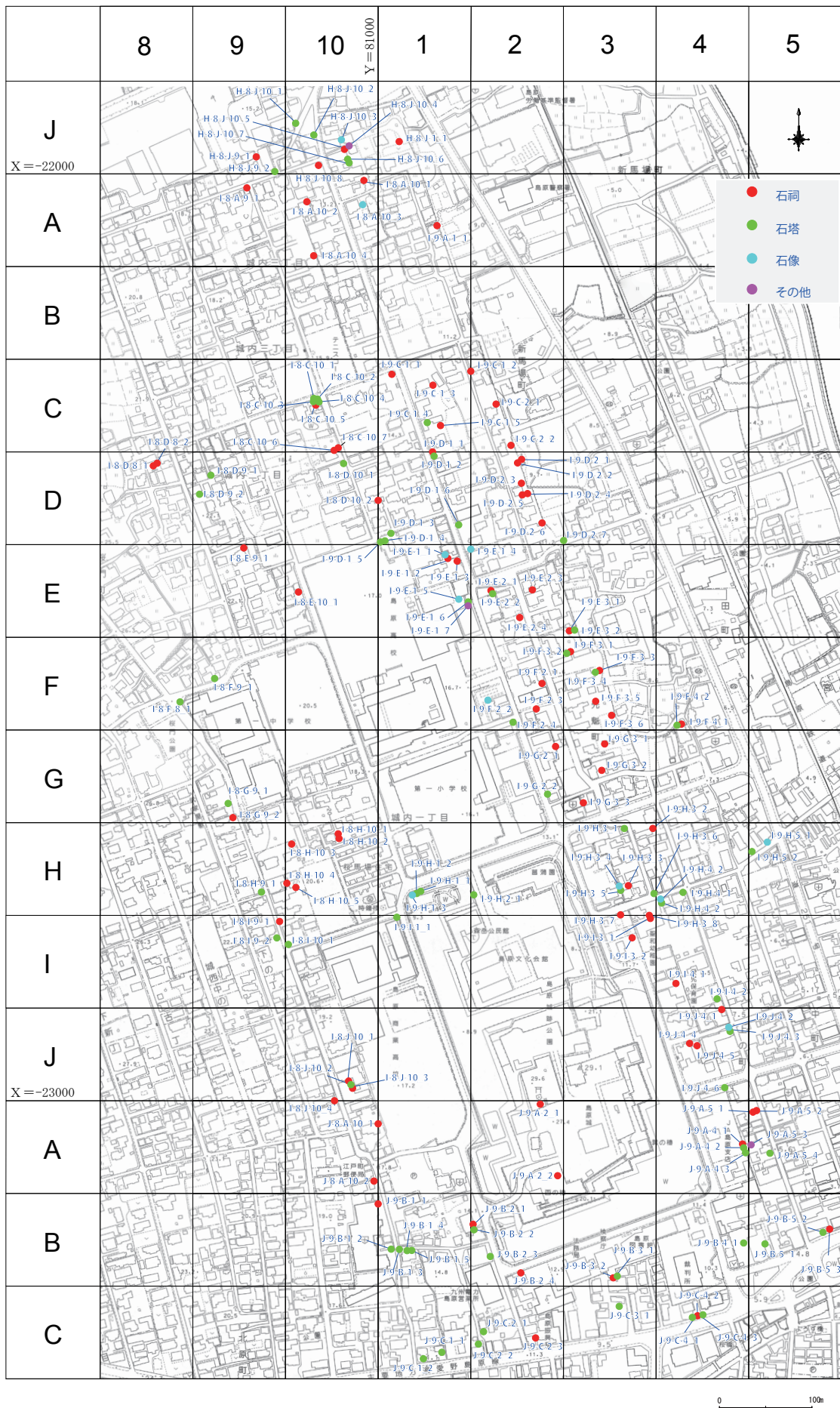
調査の結果、162基の石造物のデータベースを作成した。形態別には石塔64基、石祠81基、石像14基、その他3基であった。調査と同時に行った聞き取り調査では、少なくとも約3割の石造物が原位置から移動している事が判明した。石造物自体は未だ信仰の対象として、親しまれているが、保存状態が悪く破損している石造物も多数確認された。

石塔に関しては、五輪塔、宝塔などは少量で、「猿田彦大神」、「水神」など石造物が多く確認された。「猿田彦大神」は庚申信仰と習合し、道祖神として村から外に出ていく者の旅の安全や無事の帰りを守る行路神として信仰されてきた。その多くは直立か、やや前かがみになる板碑に「猿田彦大神」や「猿田彦大明神」と銘記されたモノで、幅、奥行き30～60cm、高さ1m以下の規



第102図 軒裏垂木を有する石祠





第 103 図 石造物分布図



模の石造物である。「猿田彦大明神」は道路沿いに、「水神」は井戸の周囲に設置され、街区の北東に祀られると伝わるが、民家の建替えや道路工事の際に簡単に移動されていた。原位置の特定は不可能である。石塔の向きに関しては、64基のうち南向きと東向きが59基を占めるという結果であった。

石祠は、「稻荷様」と呼ばれ、屋敷神として屋敷敷地内で未だに祀られている状態が多数確認できた。昔は各屋敷に一基ずつ存在し、依然として民家敷地内の北東に設置されている石祠、またはその位置から敷地内で移動された石祠、すでに撤去された石祠等を確認できたが、いずれも信仰の対象として先祖代々祀られていた。

石祠に関してはI-8-H-10\_2のような高さ2mを超える巨大な石祠やI-9-D-2\_1のような軒裏垂木を有する石祠などが特殊な例として挙げられるが、総体的には、幅や奥行きが40~70cm、基壇を有するモノでも高さ150cm前後のシンプルな形式の石祠が大多数を占めた。屋根形式は宝形造りや切妻造りのモノもみられるが、81基中61基が入母屋造である。また、I-8-G-9\_2、I-9-E-1\_3、I-9-F-3\_1などの「文化」、「文政」の銘が刻まれていた石祠の発見は大きな成果であり、江戸期から各武家屋敷内で石祠が屋敷神として祀られていた痕跡である。石像に関しては恵比寿様、不動明王などが確認された。

I-9-E-1\_4は昭和初期に道路拡張の際に取り壊した石垣の中から発見されたい。他にも部分的に破損紛失したり、全壊に近いような石像があるが、この点では島原の乱や城下の廃絶と関係するのかわからない。

その他では、島原市指定有形文化財切支丹「IHS」符号入平型板碑がある。「IHS」とは、イエズス会の会章にも見られ、「人類の救世主イエズス」という意味である。墓碑の上部は削られているが、Hの中央上部には縦の刻印残根が確認され、干十字が刻まれていたと考えられる。工事の際屋敷北側の水路から発見されており、「興慶園」の水路で使用された可能性がある。また築城前の周辺環境を考える上でも貴重遺物である。



第104図 石祠 I-9-F-3\_1 文化八年〇〇銘



第105図 石祠 I-8-G-9\_2 文政〇〇年銘



第106図 石祠 I-9-E-1\_3 文化八年〇〇銘



第107図 切支丹「IHS」符号入扁平型石碑



表3 石造物一覧表

石造物番号	所在地	形態	材質	寸法 - 奥行	寸法 - 高さ	寸法 - 幅	向き	信仰	銘
H-8-J-1_1	長崎県島原市新馬場町 937	石祠	コンクリート	68	82	78	南	神道	
H-8-J-9_1	長崎県島原市城内 3 丁目 1242-1	石祠	デイサイト	87	131	84	南	神道	
H-8-J-9_2	長崎県島原市城内 3 丁目 1026	石塔	デイサイト	43	96	66	西	道祖神	猿田彦大神
H-8-J-10_1	長崎県島原市城内 3 丁目 931	石塔	デイサイト	39	66	65	南	道祖神	猿田彦大神、昭和四三年二月 建立
H-8-J-10_2	長崎県島原市城内 3 丁目 1025-1	石塔	デイサイト	55	128	55	南	神道	水神
H-8-J-10_3	長崎県島原市城内 3 丁目 983-1	石像	デイサイト	90	112	92	南	仏教	
H-8-J-10_4	長崎県島原市城内 3 丁目 983-1	その他	デイサイト	43	21	61	南	その他	IHS
H-8-J-10_5	長崎県島原市城内 3 丁目 983-1	石祠	デイサイト	82	134	83	南	神道	
H-8-J-10_6	長崎県島原市城内 3 丁目 984	石塔	デイサイト	24	68	25	東	神道	水神
H-8-J-10_7	長崎県島原市城内 3 丁目 984	石像	デイサイト	31	83	30	東	仏教	
H-8-J-10_8	長崎県島原市城内 3 丁目 1025-1	石祠	デイサイト	93	141	83	南	神道	
I-8-A-9_1	長崎県島原市城内 3 丁目 1056	石祠	デイサイト	68	128	67	南	神道	
I-8-A-10_1	長崎県島原市城内 3 丁目 984	石祠	デイサイト	64	92	68	南	神道	
I-8-A-10_2	長崎県島原市城内 3 丁目 1021-3	石祠							
I-8-A-10_3	長崎県島原市城内 3 丁目 987-2	石像	デイサイト	84	93	82	南	仏教	
I-8-A-10_4	長崎県島原市城内 3 丁目 1030-7	石祠	デイサイト	78	125	81	西	神道	
I-8-C-10_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1044	石塔	デイサイト	28	60	25	南	仏教	
I-8-C-10_2	長崎県島原市城内 2 丁目 1044	石塔	デイサイト	43	43	47	南	仏教	
I-8-C-10_3	長崎県島原市城内 2 丁目 1044	石塔	デイサイト	12	39	12	南	仏教	
I-8-C-10_4	長崎県島原市城内 2 丁目 1044	石塔	デイサイト	46	85	36	南	仏教	
I-8-C-10_5	長崎県島原市城内 2 丁目 1044	石祠	デイサイト	54	82	56	東	神道	
I-8-C-10_6	長崎県島原市城内 2 丁目 1043	石祠	デイサイト	46	114	48	南	神道	
I-8-C-10_7	長崎県島原市城内 2 丁目 1043	石祠	デイサイト	58	114	64	南	神道	
I-8-D-8_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1705-6	石祠							
I-8-D-8_2	長崎県島原市城内 2 丁目 1705-6	石祠							
I-8-D-9_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1230-5	石塔	デイサイト	55	96	50	南	神道	地金神
I-8-D-9_2	長崎県島原市城内 2 丁目 1230-1	石塔	デイサイト	39	62	40	西	道祖神	猿田彦大神
I-8-D-10_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1043	石塔	デイサイト	38	72	42	東	道祖神	猿田彦大神
I-8-D-10_2	長崎県島原市城内 2 丁目 1038	石祠							
I-8-E-10_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1088	石祠		51	139	40	南	神道	
I-8-E-9_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1228	石祠	デイサイト、 花崗岩	62	97	64	南	神道	
I-8-F-8_1	長崎県島原市城内 1 丁目	石塔	デイサイト	36	85	45	北	道祖神	
I-8-F-9_1	長崎県島原市桜門町 1224-13	石塔	デイサイト	37	79	34	南	道祖神	猿田彦大神
I-8-G-9_1	長崎県島原市下の丁 1992-1	石塔	デイサイト	21	45	21	東	道祖神	猿田彦大神
I-8-G-9_2	長崎県島原市下の丁 1988	石祠	デイサイト	119	152	135	南	神道	文政□□
I-8-H-9_1	長崎県島原市下の丁 1770	石塔	デイサイト	56	109	57	東	道祖神	猿田彦大神
I-8-H-10_1	長崎県島原市城内 1 丁目 1113-2	石祠	デイサイト	42	152	44	東	神道	
I-8-H-10_2	長崎県島原市城内 1 丁目 1113-2	石祠	デイサイト	120	252	120	東	神道	
I-8-H-10_3	長崎県島原市江戸丁 1767-1	石祠	デイサイト	83	144	73	南	神道	
I-8-H-10_4	長崎県島原市江戸丁 1770	石祠	デイサイト	86	121	64	西	神道	
I-8-H-10_5	長崎県島原市江戸丁 1773	石祠	デイサイト	79	111	79	南	神道	
I-8-I-9_1	長崎県島原市江戸丁 1777	石祠							
I-8-I-9_2	長崎県島原市下の丁 1966	石塔	デイサイト	16	48	17	東	道祖神	猿田彦大神
I-8-I-10_1	長崎県島原市江戸丁 1779-4	石塔	デイサイト	77	102	71	南	道祖神	猿田彦大神
I-8-J-10_1	長崎県島原市江戸丁 1820-2	石祠	デイサイト	102	150	90	西	神道	
I-8-J-10_2	長崎県島原市江戸丁 1820-2	石塔	デイサイト	22	49	36	東	道祖神	水神
I-8-J-10_3	長崎県島原市江戸丁 1820-2	石祠	デイサイト	39	66	43	東	神道	
I-8-J-10_4	長崎県島原市下の丁 1938	石祠	デイサイト	98	211	85	南	神道	
I-9-A-1_1	長崎県島原市新馬場町 890-2	石祠						神道	
I-9-C-1_1	長崎県島原市城内 2 丁目 1013	石祠	デイサイト コンクリート	49	95	59	南	神道	
I-9-C-1_2	長崎県島原市新馬場町 946-1	石祠	デイサイト	49	105	64	東	神道	明治三十四年□丑二年
I-9-C-1_3	長崎県島原市城内 2 丁目 996-2	石祠	デイサイト	129	156	92	西	神道	
I-9-C-1_4	長崎県島原市城内 2 丁目 998	石塔	デイサイト	66	83	65	南	神道	
I-9-C-1_5	長崎県島原市城内 2 丁目 999	石祠	デイサイト	40	73	40	西	神道	

第2章 石垣調査の概要

石造物番号	所在地	形態	材質	寸法 奥行	寸法 高さ	寸法 幅	向き	信仰	銘
I-9-C-2_1	長崎県島原市新馬場町 949	石祠							
I-9-C-2_2	長崎県島原市新馬場町 951	石祠	デイスait	68	89	55	南	神道	
I-9-D-1_1	長崎県島原市城内 2丁目 999	石祠	デイスait	46	56	45	東	神道	
I-9-D-1_2	長崎県島原市城内 2丁目 999	石塔	デイスait	32	57	36	東	神道	
I-9-D-1_3	長崎県島原市城内 2丁目 1007-29	石塔	デイスait	32	44	38	東	道祖神	猿田彦大神
I-9-D-1_4	長崎県島原市城内 2丁目 1007-29	石塔	デイスait	37	141	36	北	仏教	天文〇〇?
I-9-D-1_5	長崎県島原市城内 2丁目 1007-29	石塔	デイスait	37	123	35	北	仏教	
I-9-D-1_6	長崎県島原市城内 2丁目 1003	石塔	デイスait	20	44	24	東	神道	地〇神
I-9-D-2_1	長崎県島原市新馬場町 856-8	石祠	デイスait	41	71	38	南	神道	
I-9-D-2_2	長崎県島原市新馬場町 856-8	石祠	デイスait	40	86	44	南	神道	
I-9-D-2_3	長崎県島原市新馬場町 953-1	石祠	デイスait	80	123	67	南	神道	
I-9-D-2_4	長崎県島原市新馬場町 953-1	石祠	デイスait	63	75	51	南	神道	
I-9-D-2_5	長崎県島原市新馬場町 953-1	石祠	デイスait	36	58	74	南	神道	
I-9-D-2_6	長崎県島原市新馬場町 956	石祠	デイスait	73	119	71	南	神道	
I-9-D-2_7	長崎県島原市田町 795-1	石塔	デイスait	68	101	84	南	道祖神	猿田彦大明神
I-9-E-1_1	長崎県島原市城内 2丁目 1007-21	石像	デイスait	19	34	23	東	その他	
I-9-E-1_2	長崎県島原市城内 2丁目 1007-21	石祠	デイスait	38	72	41	東	神道	
I-9-E-1_3	長崎県島原市城内 2丁目 1007-21	石祠	デイスait	53	107	54	南	神道	文化八年〇〇~
I-9-E-1_4	長崎県島原市城内 2丁目 1004	石像	デイスait	10	17	15	北	仏教	
I-9-E-1_5	長崎県島原市城内 2丁目 1005	石像	デイスait	12	26	16	南	仏教	
I-9-E-1_6	長崎県島原市城内 2丁目 1005	石塔	デイスait	12	29	14	東	道祖神	猿田彦大神
I-9-E-1_7	長崎県島原市城内 2丁目 1005	その他	デイスait	43	117	54	東	その他	
I-9-E-2_1	長崎県島原市先魁町 1144	石祠	デイスait	65	155	55	西	神道	
I-9-E-2_2	長崎県島原市先魁町 1144	石塔	デイスait	114	260	110	東	その他	
I-9-E-2_3	長崎県島原市先魁町 1145-7	石祠	デイスait	79	127	78	西	神道	
I-9-E-2_4	長崎県島原市先魁町 1143	石祠	デイスait	80	132	62	南	神道	
I-9-E-3_1	長崎県島原市先魁町 1149	石祠	デイスait	71	156	70	南	神道	
I-9-E-3_2	長崎県島原市先魁町 1149	石塔	デイスait	73	149	71	南	仏教	
I-9-F-2_1	長崎県島原市先魁町 1151	石祠	デイスait	85	163	97	南	神道	
I-9-F-2_2	長崎県島原市城内 2丁目 1138	石像	デイスait	14	39	22	東	仏教	
I-9-F-2_3	長崎県島原市先魁町 1139	石祠	デイスait	77	154	75	南	神道	
I-9-F-2_4	長崎県島原市城内 1丁目 1137	石塔	デイスait	55	107	59	東	道祖神	猿田彦大神
I-9-F-3_1	長崎県島原市先魁町 1150	石祠	デイスait	72	117	54	南	神道	文化八年〇〇?
I-9-F-3_2	長崎県島原市先魁町 1150	石塔	デイスait	28	51	38	南	道祖神	猿田彦大神
I-9-F-3_3	長崎県島原市先魁町 1159-3	石祠	デイスait	45	74	46	南	神道	
I-9-F-3_4	長崎県島原市先魁町 1159-3	石塔	デイスait	25	51	45	南	道祖神	猿田彦大神
I-9-F-3_5	長崎県島原市先魁町 1159-3	石祠	デイスait	69	145	65	西	神道	
I-9-F-3_6	長崎県島原市先魁町 1161-3	石祠	デイスait	51	112	49	南	神道	
I-9-F-4_1	長崎県島原市宮の町 662-1	石祠	デイスait	47	52	42	南	神道	三宝荒神
I-9-F-4_2	長崎県島原市宮の町 662-1	石塔	デイスait	67	112	79	東	その他	判読不能
I-9-G-2_1	長崎県島原市先魁町 1164-1	石祠	デイスait	82	122	82	東	神道	
I-9-G-2_2	長崎県島原市先魁町 1165	石塔	デイスait	48	89	54	南	道祖神	猿田彦大神
I-9-G-3_1	長崎県島原市先魁町 1161-3	石祠		80	181	65	南	神道	
I-9-G-3_2	長崎県島原市先魁町 1163-10	石祠	デイスait	58	124	45	東	神道	
I-9-G-3_3	長崎県島原市城内 1丁目 1169-1	石祠	デイスait	44	113	43	東	神道	
I-9-H-1_1	長崎県島原市城内 1丁目 1125	石塔	デイスait	18	27	20	南	道祖神	猿田彦大神
I-9-H-1_2	長崎県島原市城内 1丁目 1125	石塔	デイスait	41	79	43	南	神道	水神
I-9-H-1_3	長崎県島原市城内 1丁目 1125	石像	デイスait	12	41	13	南	仏教	
I-9-H-2_1	長崎県島原市城内 1丁目 1177	石塔	デイスait	58	108	73	東	神道	猿田彦大神
I-9-H-3_1	長崎県島原市先魁町 1163	石塔	デイスait	29	33	31	東	道祖神	猿田彦大神
I-9-H-3_2	長崎県島原市先魁町 1163-65	石祠	デイスait	54	141	52	東	神道	
I-9-H-3_3	長崎県島原市先魁町 1163-23	石祠	デイスait	46	119	42	南	神道	
I-9-H-3_4	長崎県島原市先魁町 1163-23	石像	デイスait	15	34	19	東	仏教	
I-9-H-3_5	長崎県島原市先魁町 1163-23	石塔	デイスait	19	43	18	東	仏教	
I-9-H-3_6	長崎県島原市先魁町 1163-24	石塔	花崗岩	29	60	30	南	道祖神	猿田彦大神
I-9-H-3_7	長崎県島原市城内 1丁目 1173-2	石祠	デイスait	54	104	78	南	神道	



第2章 石垣調査の概要

石造物番号	所在地	形態	材質	寸法 奥行	寸法 高さ	寸法 幅	向き	信仰	銘
I-9-H-3_8	長崎県島原市上の町 1163-16	石祠	デイサイト	52	99	62	東	神道	
I-9-H-4_1	長崎県島原市上の町 888	石塔	デイサイト	43	103	69	東	道祖神	猿田彦大神
I-9-H-4_2	長崎県島原市上の町 888-2	石塔	デイサイト	28	63	34	東	道祖神	猿田彦大神
I-9-H-4_3	長崎県島原市上の町 888-2	石像	デイサイト	34	65	32	西	仏教	
I-9-H-5_1	長崎県島原市宮の町 727	石像	凝灰岩?	34	67	32	南	神道	
I-9-H-5_2	長崎県島原市宮の町 727	石塔	デイサイト	59	144	63	南	仏教	
I-9-I-1_1	長崎県島原市城内1丁目 1120	石塔	デイサイト	35	74	47	東	道祖神	
I-9-I-3_1	長崎県島原市上の町 1163-16	石祠	デイサイト	36	71	49	東	神道	
I-9-I-3_2	長崎県島原市城内1丁目 1185-1	石祠	デイサイト	55	97	61	南	神道	
I-9-I-4_1	長崎県島原市城内1丁目 1185-1	石祠	デイサイト	73	200	74	南	神道	
I-9-I-4_2	長崎県島原市上の町 897-5	石塔	デイサイト	57	69	74	東	神道	水神
I-9-J-4_1	長崎県島原市上の町 897	石祠	デイサイト	80	171	78	南	神道	
I-9-J-4_2	長崎県島原市上の町 900	石像						仏教	
I-9-J-4_3	長崎県島原市上の町 900	石塔	デイサイト	36	48	28	東	道祖神	猿田○大神
I-9-J-4_4	長崎県島原市城内1丁目 1188	石祠	デイサイト	89	112	66	南	神道	
I-9-J-4_5	長崎県島原市城内1丁目 1188	石祠	花崗岩	143	185	121	南	神道	
I-9-J-4_6	長崎県島原市城内1丁目 1191	石塔	デイサイト	41	87	38	東	道祖神	猿田彦大神
J-8-A-10_1	長崎県島原市江戸丁 1822-2	石祠	デイサイト	121	162	118	南	神道	
J-8-A-10_2	長崎県島原市江戸丁 1930	石祠	デイサイト	72	122	70	西	神道	
J-9-A-2_1	長崎県島原市城内1丁目 1182	石祠	デイサイト	46	131	50	西	神道	
J-9-A-2_2	長崎県島原市城内1丁目 1183-1	石祠	デイサイト	61	96	54	西	神道	
J-9-A-4_1	長崎県島原市上の町 908	石祠	デイサイト	50	75	35	東	神道	
J-9-A-4_2	長崎県島原市上の町 908	石塔	デイサイト	20	53	23	東	道祖神	猿田彦大神
J-9-A-4_3	長崎県島原市上の町 908	石塔	泥岩?	23	45	28	東	道祖神	猿田彦大神
J-9-A-5_1	長崎県島原市上の町 904-2	石祠	デイサイト	32	63	31	南	道祖神	猿田彦大神
J-9-A-5_2	長崎県島原市上の町 904-2	石祠	デイサイト	72	132	81	南	神道	
J-9-A-5_3	長崎県島原市上の町 908	その他	デイサイト	35	80	40	東	その他	
J-9-A-5_4	長崎県島原市上の町 864	石塔	デイサイト	36	89	48	南	神道	水神
J-9-B-1_1	長崎県島原市江戸丁 1925	石祠	デイサイト	80	163	83	南	神道	明治三十九年二月初年謹建 弓削久米男
J-9-B-1_2	長崎県島原市江戸丁 1916-4	石塔	デイサイト	50	112	40	東	神道	水神
J-9-B-1_3	長崎県島原市浦の川 1874	石塔					南	神道	
J-9-B-1_4	長崎県島原市浦の川 1874	石塔	デイサイト	53	98	60	南	神道	
J-9-B-1_5	長崎県島原市浦の川 1874	石塔	デイサイト	35	66	40	東	神道	ヤシキ神
J-9-B-2_1	長崎県島原市城内1丁目 1208	石祠	デイサイト	56	57 + α	59	東	神道	
J-9-B-2_2	長崎県島原市城内1丁目 1208	石塔	デイサイト	44	43 + α	35	東	その他	
J-9-B-2_3	長崎県島原市城内1丁目 1208-3	石塔	デイサイト	40	64	41	東	道祖神	
J-9-B-2_4	長崎県島原市城内1丁目 1206	石祠	デイサイト	75	115	90	南	神道	
J-9-B-3_1	長崎県島原市今川町 1846-5	石塔	花崗岩	36	76	40	南	神道	水神
J-9-B-3_2	長崎県島原市今川町 1846	石祠	デイサイト	78	148	62	南	神道	
J-9-B-4_1	長崎県島原市上の町 919	石塔	デイサイト	37	79	34	東	神道	
J-9-B-5_1	長崎県島原市上の町 918	石塔	デイサイト	39	96	45	東	神道	龍王水神
J-9-B-5_2	長崎県島原市上の町 856	石塔	デイサイト	11	31	17	南	神道	水神
J-9-B-5_3	長崎県島原市上の町 856	石祠	花崗岩? デイ サイト?	75	155	70	南	神道	
J-9-C-1_1	長崎県島原市浦の川 1880	石塔	デイサイト	58	108	66	南	神道	猿田彦大神
J-9-C-1_2	長崎県島原市浦の川 1880	石塔	花崗岩	13	24	17	南	神道	水神
J-9-C-2_1	長崎県島原市今川町 1842-7	石像	デイサイト	31	53	28	西	仏教	
J-9-C-2_2	長崎県島原市今川町 1312	石塔	花崗岩	105	83	102	南	神道	水神
J-9-C-2_3	長崎県島原市今川町 1307-1	石祠	デイサイト	33	57	33	南	神道	
J-9-C-3_1	長崎県島原市今川町 1846-2	石塔	デイサイト	42	77	39	東	神道	土主神
J-9-C-4_1	長崎県島原市今川町 1850-8	石像	デイサイト	19	51	23	南	仏教	
J-9-C-4_2	長崎県島原市今川町 1850-8	石祠	デイサイト	42	57	41	南	神道	
J-9-C-4_3	長崎県島原市今川町 1850-8	石塔	デイサイト	10	19	10	南	仏教	